福岡市埋蔵文化財調査報告書　第439集

史跡

板付遺跡

環境整備報告

1995

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第439集

史跡

板付遺跡

環境整備報告

平成７年

福岡市教育委員会

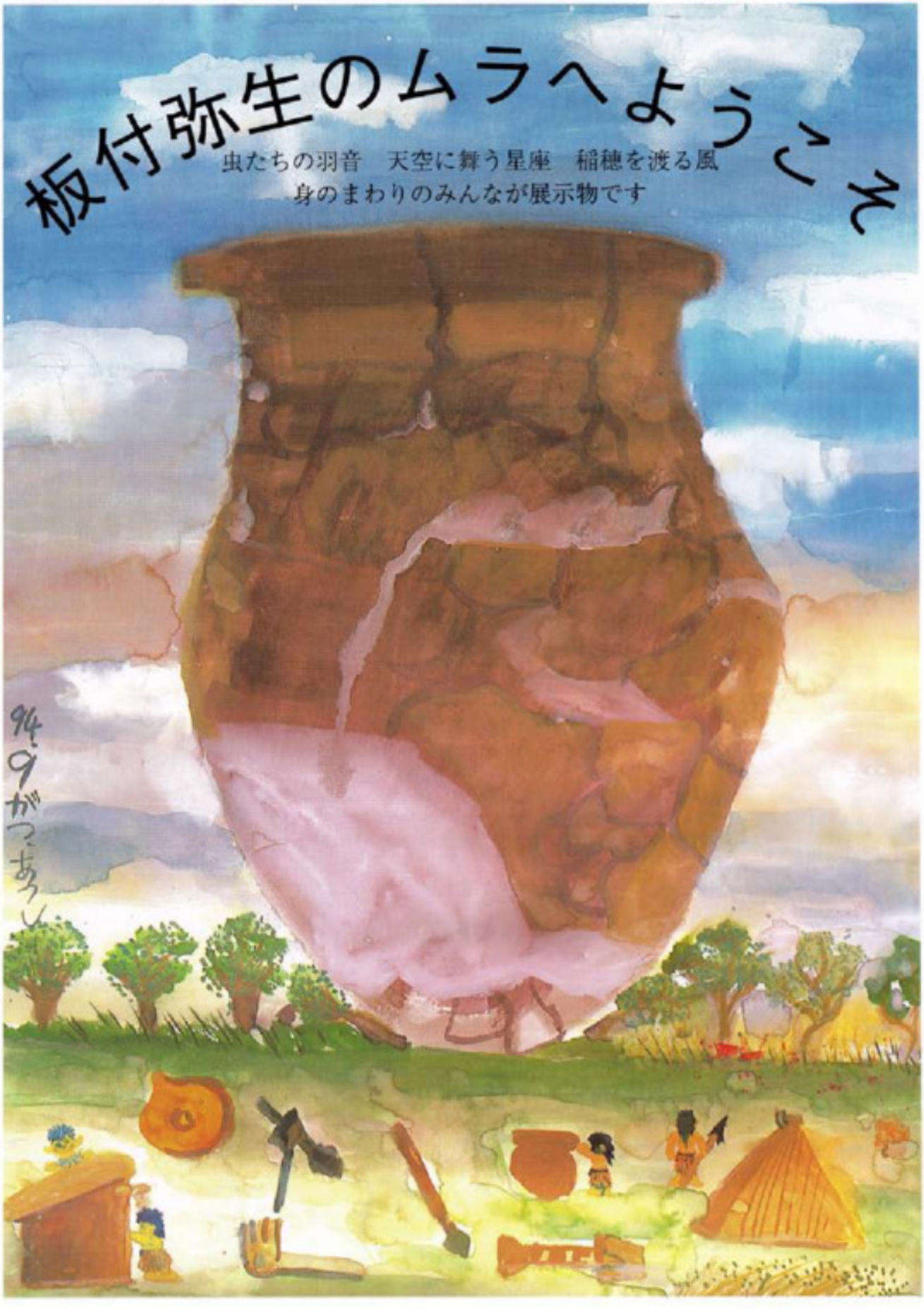
例　言

1．本書は、福岡県福岡市博多区板付２・３丁目にある史跡「板付遺跡」の環境整備報告書であり、『板付弥生のムラ』（愛称）の誕生記録です。
2．環境整備は、史跡西側（水田）部約9,000㎡を、文化庁の史跡等活用特別事業「ふるさと歴史の広場事業」の国庫補助事業で、平成元年度から平成３年度まで実施しました。史跡東側（環濠）部約18,000㎡は、自治省の「地域づくり推進事業」債で、平成４年度から平成６年度まで実施しました。
3．「ふるさと歴史の広場事業」で環境整備した史跡西側部の報告書は、平成４年３月に発行されています(福岡市埋蔵文化財調査報告書第314集)が、今回の史跡東側（環濠）部の環境整備と合わせて編集しました。
4．本書に使用した設計図のほとんどは、(株）歴史環境計画研究所が作成したものです。写真の一部は、森貞次郎先生、宇根豊さん、濱田一郎さんが撮影したものを使用しています。
5．環境整備報告書という目的から、「板付遺跡調査整備委員会」の検討結果や復元整備の根拠、活用計画、コンセプトなどを中心に編集しました。また、ガイドブックとしても利用できるように板付遺跡の発掘史や復元遺構の説明も加えました。
6．本書の執筆と編集は、力武卓治が担当しましたが、森貞次郎先生や鳥丸貞恵先生の原稿は、稲穂会で毎月発行している「板付弥生のムラだより」への寄稿原稿を転載しました。また杉原荘介先生の原稿は、明治大学考古学博物館の了解を得て掲載することができました。
7．本書に掲載した図面や記録類については、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田２丁目１－94 TEL 092-571-2921）に収蔵・保管していますので、ご活用ください。

目　次

Ⅰ　基本テーマ …… 4
Ⅱ　板付遺跡の歴史 …… 8
遺跡の発見
二つの土器を追って　中原志外雄 …… 12
板付遺跡初見　森貞次郎 …… 13
日本考古学協会の調査 …… 14
農業部会の調査 …… 16
福岡県板付遺跡調査実施について
杉原荘介 …… 16
福岡市教育委員会の調査 …… 18
縄文水田の発見 …… 20
史跡指定 …… 24
板付遺跡調査整備委員会 …… 28
基本設計案 …… 30
遺構確認調査 …… 33
内環濠　外環濠　南台地
Ⅲ　Bゾーンの環境整備 …… 40
板付遺跡弥生館 …… 44
展示　遺跡模型　映画　B.G.M
復元水田、用水路 …… 54
トイレ　ベンチ …… 58
Ⅳ　Aゾーンの環境整備 …… 60
敷地造成工 …… 62
遺構復元
環濠　土塁 …… 64
集落　竪穴住居 …… 68
貯蔵穴 …… 72
墓地 …… 74
弥生の道と門 …… 76
植栽 …… 77
史跡名称板と史跡標柱 …… 78
説明板　サイン …… 80
園路　外構 …… 82
安全、管理施設 …… 83
周辺整備とネットワーク …… 84
Ⅴ　活用と活動　ムラ人づくり …… 86
ムラ祭り …… 87
板付弥生教室 …… 88
ムラ人養成実技講座
「土器を作る」 …… 89
「貫頭衣を織る」 …… 90
いま、板付弥生のムラがおもしろい
鳥丸貞恵 …… 91
板付中学校発展会の活動 …… 94
板付北小学校の活動 …… 96
講演会『板付考古学』 …… 97
おわりに …… 99

扉絵　弥生人の家族　青村純三さん　作画



「板付弥生のムラ」
佐土原淳くん
（板付小学校６年生）

基本テーマ

弥生時代前期の板付弥生のムラ　の復元

板付弥生のムラ　完成予想図

定例市長会見（平成６年２月８日）

板付遺跡の環境整備について

－「板付弥生のムラ」東側環濠部の整備概要－

板付遺跡は、弥生時代はじめ（紀元前４世紀頃）の環濠に囲まれた集落、そのまわりの水田、墓地が一体となり、日本で稲作が始まった頃の様子を最もよく伝える遺跡として、全国的に知られた遺跡であります。その重要性から、昭和51年６月に国の史跡にも指定されました。

本市では、この板付遺跡を市民に愛され、親しまれる史跡とするため、平成元年度から環境整備を進めています。既に平成３年度に西側水田部の整備を終え、平成４年６月から「板付弥生のムラ」の一部として公開し、「板付遺跡弥生館」と復元水田を中心に市民参加事業などを開催しており、おかげ様で市民の皆さんにも好評を博しております。

この度は残る東側環濠部につきまして、弥生時代はじめの環濠集落の姿を再現することにいたしました。現在造成工事を進めており、平成７年度のユニバーシアード福岡大会前には公開できる予定です。内容としましては、史跡整備委員会で学術的に充分検討した結果に基づき、土塁をめぐらした深さ1.5m、幅６m、周囲約330mの環濠と竪穴住居12棟、貯蔵穴20基、門、小児甕棺墓群などを復元し、既に西側に復元しています水田とあわせ日本最古の稲作のムラとして再現いたします。

このように、環濠を復元することも、また環濠集落全体をまるごと復元することも、わが国では初めてのことであり、史跡整備の新しい試みとして全国的にも注目を集めるものと考えております。

この環境整備が完了いたしますと、定住するための集落とそれを支える生産場所としての水田、そして墓地など、弥生時代の生活空間のほとんどが揃うことになり、具体的に歴史を体験できる場として、市民の皆さんに親しんでいただけるものと期待いたしております。

福岡市長　桑　原　敬　一

板付遺跡

国史跡指定　昭和51年６月21日
福岡県福岡市博多区板付２、３丁目
面　積　　27,766.44㎡
板付遺跡弥生館
　福岡市博多区板付３丁目21－１
　☎ 092-592-4936
見学無料、休館は12月28日～１月４日
交通　西鉄バス　１、63番系統
　「板付団地第二」下車
　徒歩３分

南上空から見た板付遺跡

板付遺跡の歴史

1867（慶応３）年　通津寺境内より銅矛５本出土（通津寺過去帳）

1916（大正５）年　板付田端の甕棺墓地（墳丘墓）より銅剣、銅矛が出土

1950（昭和25）年　中原志外顕氏、縄文土器（夜臼式土器）と弥生土器の共伴を確認

1951（昭和26）年　日本考古学協会の発掘調査

1952（昭和27）年　日本考古学協会の発掘調査

1953（昭和28）年　日本考古学協会の発掘調査

1954（昭和29）年　日本考古学協会の発掘調査

（昭和27年 右より森貞次郎先生、大塚初重先生、杉原荘介先生）

1955（昭和30）年　福岡市に合併

1956（昭和42）年　「板付遺跡保存会」発足

1968（昭和43）年　日本考古学協会農業部会の発掘調査　板付遺跡保存会が「板付遺跡」を発行する

1969（昭和44）年　福岡市教育委員会範囲確認調査（通津寺境内）　日本考古学協会　環濠調査

1971（昭和46）年　板付団地建設工事に先立って行政発掘開始

1973（昭和48）年　「板付遺跡調査事務所」開設、公有地化事業スタートする

1976（昭和51）年　国史跡に指定

1978（昭和53）年　「縄文水田」発見

1988（昭和63）年　「板付遺跡調査整備委員会」発足

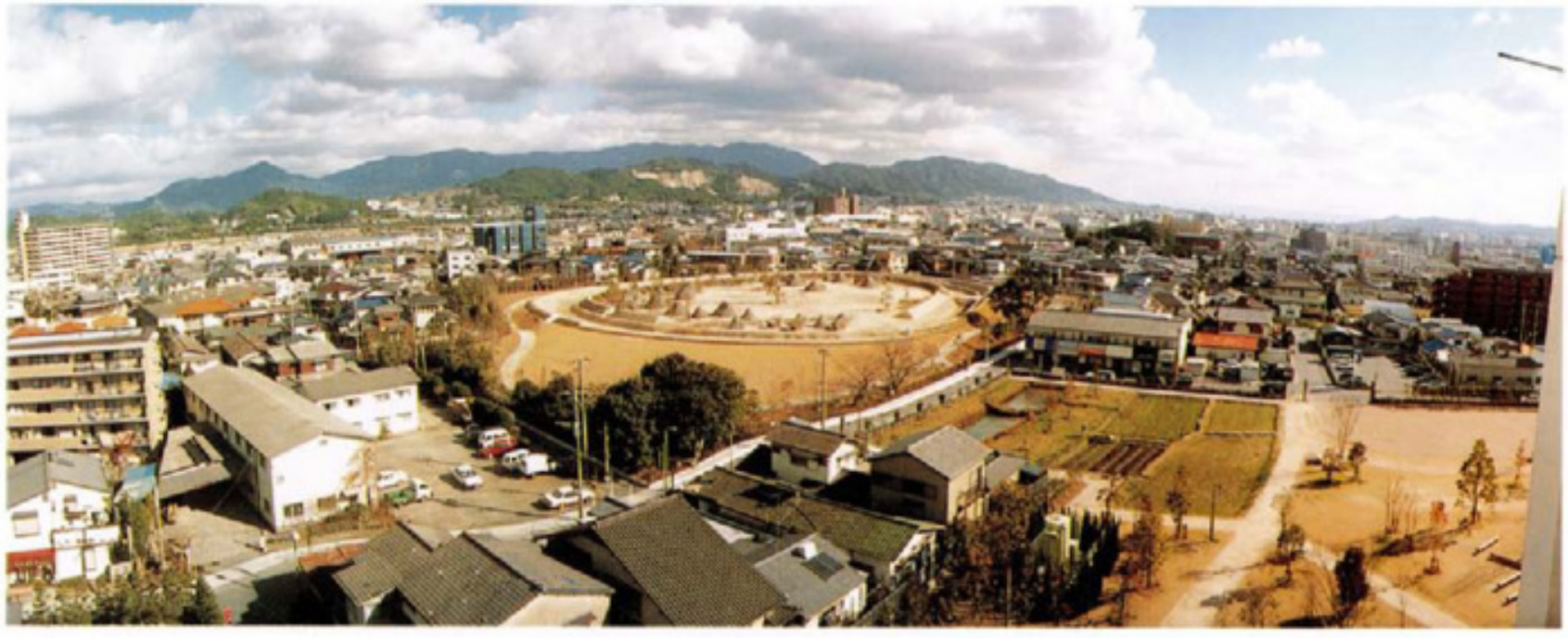
1989（平成元）年　文化庁の史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）に採択される

環境整備の基本計画作成　ガイダンス施設建設　内環濠内側の確認調査

日本最古の二重環濠と判明する

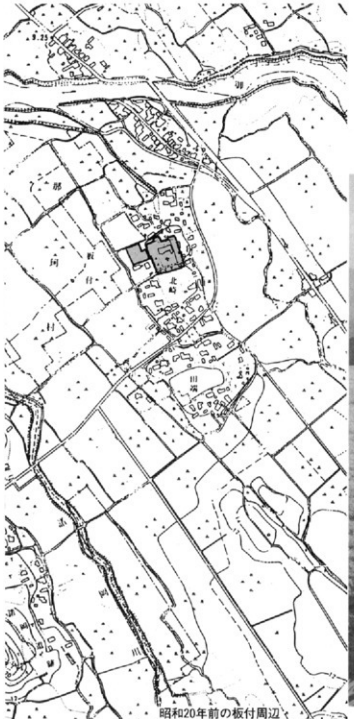
地元説明会を開催　遺跡説明会開催

1990（平成２）年　ガイダンス施設内装工事　大型遺跡模型製作
内環濠に陸橋部分を確認した
1991（平成３）年　ガイダンス施設の展示品製作
映画制作
水田復元、植栽工事
環濠部の実施設計　　「ふるさと歴史の広場事業」終了
1992（平成４）年　板付遺跡弥生館開園式
復元水田で田植え　　環濠部造成工事
1993（平成５）年　竪穴住居、貯蔵穴復元
土塁復元　　植栽工事
板付遺跡弥生館周辺整備
1994（平成６）年　園路舗装
弥生の門復元　Ａゾーン環境整備完了
1995（平成７）年　開園式予定　ユニバシアード福岡大会
周辺歩道整備

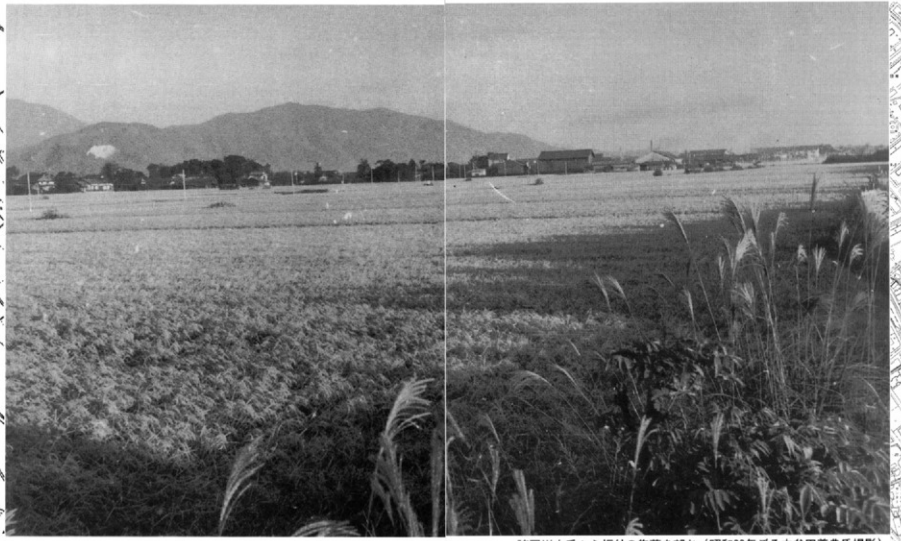


変貌する風景

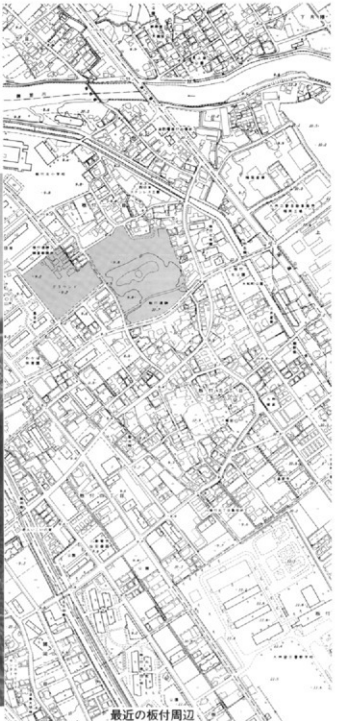
背振山と三郡山地に源を発して博多湾に流れる那珂川と御笠川は、下流域に肥沃な福岡平野を作りました。板付遺跡は、この平野のほぼ中央に位置した小高い台地にあります。古い地図や写真によると、現在の博多駅周辺まで水田が広がっており、板付遺跡の台地は、稲穂の波に浮かぶ船のように博多の街から見えたそうです。弥生人たちは、ここにムラをさだめ、日本で最初の米作りに励みました。



昭和20年前の板付周辺



諸岡川土手から板付の集落を望む（昭和28年ごろ中牟田義典氏撮影）



最近の板付周辺

板付遺跡の発見

大正５年、村人たちが深田の埋め立てのために板付田端にあった小高い盛土を切り崩していた時に甕棺の中から銅剣、銅矛が出土し、これを中山平次郎博士が考古学雑誌に報告したのが、板付遺跡の最初の紹介ですが、本格的な発掘は昭和26年からのことです。

登呂遺跡の発掘調査に引き続いて、弥生時代の始まりを究明するために、板付の台地にいよいよ学術的な発掘が展開されるようになります。その端緒を作り出したのは、中原青年の数年をかけた執念でした。

二つの土器を追って

中原志外顕

〔中原〕そしてとうとう昭和25年の正月休みの15日になるわけよ。中牟田義住さんの畑に行ったら、土器のかけらや石斧やらがこずん（積み上げてあるという意味）であるちゃん。

（力武）耕すのに邪魔になるからでしょう。

〔中原〕それまでそのあたりはちょいちょい行っていたから顔馴染みでね。　ばあちゃんがいい人でね。畑に入っても怒らんでくさ。その畑はゴボウ畑で、正月用のゴボウを深く掘っとんしゃったと。　じゃけん、いっしょんくたりに弥生前期の土器も夜臼式土器も引っ張り出してしもうとんしゃったい。バアーとね。

やったー。ついにヤッターと思うた。

（力武）夜臼式土器という名前は後で呼ぶようになるわけですけど、森貞次郎先生に聞いていた遠賀川式土器と一緒に出たわけですね。

〔中原〕そうそう、夜臼式土器と遠賀川式土器ね。縄文土器と弥生土器が一緒に出たというわけよ。　もう夢中で一つ残らず拾ってからくさ、ハンカチかなんかでくるんでからくさ、ポケットに入れてね。

あの頃は今みたいにカバン持ってカメラ提げてというような格好するわけじゃなし、まるでルンペンみたいな格好だよ。

（力武）その日も竹下の家から歩いて行かれたんですか？

〔中原〕そう、歩いてね。足は不自由だけど「板付を見るんだ」という一念でね。目的というか狙いはそのことだけだったからね。

（力武）午前中ですか？午後の事ですか？

〔中原〕午後やった。その畑に直接行ったわけではなくて、その小さな道を何度も何度もくさ、昭和23年のことやけど高山英彦さんと入ったことのある防空壕の前とか通津寺の前とかグルグル回ってね。

通津寺の中には入れんちゃん。　あの高野のじいちゃん（通津寺住職の高野貞厳さん）は偉い人やったけんね。でも一番僕の事を理解してくれた人やけどね。

そうこうするうちに夕方になってきたんよ。　板付から見るとちょうど西公園の方向に日が落ちるんよ。

まだ今みたいに高層ビルが建っていなかったでしょう。板付の畑からはずーっと見渡せるわけよ。

踏査や発掘していると、さあ今からという時に限って暗くなることがよくあるでしょうが。

（力武）そうですね。

〔中原〕ゴボウ畑で二つの土器を見つけたのもちょうどそんな時間やった。

（力武）その日はポケットに入れて帰ったわけですね？

〔中原〕土器を洗って箱に入れて翌日岡崎敬さんとこに飛んで行ったよ。

現在、中原さんは金隈遺跡甕棺展示館に勤務されています。平成３年９月に、考古学を始めた動機や板付遺跡発見の様子などについて語っていただきました。毎月発行している「板付弥生ムラだより」の３～５号に連載した一部を掲載しました。

1　岡崎敬先生（左）と森貞次郎先生
2　北西上空より（昭和27年撮影）

板付遺跡初見

森　貞次郎

新宮町夜臼遺跡の円形貯蔵竪穴の実測を匆々に済ませて、既に開始されていた板付遺跡の調査に合流するために奔った。昭和26年夏のことである。遺跡所在地の西南端の農家の納屋のはずれから北に向かってトレンチが設けられ、すでに巾２メートルほどの逆三角形断面の深く黒々とした溝が、幾何学的正確さで一直線にスーッと延びていた。深さ１メートル以上もの溝の中の包含層の断面には、縄文晩期終末とみられる形式の土器や最も古いとみられる弥生式土器の破片がみえる。私どもが憧れるように待ち望んだ情況をいまやたしかにこの眼でつかんだのである。この遺跡発見の端緒をつくってくれた中原志外顕氏に厚い感謝の念を捧げたことは勿論である。

それにしても、幾何学的な鋭いカッティングに近代的な感覚すら覚えるこのＶ字状溝は一体何なのか、見当もつかなかった。後日になって、ここがこの海岸平野の初期農耕集落の核をなす拠点集落であり、径80メートルにも及ぶ環状周溝の遺構の一部をなすものだとわかってみても、なお戦車を虜にする戦車濠にもまぎらわしいこの防衛施設の実態が、私どもが永いこといだきつづけてきた「豊葦原瑞穂国」のもつ平穏太平のイメージとどう対応させたらよいのか、困惑は消化不良のような重みで残ったが、やがては弥生農耕社会の実態の見直しを迫られることになったのである。

第２次調査のとき、遺跡の航空写真をとった。戦後はじめてのことであろう。当時日本の空をこの国の飛行機は自由には飛べなかった。遺跡のそばに住む板付空軍のＧＩ氏に人を介して頼み込んだのも、深い魂胆があってのこと、遺跡はこの台地一ぱいに拡がっているらしく思われるので、あわよくば、航空写真によってその全体像を把めないかというのである。空からみると気象状況や植生の状態、太陽光線の状況によっては、地下の遺構が地表面に幻のように浮かび上がって見えるのである。この効果をねらっての試みであった。この時はうまくいかなかった。

あれから40年近い。私どもが成し得なかった調査、願望だけに終わっていた調査、それらが昭和40年代以来継続して専門的調査機関によって素晴らしい効果があげられ、いまや国の指定史跡としてその保存と、史跡公園化が進行中であるという。研究者として、こんな有り難いおめでたいことはないのである。

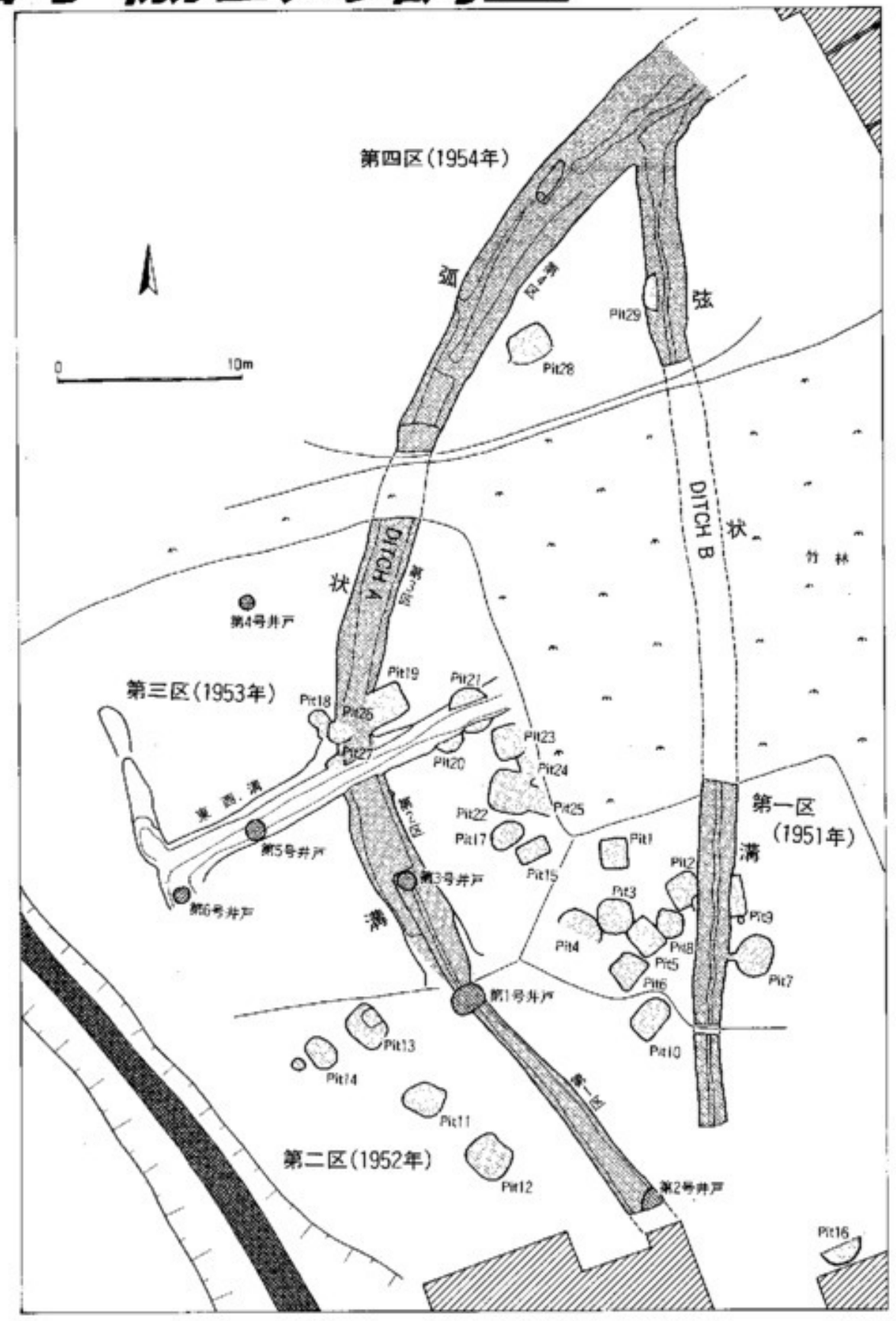
「板付弥生ムラだより」６号　1992年１月

日本考古学協会の調査

昭和20年、終戦とともに日本考古学協会が設立され、登呂遺跡の発掘調査が始まりました。考古学をはじめ、さまざまな専門分野の研究者が全国から集まって行われた発掘によって、弥生時代後期の水田や集落のようすが掘り出され、弥生文化の内容が明らかになりました。次の課題は、弥生時代が日本列島のどこで始まり、どのように発展したかということです。

一方九州では、昭和25年、板付の台地で縄文時代最後と思われる土器と弥生時代初めころの土器が共伴していることが確認され、この地で弥生時代が始まったのではないかと大きな期待が寄せられました。

杉原荘介明治大学教授を代表とする弥生式土器文化総合研究特別委員会は、翌26年より29年までの4か年をかけて、板付遺跡の発掘調査を実施することになりました。その結果、29基の貯蔵穴と6基の井戸が発見され、紡錘車、磨製石器などの遺物が出土しました。特に、台地にそって弓形に巡った断面逆三角形の深い溝から、日本種の炭化米が出土し、弥生時代の初めから、米作りが行われていたことが明らかになりました。



弦状溝と弧状溝

日本の米作りは板付遺跡ではじまった

これらの写真は、主任として発掘調査の中心的な役割を果たされた森貞次郎先生より頂いたものです。当時としてはたいへん貴重だったカラーリバーサルフィルムで撮影されています。

1．弧状溝の発掘作業　昭和29年
2．中央の鉢巻き姿は岡崎敬先生　昭和28年
3．板付台地より福岡市街地を望む
4．弧を描いてのびる溝　昭和29年
5．弧状溝と貯蔵穴　昭和27年
6．弧状溝　昭和29年
7．井戸から出た土器　昭和27年
8．弦状溝の断面　昭和29年
9．12号貯蔵穴　昭和27年
10．甕棺　昭和28年

農業部会の調査

昭和26年から29年まで行われた調査によって、板付遺跡は弥生時代最古の遺跡であり、日本で最初の水稲耕作が板付遺跡で始まったということなど、大きな成果を上げて終了しました。弓形の溝の両端は、さらにのびて台地を取り囲むのではないかと推測されましたが、発掘費用などの関係で中断していました。

それから14年後の昭和43年、日本考古学協会農業部会は、明治大学を中心にして溝の両端を追求する発掘を行うことになり、民家の庭先や畑に設定した試掘溝で、溝は通津寺を中心にして楕円に巡っていることをほぼ確認しました。弥生時代の最初のムラは、環濠集落であったということです。

杉原荘介教授は、環濠集落の全容解明のために、昭和49年まで執拗に発掘を継続されますが、当時、全国的な規模で大学紛争がおこり、考古学の専攻学生も無関係ではありえませんでした。

また、地元では、町自治会や公民館を中心にしていち早く「板付遺跡保存会」が組織され、地元の誇りである板付遺跡の保存と遺物の散逸を防ごうとする運動が展開されました。杉原教授は、このような社会情勢や地元の熱意を十分考慮して、積極的に対処されたことが残された書簡や地元の資料などで読み取ることができます。

福岡県板付遺跡調査実施について

明治大学考古学研究室　杉原　荘介

福岡県板付遺跡は昭和26年から昭和29年までの間、日本考古学協会の弥生式土器文化総合研究特別委員会（委員長杉原荘介）により調査され、遠賀川式土器の研究により、現在弥生時代最古の溝遺構、およびその付近に散在する竪穴式貯蔵庫群の遺跡であると確認されていた。

その後、成立した同農業部会（部会長杉原荘介）では、予算年度である昭和43年・44年度の当初の作業として、板付遺跡の弓状の溝の未発掘部分の調査、およびその溝内からの木炭の採集を行い、その放射性炭素による年代決定を試みた。そのうち、溝状遺構の調査が進むにつれて、それが集落の部分的な遺構ではなく、直径約90mをもつ環状の溝をなすものであることが明らかになった。板付遺跡については、いままで貯蔵庫群は判っていたが、集落の中心をなす住居跡の存在が不明であった。もし、それが存在するとすれば、この新しく知られた環濠内にあるであろうことが充分に推測されるであろう。

当時、すでに調査隊はその環濠内の発掘を次年度、すなわち昭和44年度の事業とすべく決意し、昭和43年10月29日、長野県松本市で行われた農業部会総会において、それが提案され、そして承認

5区の発掘調査（右端が杉原先生、昭和43年）

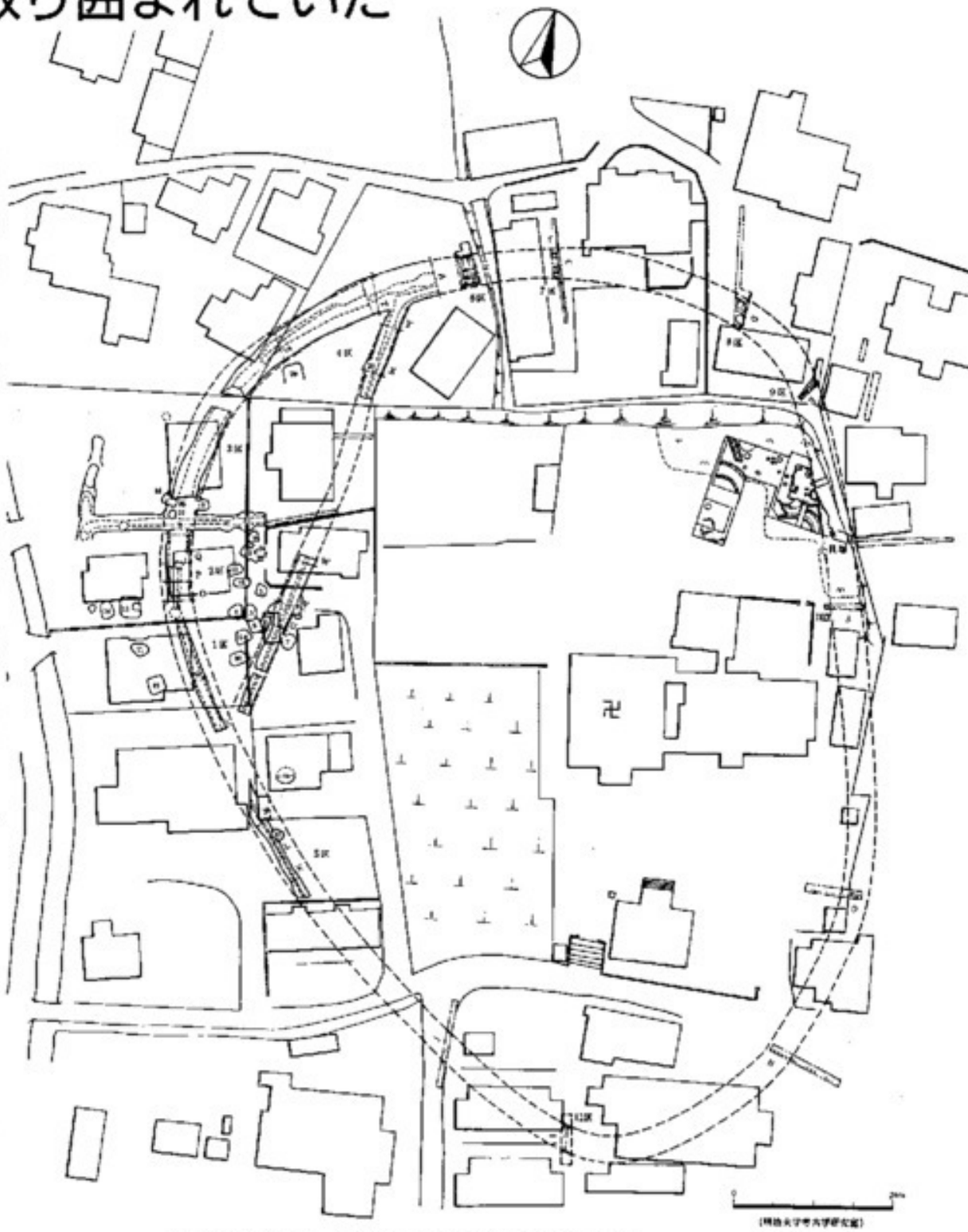
ムラは深い溝で取り囲まれていた

を得た。

現在、弥生時代最古の集落跡は知られていないが、この環濠内の地域からそれが明らかにされる可能性が強い。日本歴史の中において、米作農業を開始したという重要な時期における人々の住居生活、あるいは集落、すなわち社会状態を知るということは、日本歴史の研究上においては重要なテーマである。

いま、わが大学は「大学立法反対」等を中心として紛争のさ中にあるが、われわれはその重要な状況を充分認識し、学問・研究のもつ問題を活動の中から摘出し、真に学問・研究を見定めたいと考える。このような観点をもって、考古学研究室は前記の農業部会の本年度の事業に参加したいと思う。このような時期においてこそ、歴史学・考古学・農業の発生・共同体の構成という重要な問題と対決し、そして所期の目的を達することは有意義のことと考える。

明治大学考古学研究室には、同研究室が全国で発掘した遺跡の記録類がファイルされています。この原稿は、板付遺跡のファイルの中に保存されていました。昭和44年、夏の発掘調査を前にして学生や地元への説明用に書かれたものと思われます。



環濠の推定図（明治大学考古学研究室作成）

吉川弘文館『日本農耕社会の形成』より

福岡市教育委員会の調査

木製品の出土状況を記録する（現在の復元水田の下）

昭和40年代になると、のどかな田園風景だった板付遺跡の周辺にも、都市化の波が押し寄せてきました。板付遺跡の西側に広がっていた水田に、団地建設が計画されたのです。福岡市教育委員会では、昭和46年（1971）から、建設予定地の発掘に着手することになりました。発掘対象地は、板付遺跡の台地と諸岡川に挟まれた約15万㎡という広大な面積です。登呂遺跡のように、水田や水路などが発見され、弥生時代最初の米作りのようすが明らかになるものと期待されました。

発掘は、激しい湧き水と厚く堆積した砂に阻まれて、苦しい作業が続きましたが、水路や木杭で補強した水田の畦などの遺構が見つかり、また木製農具も数多く出土して、初期水稲農業技術を研究する上で重要な資料を得ることができました。

板付団地の建設が進むとともに、児童数が増加し、板付北小学校が新設されることになりました。事前に実施した発掘調査で、甕棺墓や土壙墓が発見され、板付環濠集落の共同墓地と推測されました。

昭和50年代になると、専用住宅の建設ラッシュとなり、環濠集落のある台地の保存が急務となりました。昭和51年に国史跡に指定されたものの、水田、墓地など集落全体を取り込んだ面積ではなかったために、周辺で行われる開発については、小面積でも発掘を行ない、集落の全体像をつかむように努めました。

これまで60次を超す発掘調査が行われていますが、板付遺跡の全容が明らかになったわけではありません。むしろ、昭和53年に話題になった「縄文水田」の発見のように、調査のたびに新しい事実が掘り出され、謎も深まっています。

押し寄せる都市化の波

昭和44年、通津寺本堂北側の発掘で、竪穴住居跡１軒が確認されました。福岡市教育委員会としては、最初の発掘でした。

児童数の増加にともない板付北小学校建設が計画されました。甕棺墓や土壙墓などの弥生時代の共同墓地と貯蔵穴群などが発見されました。

板付団地の建設に先立って広い水田部を発掘しました。木杭や丸太材で補強した用水路や畦が見つかりました。

これまでの成果は、暑い日も寒い日もがんばった作業員の皆さんが掘り出しました。

縄文水田の発見

昭和53年、新聞各社が「板付遺跡で縄文水田発見」という衝撃的なニュースを報道しました。その発見場所は、板付遺跡環濠部入り口の県道を挟んだ西南側で、G－7ａと呼んでいる地区です。用地買収に応じた方の移転先でした。発掘作業は、上から慎重に土層を剥がしていきます。普通は上の土層ほど新しく、下ほど古い遺物が出土し、その遺物によって時代や堆積の原因がわかります。この発掘区では20数層の土層が堆積していました。そのうち第7、9層は、水田耕作土で弥生時代最初の土器である板付Ⅰ式土器と縄文時代最後の土器である夜臼式土器が一緒に発見されました。台地に環濠が掘られたころと同じ時期の水田ということです。図のように東側には、北に流れる水路と水量を調整した井堰があり、また水路と水田を結ぶ取排水口も見つかりました。水田は洪水の砂で覆われていましたが、砂を取り除くと指先まではっきりとわかる弥生人の足跡が無数に見つかりました。外に大きく開いた親指は、大地を強く踏みしめていたのでしょう。現代人の足とはあまりにも違います。発掘が進むにつれて、この下にも水田があることがわかりました。最下層の水田は、同じように水路、井堰、取排水口があり、木杭や矢板で補強した畦で長方形に区画されていました。この土層からは、夜臼式土器の他に米作りを証明する木製農具、石包丁（穂摘み具）、炭化米なども出土しました。それまで弥生時代最初の土器と考えていた板付Ⅰ式土器のさらに下の土層で見つかったということは、米作りは縄文時代まで遡ることになり、時代区分や弥生時代の文化要素、定義などの再検討を迫ることになりました。

その後、博多区雀居遺跡や那珂遺跡などでも夜臼式土器の時期に米作りを始めたムラが確認され、この時期を縄文時代ではなく、「弥生時代早期」と呼ぶ学説も提出されています。

G－7ａ区の発掘作業

水田に残った足跡

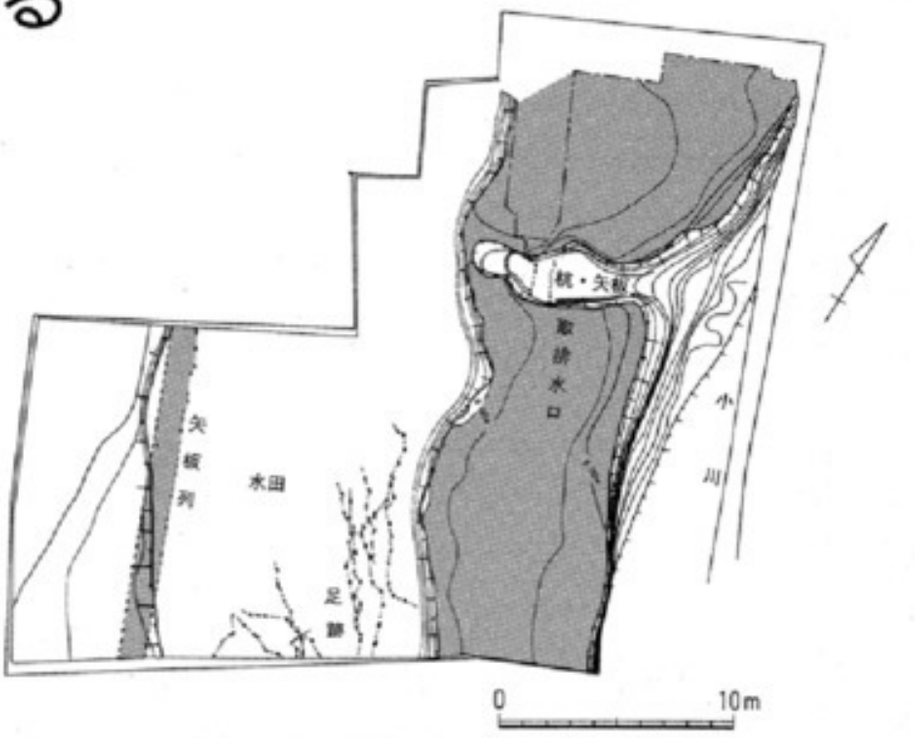
米作りの開始がさらにさかのぼる

板付Ⅰ式土器期の水田

一部に砂層を挟んで2枚見つかった。水田の形は、発掘区の東端を北流する用水路と並行する長方形で、1枚の大きさは上の水田が、幅18m以上、長さ26m（468㎡以上）、下の水田は幅11m、長さ26m以上（286㎡以上）の面積だったと考えられています。

夜臼式土器期の水田

人工的に掘られたと考えられる水路は、幅2m、深さ1mで、台地に沿って直線的に北にのびています。取排水口は、上の水田に比べて小さくなっています。水田は、南北に細長い区画で、幅6～10m、長さ50m以上（500㎡以上）あり、多量の炭化籾殻が発見されました。



板付Ⅰ式土器期の水田

夜臼式土器期の水田

1　G－7a区の調査　　2　夜臼式土器期の水田のようす

発掘調査地点

発掘調査一覧表

次	調査地点	所在地	面積㎡	番号	報告
1	日本考古学協会	板付2丁目	880	5101	1002
2	環濠 明治大学	板付2丁目	120	6804	
3	通津寺境内	板付2丁目12−16	160	6907	008
4	環濠 明治大学	板付2丁目	10	6910	
5	環濠 福岡県	板付2丁目	80	7011	
6	板付団地	板付2丁目 3丁目	7,266	7102	035
7	H−8	板付4丁目2−1	48	7309	029
8	D−6・7	板付5丁目15−5	32	7310	029
9	板付第2団地	板付4丁目	68	7311	029
10	F−9a	板付5丁目7−93外	150	7408	031
11	D・E−9	板付5丁目10−5	100	7409	031
12	環濠 明治大学	板付2丁目	120	7417	
13	F−8a	板付5丁目7・124	30	7507	036
14	G−5a	板付2丁目9−6	600	7508	036
15	G−6a	板付2丁目11−13	90	7606	038
16	G・H−5	板付2丁目9−1	530	7607	038
17	H−5	板付2丁目10−4	140	7608	038
18	505号線1次	板付2丁目地内	1,140	7609	039
19	505号線2次	板付2丁目地内		7619	048
20	F−5a	板付2丁目12−15	80	7713	049
21	F−7a	板付5丁目3−26	110	7714	049
22	F−5b	板付2丁目12−19外	100	7715	049
23	F−8b	板付5丁目7−18外	110	7716	049
24	F−9a	板付5丁目7−89	6	7717	049
25	F−5c	板付2丁目12−10外	160	7837	049
26	F−7b	板付5丁目3・26	165	7838	049
27	F−6a	板付5丁目3−14	340	7839	049
28	F−6b	板付2丁目12−54外	340	7840	049
29	E−9b	板付5丁目3−4	80	7841	049
30	G−7a	板付5丁目2−2	60	7842	049
31	G−7b	板付5丁目2−1	520	7843	049
32	F−7c	板付5丁目3−26	230	7844	049
33	F−7d	板付5丁目3−26	90	7845	049
34	E−5・6	板付2丁目13−13外	910	7934	073

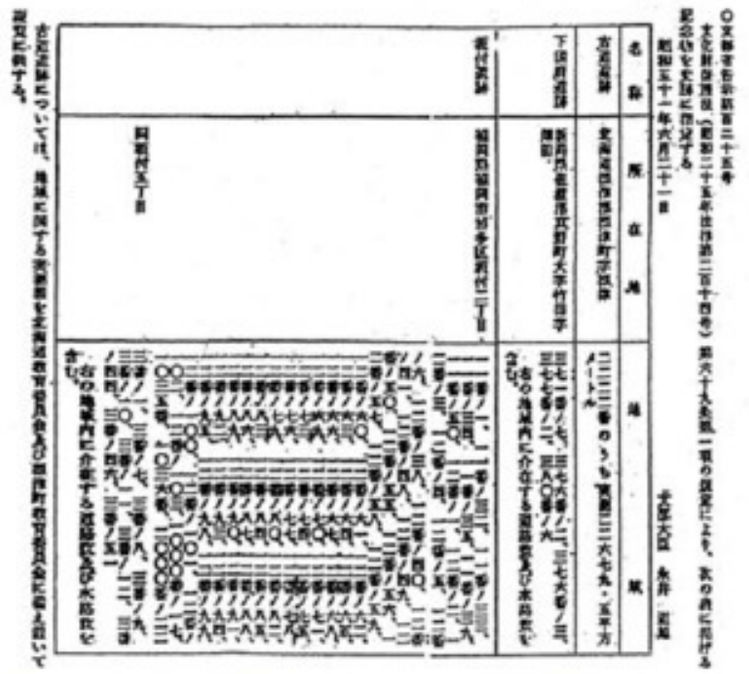
次	調査地点	所在地	面積㎡	番号	報告
35	G−5b	板付2丁目7−21	30	7947	065
36	E−5b	板付2丁目13−14	450	8136	083
37	E−5c	板付2丁目12−34	50	8137	083
38	G−8a	板付5丁目1−10	50	8139	083
39	D−7a	板付5丁目14−3	480	8140	083
40	F−7e	板付5丁目3−19	116	8223	098
41	G 7b	板付5丁目1−14	370	8437	115
42	F 7f	板付5丁目3−17	255	8438	115
43	E−7a	板付5丁目	80	8439	135
44	F−5b	板付2丁目	126	8440	135
45	G−6b	板付2丁目	135	8531	135
46	F−5c	板付2丁目	122	8542	135
47	H−8・9	板付5丁目2−20	227	8607	154
48	F−5f	板付2丁目12−28外	56	8614	154
49	H 5b 外	板付2丁目94外	140	8628	171
50	E−8	板付5丁目7−39	83	8654	154
51	F−8f	板付5丁目7−133	5	8661	154
52		板付4丁目4−4	1,119	8711	
53	F−8b	板付2丁目10	130	8737	206
54	遺構確認環濠部	板付2丁目	9,300	8866	410
55	F 5i	板付2丁目12	163	8901	362
56	F−8・9	板付4丁目9−2	720	8907	
59	遺構確認環濠部	板付2丁目	9,300	8990	410
60	遺構確認	板付2丁目9	800	9050	410
61	遺構確認 G−4．5 E−6c	板付5丁目5−2	100	9051	410
62	遺構確認 G 4b	板付2丁目7 1	250	9052	410
63	遺構確認E−8	板付5丁目7−6	750	9141	410
64	遺構確認E−8	板付5丁目7−6	200	9226	410
65	遺構確認F−8	板付5丁目2−1	81	9330	410
66	遺構確認E−8	板付5丁目7−6	120	9331	410
67	道路新設	板付2．3丁目		9440	

57、58次は欠番

国史跡に指定

日本考古学協会によって昭和26年から始まった発掘調査は、その後、明治大学・九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へと引き継がれました。発掘のたびに教科書を塗り替えるような大発見が相次ぎ、水稲農耕の開始と展開、弥生文化の形成などの解明に貢献しています。毎年、考古学専攻の学生たちが発掘に参加し、多くの研究者や歴史ファンが訪れ、弥生研究のメッカになりました。また、全国の遺跡保存運動のさきがけ的な役割を果たした「板付遺跡保存会」の積極的な活動や地元の方々の深い理解と協力が実って、昭和51年６月21日に国史跡に指定されました。

弥生時代前期の土器



庁保記第９の52号

福岡市

文化財保護法（昭和25年法律第214 号）第69条第１項の規定により、下記１の記念物を下記２によって史跡に指定します。

昭和51年６月21日

文部大臣　永井道雄

記

１．（１）名称　板付遺跡

（２）所在地及び地域　別添のとおり

２．（１）指定理由

（ア）基準

特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準　史跡１（住居跡）による。

（イ）説明

板付遺跡は、福岡平野の低台地上に形成された環濠を伴う弥生時代の集落跡である。低台地に南北約117メートル、東西82メートルの卵形を呈する周濠が巡らされている。

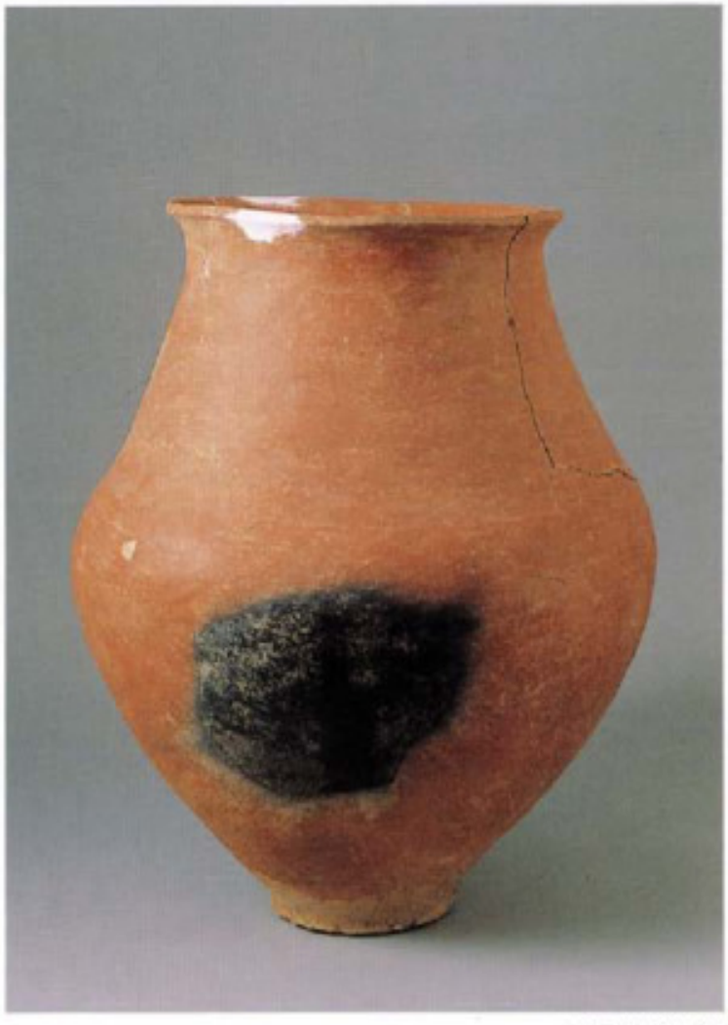
周濠内では住居跡、袋状貯蔵穴、井戸等が周濠外の東南方の低地では水田遺構、溝等が検出され、また、出土品としては、夜臼式土器、板付Ⅰ－Ⅱ式に属する壺、甕形等の土器、石鏃，石槍等の石器、土製品及び木製品が発見されている。

北九州特に玄界灘に面する一帯は日本において最初に弥生文化が形成された地域として知られるが、板付遺跡はそのうちでも最も著名な遺跡であり、環濠集落が当時から作られている点からも弥生文化形成期における農耕村落の在り方を考える上で一典型を示すものである。

このように板付遺跡は、弥生文化を解明していく上で欠くことのできないものであるとともに、農業生産経済に基づくその後の日本の歴史の進展を考える上で記念すべき重要な遺跡である。

（２）官報告示　昭和51年６月21日付け

文部省告示第125号



夜臼式土器

史跡の公有地化始まる

福岡市教育委員会は、史跡申請に先立つ昭和48年、現地に「板付遺跡調査事務所」を開設しました。ここを本拠地にして、板付遺跡周辺の発掘調査と用地買収、家屋の移転補償などの交渉に取り組むことになりました。交渉に当っては、板付遺跡の歴史的な重要性や遺跡保存と史跡整備の必要性を充分に説明し、理解していただくように努めました。この結果、日本考古学協会の発掘以来変わらぬ協力を得ることができ、52戸の家屋と通津寺の移転、27,656㎡の用地取得が昭和61年度に完了しました。

史跡指定範囲図

地元の誇り、そして協力

公有地化が進む板付遺跡（西側上空より　昭和53年撮影）

板付遺跡調査整備委員会発足

14年間の公有地化事業が完了して、いよいよ史跡整備に着手することになります。基本計画策定に当たって、史跡整備の方針や方法などについて専門的な指導、助言を受け、学術的に根拠のある環境整備を行うために、考古学、建築学、造園学などの研究者、文化庁、福岡県教育委員会からなる「板付遺跡調査整備委員会」を発足させました。毎年、現地視察で整備工事の進み具合を報告するとともに、細かい指導を受けました。

根拠のある整備を

委員長			
	横山　浩一	福岡市博物館館長	考古学
副委員長			
	大塚　初重	明治大学教授	考古学
委員			
	坪井　清足	大阪文化財センター理事	考古学
委員			
	佐原　眞	国立歴史民俗博物館副館長	考古学
委員			
	西谷　正	九州大学教授	考古学
委員			
	小田富士雄	福岡大学教授	考古学
委員			
	下條　信行	愛媛大学教授	考古学
委員			
	牛川　喜幸	奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長	造園学
委員			
	杉本　正美	九州芸術工科大学教授	造園学
委員			
	山内　豊聡	九州産業大学教授	水工土木学
文化庁			
	田中　哲雄	主任文化財調査官	

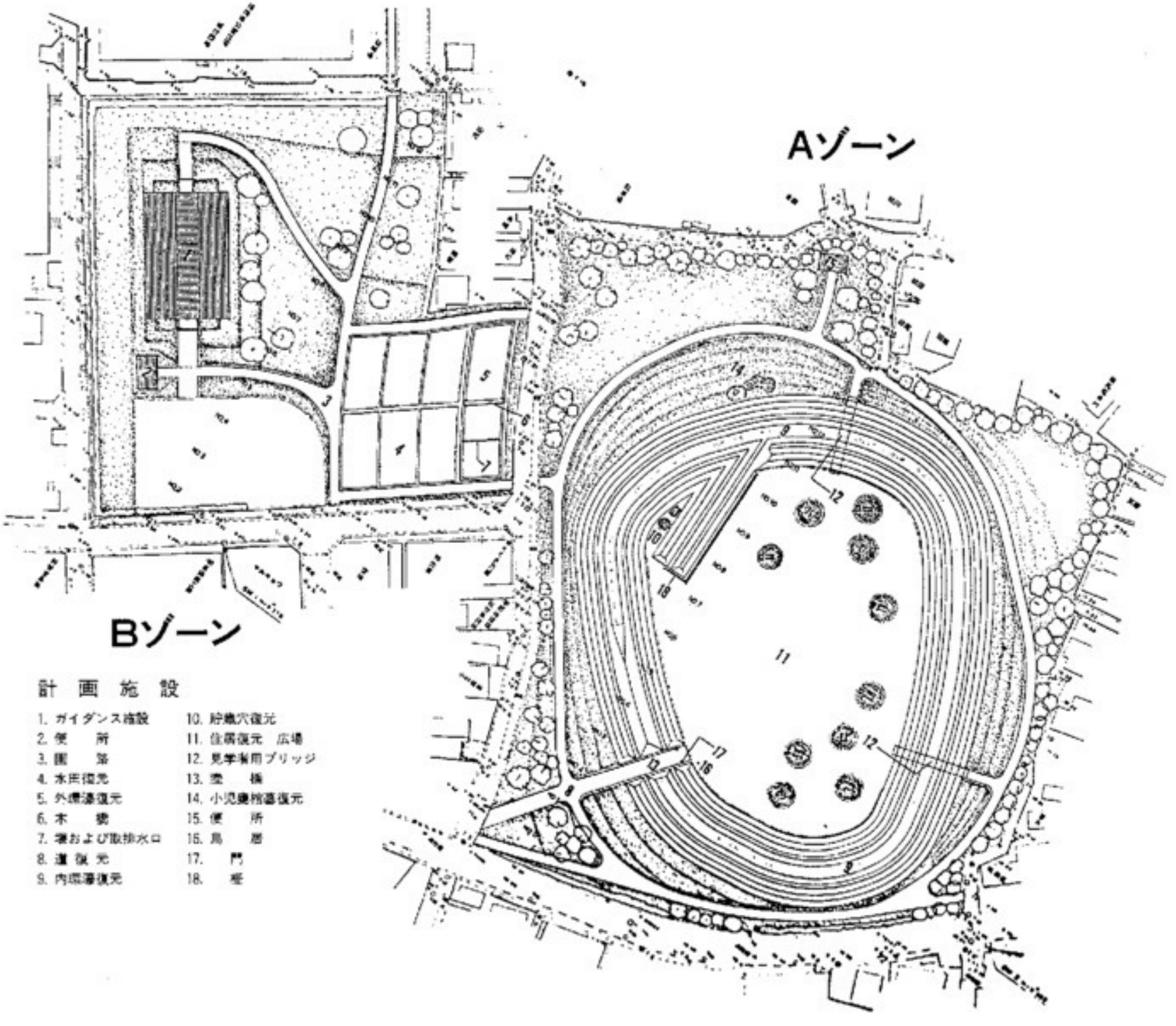
板付遺跡調査整備委員会設置要綱

（趣　旨）
第１条　この要綱は、板付遺跡調査整備委員会の設置に関し、必要な事項を定めるものとする。
（設　置）
第２条　板付遺跡の調査及び調査整備事業を適正に実施するため、福岡市教育委員会（以下「教育委員会」という）に板付遺跡調査整備委員会(以下「整備委員会」という)を置く。
（整備委員会の職務）
第３条　整備委員会は、前条の目的を達成するため、教育委員会が行う調査、保存整備計画の策定及び整備事業の実施に関し、必要な指導助言を行うものとする。
（組　織）
第４条
１．整備委員会の委員定数は、15人以内学識経験者のうちから教育長が委嘱する。
２．前項の委員の任期は２年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
３．委員は再任されることができる。

（委員長及び副委員長）
第５条
１．整備委員会に委員長１人及び副委員長１人を置く。
２．委員長及び副委員長は、委員の互選による。
３．委員長は、整備委員会を代表し、会務を総理する。
４．副委員長は、委員長を補佐し、委員長の事故があるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。
（会　議）
第６条　整備委員会の会議は、委員長が必要あると認めるときに招集する。
（庶　務）
第７条　整備委員会の庶務は、教育委員会文化部文化課において処理する。
（その他）
第８条　この要綱に定めるもののほか、整備委員会に関し必要な事項は、教育長が定める。
附則
この要綱は、昭和63年11月１日から施行する。

基本設計案

体験学習の場に



計 画 施 設

1. ガイダンス施設
2. 便　所
3. 園　路
4. 水田復元
5. 外濠湧復元
6. 木　橋
7. 堰および取排水口
8. 道復元
9. 内堀湧復元
10. 貯蔵穴復元
11. 住居復元　広場
12. 見学者用ブリッジ
13. 土　橋
14. 小児墳棺墓復元
15. 便　所
16. 鳥　居
17. 門
18. 柵

発言要旨

（平成元年度　第2回）

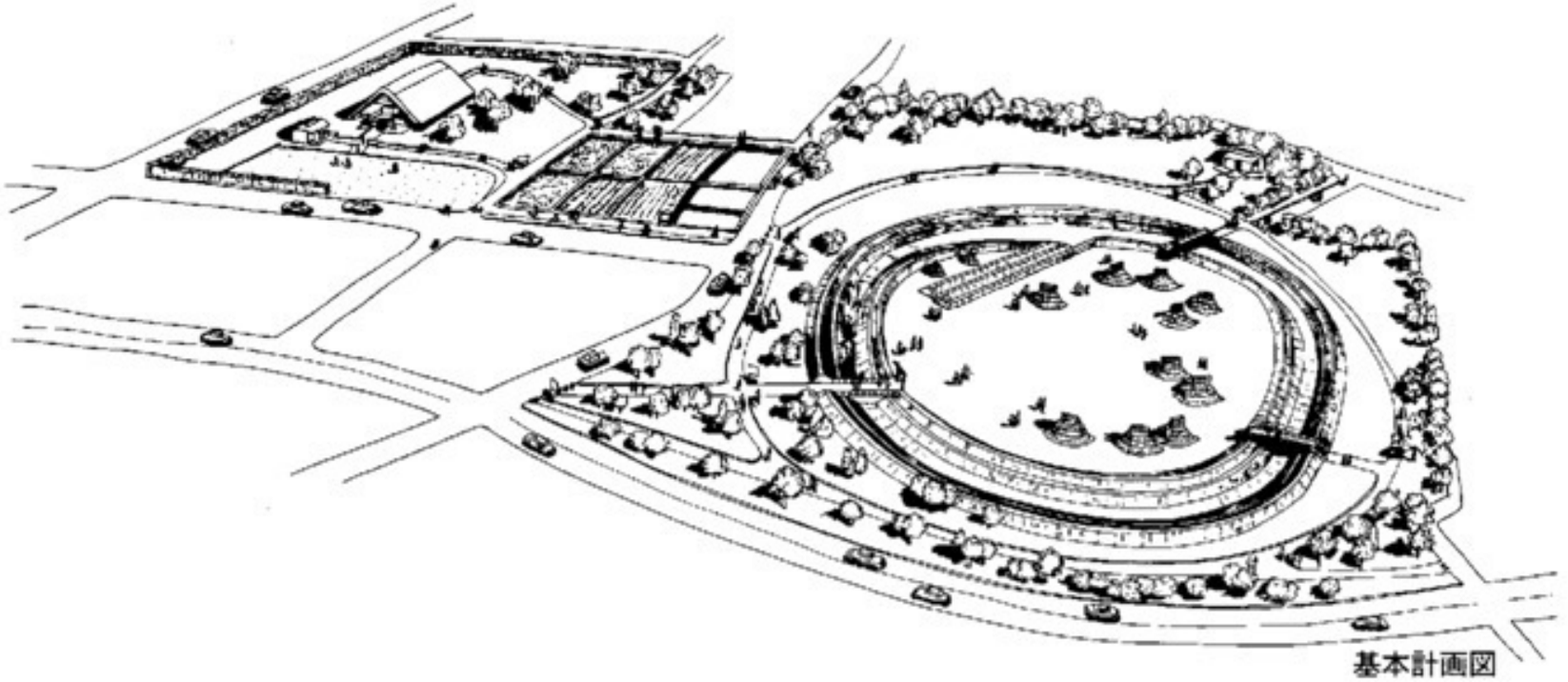
（佐原眞委員）佐賀県吉野ケ里遺跡より300年も前に外濠と内濠があったということは、非常に衝撃的です。外濠の全体をぜひ確認して欲しいが、掘らなくても遺構がわかる探査方法もあるので、早くて費用がかからない合理的な方法で理論的に調べていただきたい。内濠の両側にあった土塁の復元に際しては盛土するのか。濠の復元についても全体を全部同じように掘るのではなく、ある部分については手を加えずに放置しておく等、いろんな状態で見せる方法もある。また、当時の状況を推測して実験的な整備もやってみてもよいと思う。

（大塚副委員長）現在の整備計画の中で、体験学習などの活用をどのように計画しているのか。竪杵を使って臼で籾をつかせる様なことを行事としてやるように計画する必要がある。それに、ガイダンス施設の中二階の張出し部分にテラスのようなものを作って、遺跡全体を見渡せる高い場所が欲しい。ガイダンス施設はもっと西にあった方がよい。また、駐車場の整備について、史跡指定区域以外にも作るかどうかなど、よく考えて計画してほしい。

（横山委員長）水田、住居、墳丘墓などいろいろと復元する遺構が多いが、どこまで作るのか検討も必要です。

（大塚副委員長）現代人は、かなりリアルに表現していないと満足しないところがある。板付遺跡は復元住居をはじめ、いろいろやってもよいのではないかと思う。水田の面積や植栽の木の数ももっと増やした方がいいのではないか。

（牛川委員）板付遺跡は当時のムラを再現する実験場所に徹した方がすっきりする。下の遺構についてははっきりわからないが、あと何か所か確認して、図面の上で復元するように割り切った方がよい。全体を整備するに当たって、中央の道路が大きな問題だ。代替ができるかどうかが大きなポイントになる。整備については、展示館とかいろんなものを作ろうということであるから、ガイダンス施設や駐車場を持ち込んでもよいと思う。そういう意味では今までの整備より進んでいると思う。



基本計画図

委員会の検討

【昭和63年度】

第1回　昭和63年11月11、12日

（1）横山浩一先生を委員長に、大塚初重先生を副委員長に選任した

（2）整備計画について
65年度をめどに基本計画を策定すること

【平成元年度】

第2回　平成元年　5月11、12日

（1）昭和63年度の調査概要
昭和26年以降のこれまでの調査の結果、二重環濠であることを確認

（2）史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）を申請中である

（3）板付遺跡の現地視察

（4）平成元年度調査計画について

＊平成元年6月15日付で史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）に採択される

第3回　平成元年9月7日、8日

（1）平成元年度の遺構確認調査報告　南西部で幅4mの陸橋が検出された。弥生時代後期初頭の住居跡から小銅鐸を検出

（2）史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）に採択されたため全体基本計画・設計を早急に策定する

第4回　平成2年2月21、22日

（1）板付遺跡環境整備基本計画（案）
基本計画案についての検討と、基本計画・設計を定めた

（2）平成2年度整備事業について
ガイダンス施設内装、遺跡模型製作工事

【平成2年度】

第5回　平成3年3月22日

（1）平成2年度遺構確認調査報告
縄文時代晩期の円形住居跡を検出。外濠と水田跡を確認した

（2）平成3年度整備事業について
ガイダンス施設内装工事、敷地整備等

（3）平成3年度整備計画について
環境整備、Bゾーン、水田跡等の復元、Aゾーン（内環濠）の実施設計

【平成3年度】

第6回　平成3年7月9日、10日

（1）現地で平成2年度整備工事の報告

（2）平成4年度の整備事業の説明と検討
水田の復元方法や展示内容の変更などを説明し、活用法、安全対策などの検討

（3）Aゾーン（環濠部）実施設計について

【平成4年度】

第7回　平成4年6月25、26日

（1）現地で平成3年度整備工事の報告

（2）盛土による遺構保存について環濠と土塁の復元形状について検討

（3）遺構復元について
竪穴住居、貯蔵穴、甕棺墓などの復元法の検討。特に貯蔵穴群を囲む土塁の復元処理について

（4）Bゾーンの整備工事について

（5）遺構確認調査について
平成3年度に実施した南台地の調査報告と平成4年度の計画について

＊6月26日　Bゾーン板付遺跡弥生館開園式

【平成5年度】

第8回　平成5年7月1日

（1）現地で平成4年度の整備工事の報告

（2）平成5年度整備事業について

（3）遺構復元（竪穴住居の配置、貯蔵穴、甕棺墓の復元実施）

（4）Bゾーンと周辺整備について

（5）遺構確認調査について
南台地と外環濠の物理探査の結果報告

（6）板付遺跡弥生館の主催事業について

【平成6年度】

第9回　平成6年7月8日

（1）平成5年度の整備工事について
現地でA、Bゾーンの整備工事を報告

（2）平成6年整備事業について

（3）平成5年度の遺構確認調査の報告

（4）主催事業の報告と今後の計画について

昭和63～平成2年度　二宮忠司　担当
平成3～平成6年度　力武卓治　担当

遺構確認調査　全貌をつかむ

板付遺跡周辺では、昭和40年代後半から住宅建設が進み、それにともなって緊急調査も急増します。墓地や水田などが確認され、板付遺跡を面的に考えることが出来るようになりました。しかし史跡地内では、発掘例が少なく、竪穴住居は何軒あるのか、またどんな配置で集落が構成されているのかなど肝心なことが分からないままでした。史跡整備の遺構復元は、想像や推測ではなく発掘で確認したものだけを復元するのが原則です。このため、基本計画策定に先立って遺構確認調査を行い、その資料を整備計画に生かすことになりました。特に環濠内側の全面発掘、外環濠の確認、南台地の発掘に重点を置き、平成５年度まで継続して調査しました。

この発掘作業自体が、展示物と言う考えから近隣の小、中学校や市民に参加を呼びかけました。子供たちと一緒に作業をしながら、発掘の目的や楽しみを話すことができました。

内環濠の調査

これまで行われた環濠の調査は、狭い試掘溝だったために、その位置をつなぎ合わせて全体の形状を推測していましたが、今回の全面発掘で、私たちは初めてその姿を見ることができました。

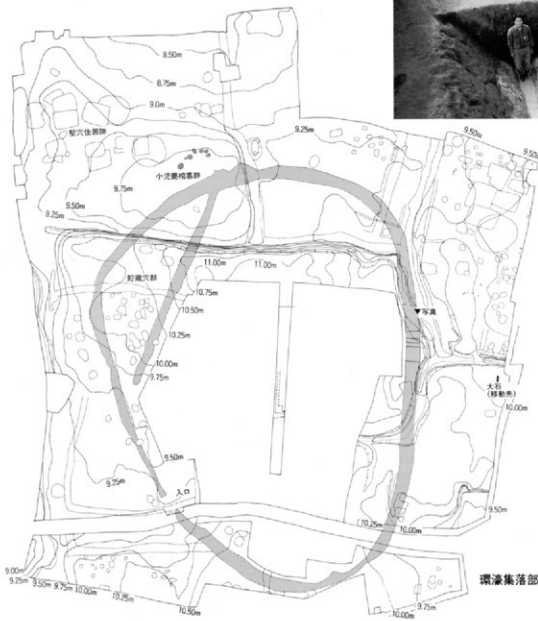
環濠は一周しないで南西部が途切れており、ムラの入り口になっています。また環濠の外側に小児甕棺墓や竪穴住居跡が新たに発見され、集落の構成や展開などを明らかにする多くの資料が得られました。特に弥生時代後期の方形竪穴住居跡から小銅鐸が出土し、ムラの祭りを具体的に想像できるようになりました。しかし、環濠内側は、すでに深く削られ、期待された竪穴住居跡は１軒も発見できませんでした。

切り合った二つの竪穴住居跡(小銅鐸が出土した)

環濠部の全景（北西から）

初めて姿をあらわした環濠集落

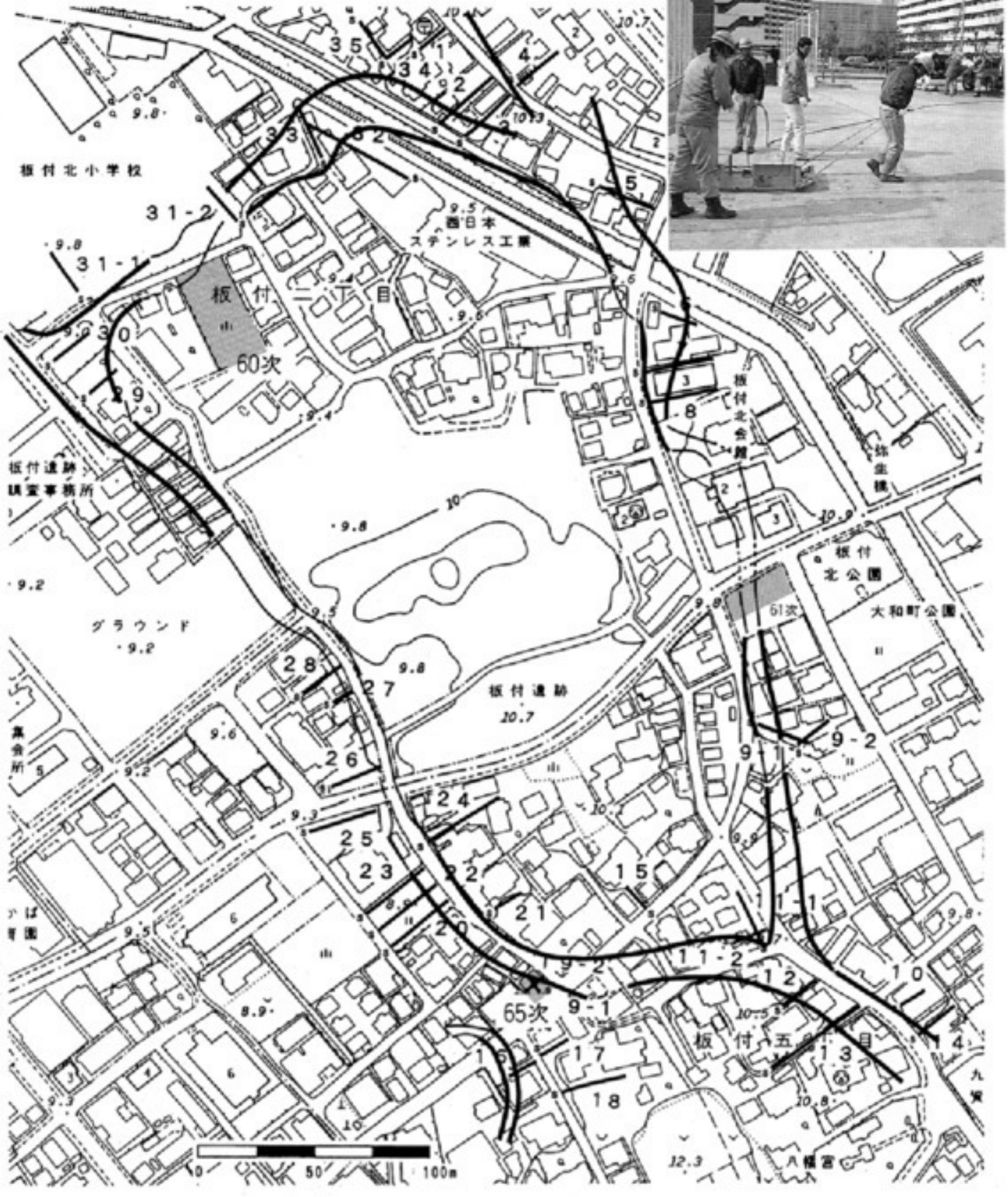
V字形の深い環濠



環濠集落部の遺構配置図（縮尺1／100）

外環濠の調査

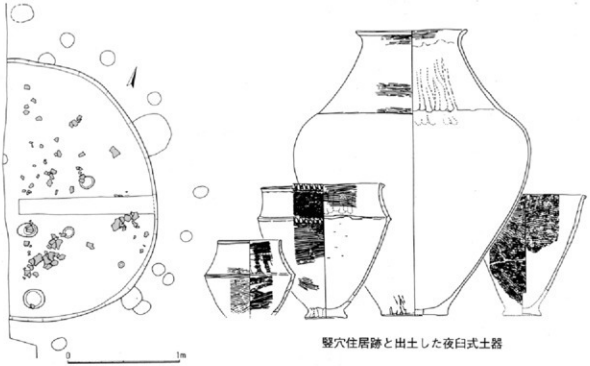
台地周縁部の数か所で用水路が発掘されていたことから、この用水路が環濠集落がある中央台地を巡り、ムラは二重の環濠で守られていたという説が出されました。この説を裏付けるには、できるだけ多くの場所を発掘する必要があります。しかし、推定地のほとんどは家屋が立ち込み、しかも一番肝心な南北台地との間は、道路や学校で発掘が不可能です。数か所の空き地を選んで発掘を試み、用水路延長部を確認できましたが、二重環濠の断定までには至りませんでした。そこで、発掘しないで地下の遺構を探る電気、レーダー探査を39か所で実施しました。南西湾曲部では、探査場所を実際に発掘して比較検討を試みましたが、湧き水で掘り下げが十分にできませんでした。



物理探査場所と外環濠推定図
（応用地質 k.k 作成）

ムラは二重の溝で取り囲まれているのか？

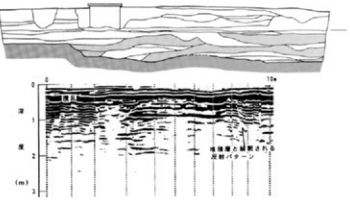
第60次調査



竪穴住居跡と出土した夜臼式土器

第65次調査

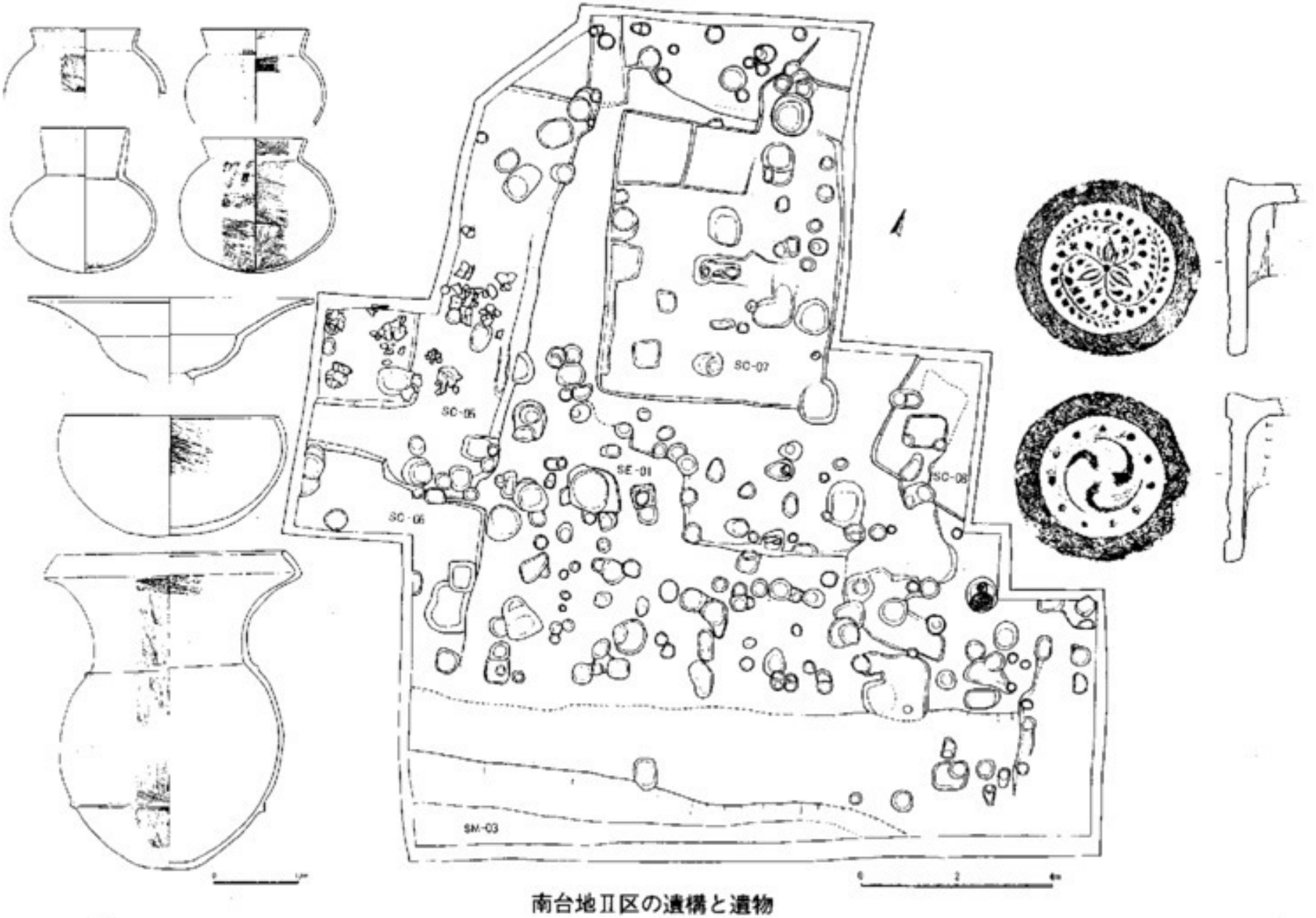
第65次の発掘作業



土層図と地下レーダー探査結果

南台地の調査　現代まで続いたムラ

板付遺跡は、南北に並んだ三つの台地上にあります。環濠集落は中央台地にあり、北台地は共同墓地になっています。南台地の発掘では、弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居や井戸などが発見され、南台地の土地利用が、中央台地でムラが拡大する弥生時代中期に始まったことがわかりました。また、福岡黒田藩の藤巴文瓦など近世の遺物も発見され、江戸時代の文献に記録されている「行宮」跡ではないかと推測されました。



南台地Ⅱ区の遺構と遺物

遺構確認調査結果表

年度	調査地点	目的	主な検出遺構	主な出土遺物	調査成果
昭和 63年度	史跡板付遺跡 ・環濠部分Aゾーン	環濠と集落の解明 ・板付遺跡は環濠集落と言われてきたが、これまで全体的な発掘は行われていなかった。	環濠の全体 竪穴住居　11軒 貯蔵穴　40基以上 甕棺墓　10基 井戸 その他	弥生時代 土器 石器多数 装身具（副葬品）	・この調査で環濠の全体が把握出来るようになった。 ・環濠の外側に小児甕棺墓群が発見され、集落と墓地との関係が初めて明らかになった。 ・竪穴住居は環濠の外側で発見され、集落の発展過程がわかるようになった。
平成 元年度	史跡板付遺跡 ・環濠部分Aゾーン	環濠の外側における遺構の広がり ・集落の拡大の時期とその過程解明	竪穴住居　19軒以上 貯蔵穴　40基以上	弥生時代 小銅鐸 土器 石器多数	・環濠の一部が途切れている所が見つかり、集落の入り口が確認できた。 ・竪穴住居跡から小銅鐸が出土し、弥生社会の祭りごとの様子を明らかにした。
平成 2年度	外環濠の確認調査 第1地点→ 40×25m 第2地点→ 140 ㎡の3面 第3地点→ 第4地点→	板付遺跡は二重の環濠で取り囲まれている可能性があることから4か所で確認調査をした。 板付北小学校の南側 史跡の東側 史跡の東北隅に当たるが湧水が激しく掘り下げを断念 史跡の南側 東西の外環濠を結ぶ地点	 竪穴住居　1軒 木棺墓　1基 外環濠 弥生時代水田 外環濠の一部	 縄文時代晩期 突帯式土器 木器 杭列 土器	 水稲耕作開始期の集落の一部を明らかにした。 台地の東、西、南側で外環濠の一部と思われる溝が発見され、二重環濠の可能性が大きくなった。
平成 3年度	南台地	南台地における土地活用の実態を把握し、中央台地の集落との関係を解明する。	弥生時代 竪穴住居　4軒 貯蔵穴　10基 井戸 江戸時代 溝 礎石	 土器 石器 陶磁器 瓦類	南台地の開発の時期が明らかになり、その土地利用の様子が確認できた。 板付遺跡がきわめて広範囲に及ぶことがわかった。 江戸時代に黒田藩関係の施設が存在していたことが推測された
平成 4年度	南台地 外環濠の電気、レーダー探査	南台地における集落の開始期と構成を把握する。 発掘できない地点で外環濠を確認する。	弥生時代竪穴住居2軒 古墳時代竪穴住居2軒 江戸時代　溝	弥生土器 土師器 須恵器 石器 瓦類 陶磁器	古墳時代の住居跡が発見され南台地における生活存続期間が確認できた。
平成 5年度	南台地 外環濠	平成3年度からの調査で弥生時代から古墳時代にかけて大集落が存在していたと推測され、その規模や内容を把握する。 東西の環濠が連結するかを確認する。	古墳時代竪穴住居3軒 ピット　多数	弥生土器 土師器 石器 弥生土器 石器	南台地の全面に弥生時代中期から古墳時代にかけての集落が展開していたことを確認。 外環濠の推定にとどまった。
平成 6年度	遺構確認調査の整理作業と報告書作成	これまで担当してきた山崎二宮、力武で分担して進める			

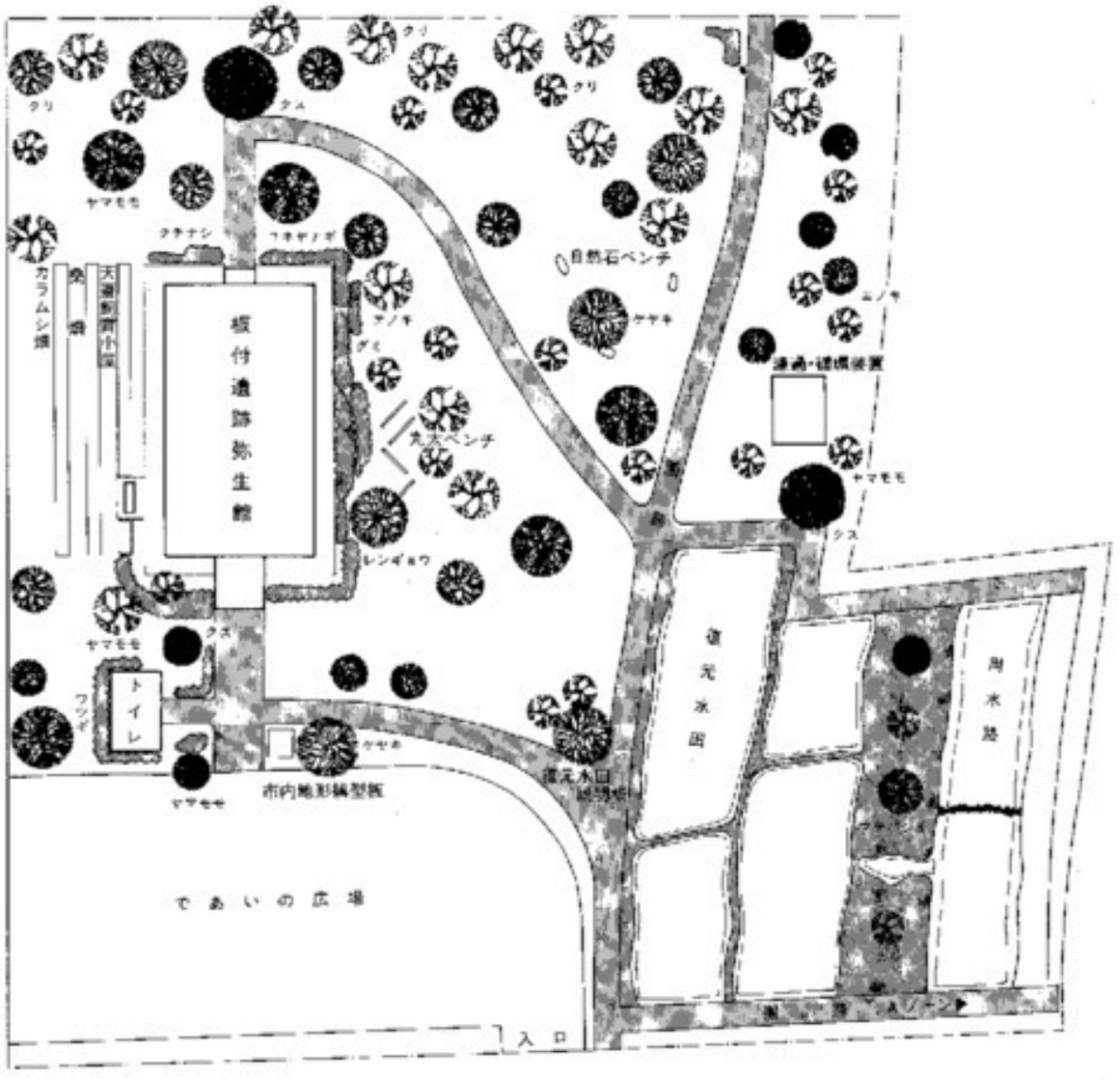
Bゾーンの環境整備

板付遺跡のほぼ中央に用水路と通学道路が南北に通っているために、史跡地は東西に分断されています。環境整備では、これを逆に利用して東側環濠集落部の約18,000㎡をAゾーン、西側水田部の約9,000㎡をBゾーンと呼び、それぞれ「歴史体験と交流の広場」、「学習の広場」という違った機能を持たせたゾーニングをしました。Bゾーンは、文化庁の「ふるさと歴史の広場事業」に採択され、平成元年度から平成3年度まで環境整備を進め、Aゾーンは、自治省の地域総合整備事業債の「地域づくり推進事業」として整備しました。

環境整備の基本テーマである「弥生時代前期の板付弥生のムラの復元」は、Aゾーンで再現することになり、Bゾーンには、板付遺跡や弥生時代のことを楽しく説明するガイダンスやトイレなどの現代施設を設置するとともに、G－7a区で掘り出された弥生時代前期の水田を復元することにしました。

Bゾーンの全景（平成4年7月）

「遺跡博物館」の特色を生かす



Bゾーン年度計画

年　度	昭和63年	平成元年	平成２年	平成３年	平成４年	平成５年
主な整備内容	遺構確認調査 調査整備委員会	遺構確認調査 調査整備委員会 基本設計 ガイダンス 施設実施設計 ガイダンス 施設建設	遺構確認調査 調査整備委員会 遺跡模型製作 ガイダンス 施設設備工事 敷地造成工事	遺構確認調査 調査整備委員会 ガイダンス展示製作 映画制作 敷地造成工事 植栽　地形模型 水田復元 Aゾーン実施設計 ふるさと歴史の広場事業終了	遺構確認調査 調査整備委員会 開園式 外　柵	遺構確認調査 調査整備委員会 復元水田説明板 植　栽

「道草博物館」を目指して

Bゾーンの周囲には、高層団地が立ち並び、現代人の生活と接しています。郊外の遺跡とは環境があまりにも違いすぎるので、従来の整備方法では、どうしても適用、解決できない条件があります。現代的な風景や日常の生活に溶け込み、馴染むにはどうすればいいのか、というのが板付遺跡の最大の課題です。市民に親しまれ、また新しい観光資源として活用されるには、まず地域の理解と協力が優先します。史跡整備は、都市公園とは趣旨も目的も異なりますが、まず子供たちが集まるような場所づくりをコンセプトにしました。つまり「道草博物館」という素朴なキャッチコピーを掲げながら、それを実現する装置を整備配置するのです。

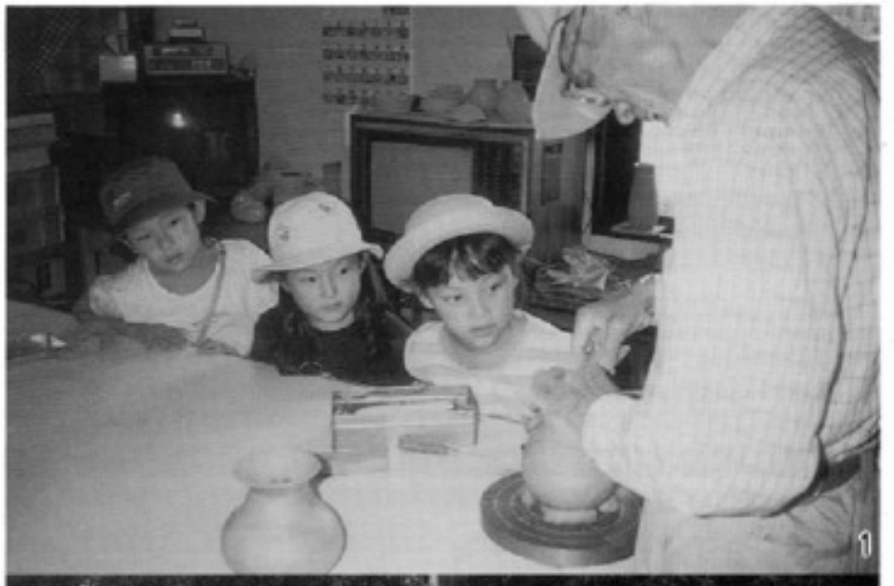
まず、板付遺跡を「板付弥生のムラ」に、ガイダンス施設を「板付遺跡弥生館」という愛称をつけ、子どもたちにもわかるようにしました。Bゾーンでは、復元水田、用水路、植栽、花壇、ベンチなどの施設を作りましたが、それぞれコンセプトにそった工夫を凝らしています。

花壇は、美しい花を育てて鑑賞するだけの場所ではありません。ここには養蚕のための桑や

下校する１年生（平成６年４月）

繊維をとるカラムシを植え、その一部には天蚕の飼育小屋も作りました。弥生時代の食生活と比較できるように、いろんな野菜も栽培しています。植え付けや毎日の世話は、板付遺跡弥生館で開催している教室の参加者や管理人がしますが、その作業に子どもたちや一般の見学者も自由に加わることができます。復元水田も用水路も、十分な面積ではありませんが、稲の生長や虫たちの観察を通して、自然の仕組みがわかります。

板付弥生のムラでは、発掘資料や復元遺構だけでなく、環境そのものが重要な展示資料であり、環境整備の目的や理想を実現する重要なツールになっています。



1 土器作りを見つめる子供たち
2 繊維植物カラムシを植える
3 みんなで土器を焼く
4 木陰で遊ぶ子供たち

板付遺跡弥生館

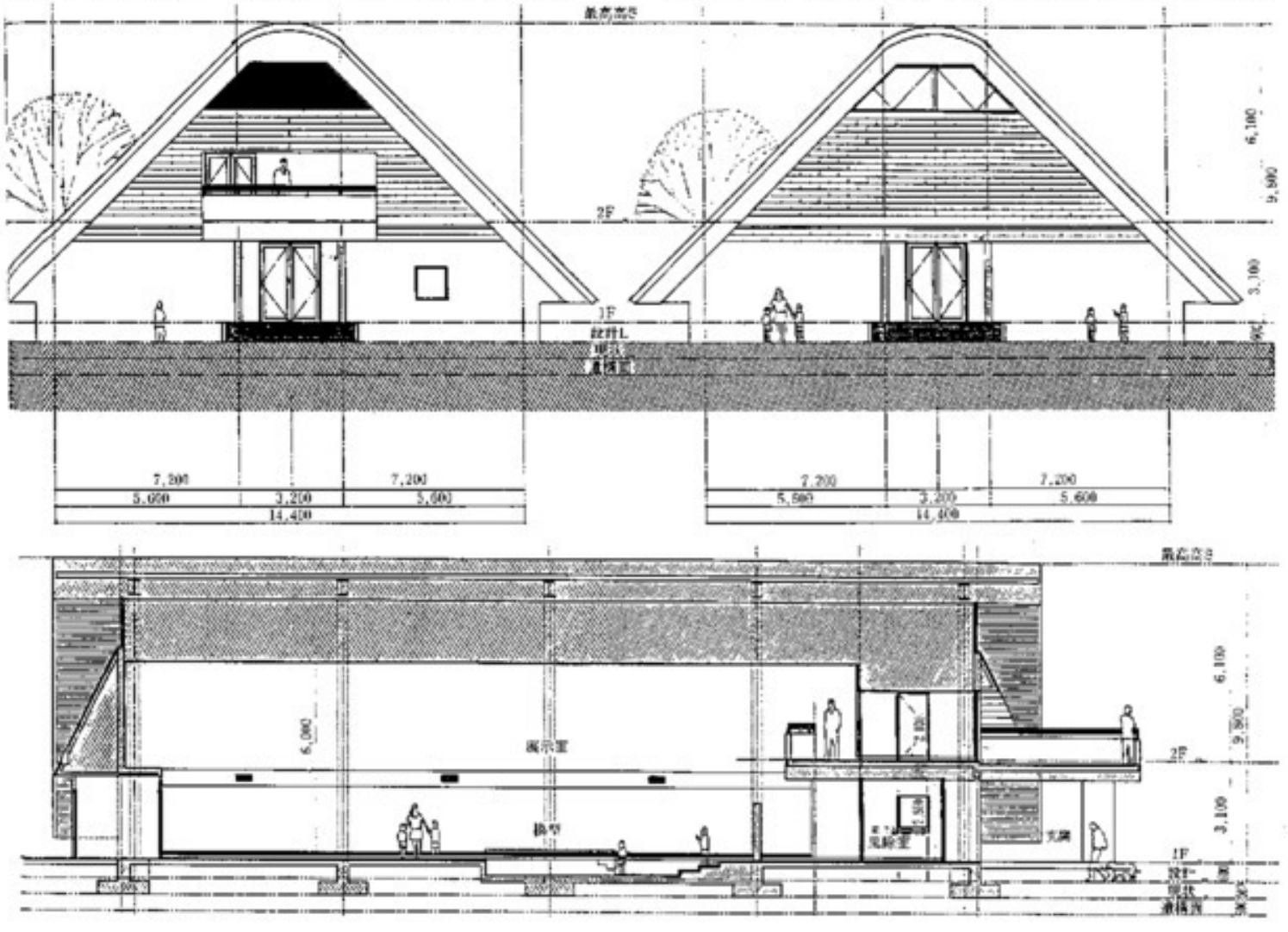
「ふるさと歴史の広場事業」の補助要件の一つであるガイダンス施設の機能や役割について、実施設計を委託した歴史環境計画研究所（代表秋山邦雄氏）と検討を重ねて次のような基本計画を立てました。

1．ガイダンス施設の外観は、整備された弥生時代集落にふさわしいものとして構造的に簡素で初現的な形態とし、外壁、屋根等の素材も周囲の環境になじみやすいものにする。

2．内部の展示は、板付遺跡の特色を充分に踏まえながら、一般にわかりやすく楽しいものとすることを目指し、遺物、模型、写真、図面等の展示の他に、映像機器を設置する。

3．遺跡の内容の他に板付遺跡の整備について、その目的や方法をわかりやすく説明することを計画する。

以上の役割を果たすために、展示、管理、情報提供の3部門を盛り込み、それぞれの部門がその目的を充分に発揮しながら、また有機的に密接に関連するように細かな検討を加え、実施



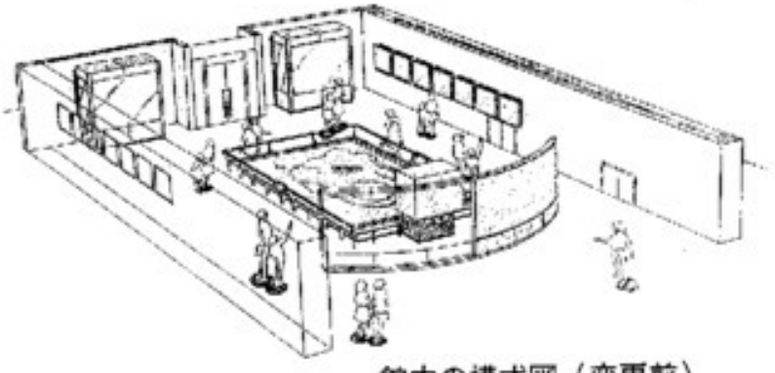
見学者のみんながムラ人になる

設計を作成しました。進捗状況については、毎年開催する「板付遺跡調査整備委員会」に報告するとともに、文化庁の指導を受けました。また、新潟県長岡市藤橋遺跡、富山県婦中町安田城遺跡など同時期に「ふるさと歴史の広場事業」に採択された史跡の担当者とも情報交換をしながら、従来の博物館や遺跡展示館とは違った施設作りをお互いに目指しました。

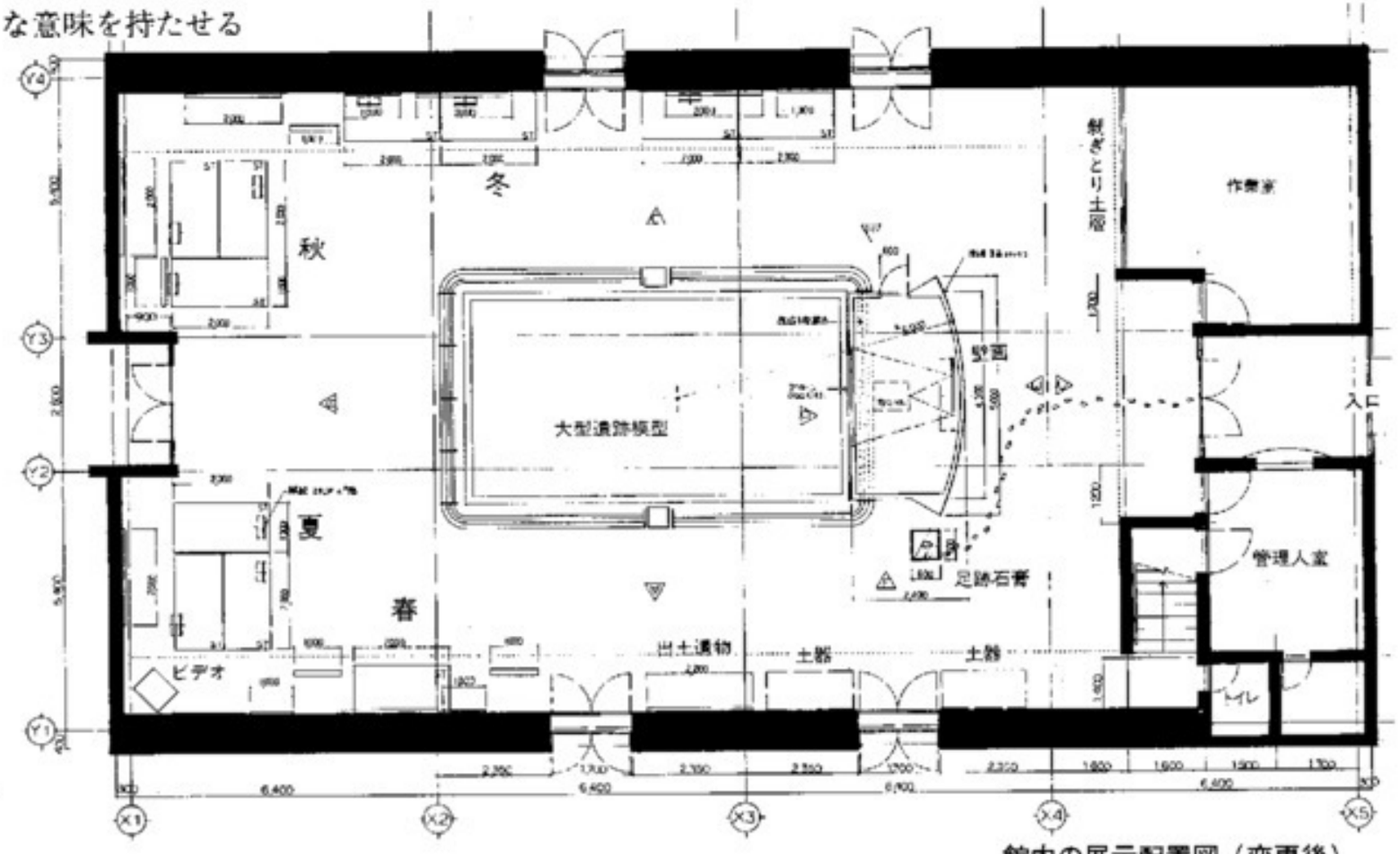
【展示部門】

導入展示部門・・・外部と内部の接点となる部分であり、人々を内部に導く場所として重要な意味を持たせる

主要展示部門・・・ガイダンス施設の中心的な機能を担う部分であり、様々の展示により、板付遺跡の内容や特色、意義等を伝える



館内の模式図（変更前）



館内の展示配置図（変更後）

受付でムラ人登録をする

＊展示方法として

・遺物展示－板付遺跡から出土した遺物を展示する

・模型展示－板付遺跡およびその周辺を含めた復元模型を展示する

・パネル展示－写真・図面・イラスト等を用いた説明パネルを展示する

・映像展示－大人数に対応できる映像ソフトを用いて説明を行う

【管理部門】

ガイダンス施設および板付遺跡の活用が円滑に行えるよう、施設および遺跡管理を行う

【情報部門】

板付遺跡に関する情報、ガイダンス施設内の展示内容に関する情報、他の福岡市の文化施設に関する情報等を提供する

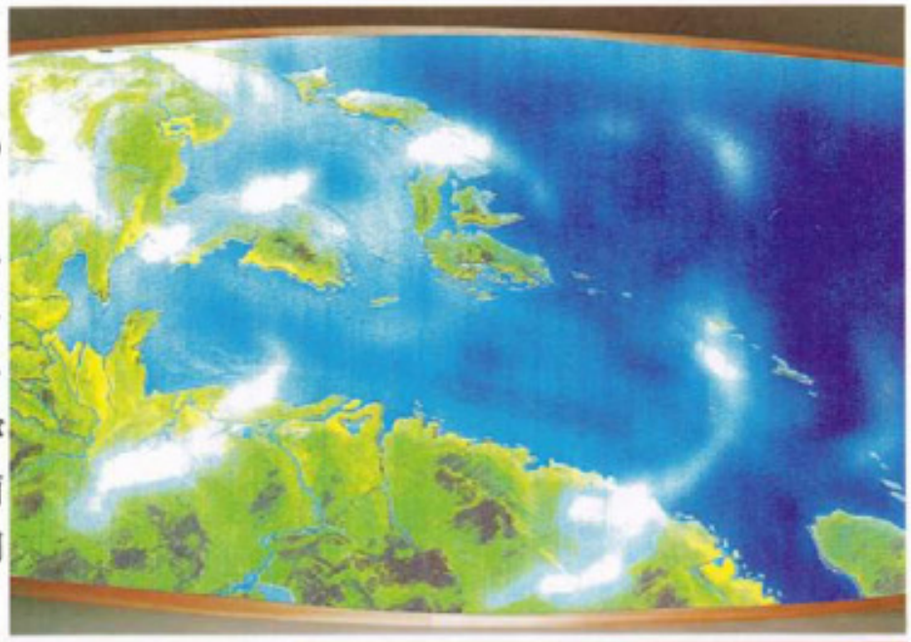
最初は、大型遺跡模型、出土遺物、パネル、映像装置などを計画していましたが、「道草博物館」のコンセプトから、対象を小学高学年に絞って展示方法を再検討しました。

見学者は、受付で板付弥生のムラのムラ人登録を済ませます。これで、たんなる見学者ではなくムラ人の一員となり、無意識のうちにムラ作りに参加することになります。出土遺物は、ガラスケース３個に限定しました。文字の多い説明調のパネルもありません。ガラスケースに大事に並んだ土器を見たり、パネルを読んで知識を得るのでなく、展示品を実際に手にとって、重さや刃先の鋭利さを確かめ、道具としての機能を体感します。弥生人と同じような農作業や道具作りで、昔からの生きた知恵を学び取ります。つまり、板付遺跡弥生館は、板付弥生のムラの作業小屋という役割を果たします。

正面の壁画

館内に入ってまず目にとび込んでくるのが、映像装置の外壁に描かれたこの大きな壁画です。

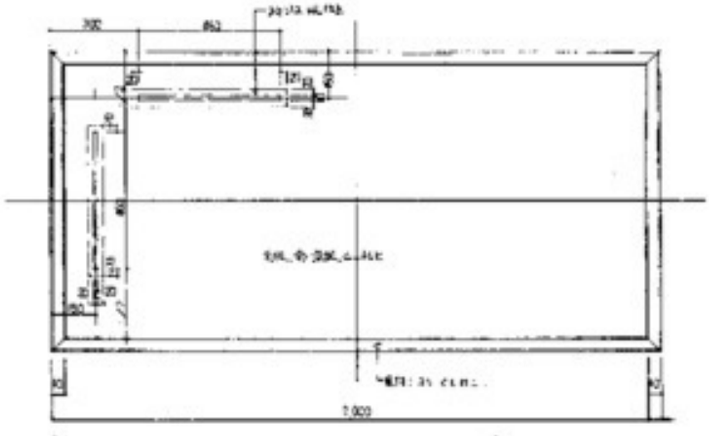
最初は、米作りが東アジアの大きな歴史のうねりの中で伝えられたことを象徴して中国大陸上空から日本列島を逆さに見た図案でしたが、子供たちが興味を持つように発掘していると地面から地球の歴史がのぞけるよという図案に変更しました。

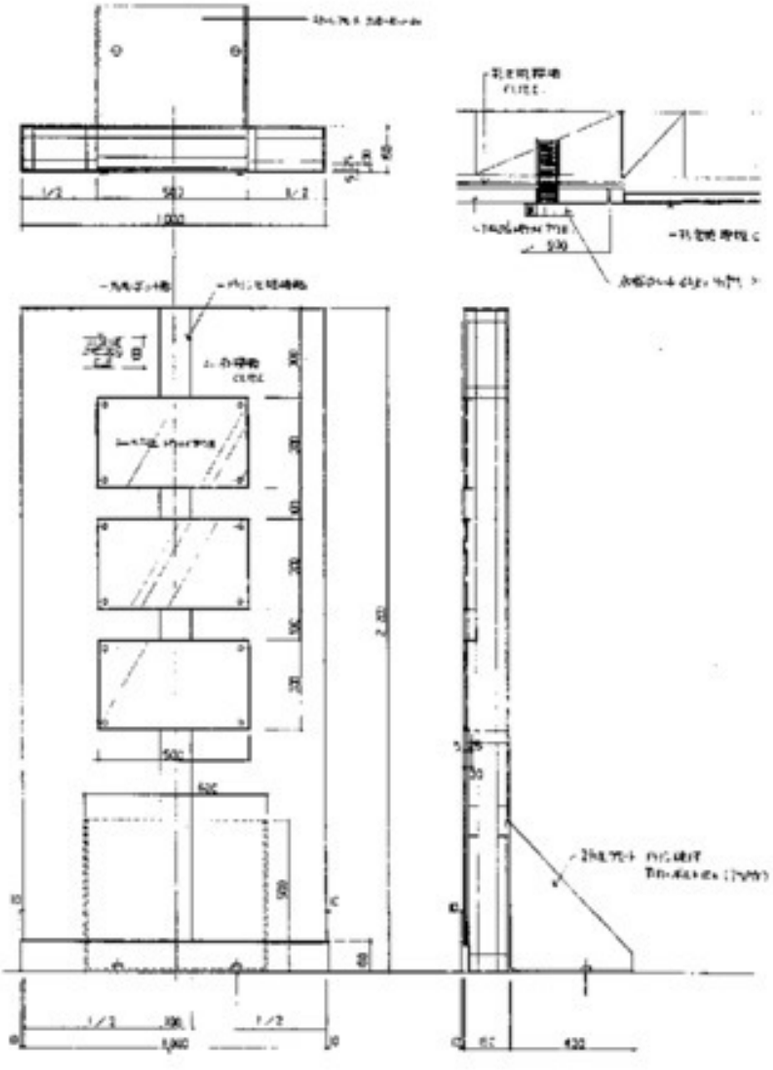


館内の案内　成長する展示

館内は、春、夏、秋、冬の４つのイメージパネルで区画され、漫画の弥生人家族が案内します。各区画は、季節と衣食住を表し、見学者がいつ来ても、弥生人の暮らしぶりが具体的に理解できるようになっています。展示品のほとんどは、講座や教室の参加者と管理人が復元製作したもので、夏には、国立遺伝学研究所よりいただいた蚕が卵から孵化して、桑の葉を食べるにぎやかな音が加わります。限られたフロアーを有効に活用するために、展示台にはキャスターを付けているので、見学目的や解説方法によって、自由に移動や組み合わせてステージや椅子に早変わりします。講座などの主催事業の時は、このフロアーが教室になり、講座や生徒自身が展示品となります。このように館内の展示資料は、季節によって変化し、毎日、成長し続けます。

館内を案内する弥生人の家族





展示台と四季イメージパネル

復元した木製農具　49

大型遺跡模型

４×８ｍの大型遺跡模型を館内の中央に設置しています。これまでの発掘調査の結果をもとに、環濠、竪穴住居、墓地、水田、貯蔵穴、用水路、そしてさまざまな動作のムラ人たちを100分の１の縮尺で再現しています。ムラを空から覗いているような気分になり、弥生時代に一瞬のうちにタイムスリップできます。この模型を見ながら、いろいろな疑問を持った子供たちは、次に映像や展示資料のコーナーに移動して、子供たち自身が問題を解決し、学習します。

環境整備は、地下の遺跡保存が第一の目的です。また、現代に残った資料だけを対象とする考古学の宿命から、板付弥生のムラを完全な姿で再現することはできません。さらに面積の制約や管理上の問題などで、実際と異なる仕上げになることがあります。これらの違いや復元根拠を正しく理解していただくために大型遺跡模型を使いながら説明をします。

大型遺跡模型と大型画面

模型の検討

大型遺跡模型で再現した板付弥生のムラは、ちょうど収穫の真最中です。井堰の横木を取って水を落としている人、穂摘みをする人、溝を掘り低地を水田に作りかえている人、ニワトリを追いはらい籾や豆を干す人、貯蔵穴に食料を保存する人、元気に遊んでいる子供たち、、、。たくさんのムラ人たちが、さまざまな動作をしています。

しかし発掘資料だけでは、ムラ人の暮らしぶりを完全な姿で再現することはできません。できるだけ真実に近い表現になるように、多くの研究者の意見を取り入れながら何回も検討を重ねて製作しました。

模型の検討

映　画

大型遺跡模型を見終ると、レーザーディスク化したオリジナル映画を100インチの画面に上映します。

地球環境が気になって宇宙からやって来た未来人と小学6年のユミちゃんが、一緒に板付弥生のムラを訪ねます。ユミちゃんは、ムラの少年に出会い、いつも疑問に思っていることを直接質問します。

番組は次のように四つの不思議から構成されています。10種類の組み合わせをテンキーに割り振っているので、見学校の授業の進み具合や、見学時間に応じて選択できるようになっています。番組制作には、静止画面の連続にならないようにロケーションを多用するとともに、復元品を使いながら撮影したので、見学者もユミちゃんと一緒に弥生時代を旅したような気分になるでしょう。

『ようこそ　板付弥生のムラへ』

内　容

1	プロローグ	（4分47秒）
2	どんな方法でお米を作ったの？	（4分21秒）
3	弥生人はどんな人達？	（8分5秒）
4	どんなものを食べていたの？	（4分21秒）
5	どうしてムラのまわりに深い溝があるの？	（4分35秒）
6	エピローグ	（1分55秒）

テンキーの操作は、子供たちや引率先生の要望を聞いて、管理人がスタートさせます。管理人が、子供たちの疑問や興味を正確に把握して、問題解決学習の動機づけや手伝いをするためです。またコーナーのビデオ装置では、市内遺跡や板付遺跡弥生館の活動を紹介しています。

撮影のようす

弥生の少年に出会ったユミちゃん

弥生人骨の特徴を語る永井昌文先生（金隈遺跡）

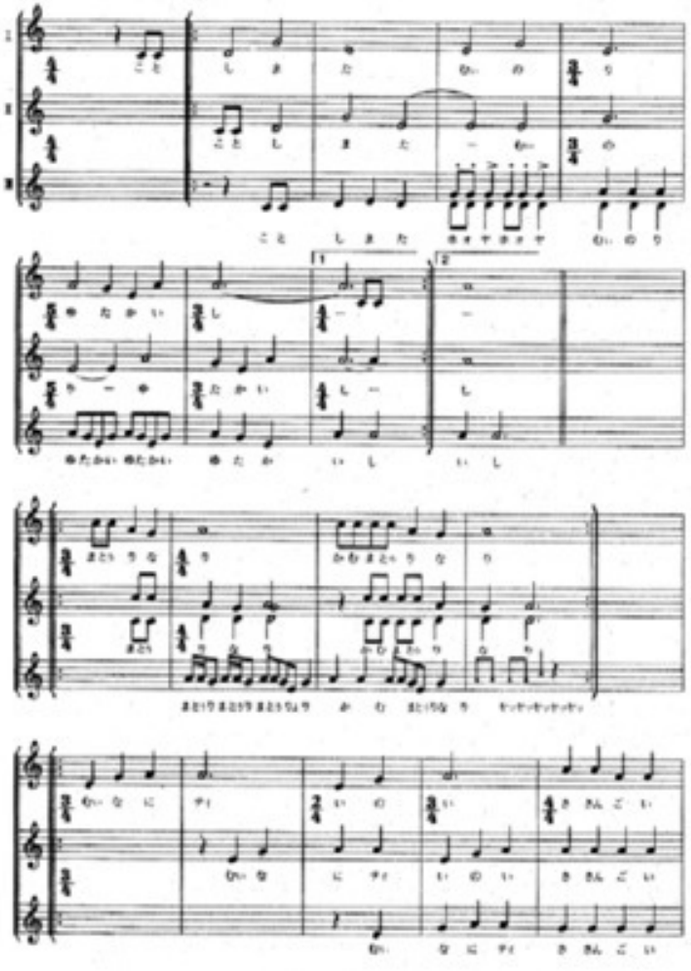
BGM

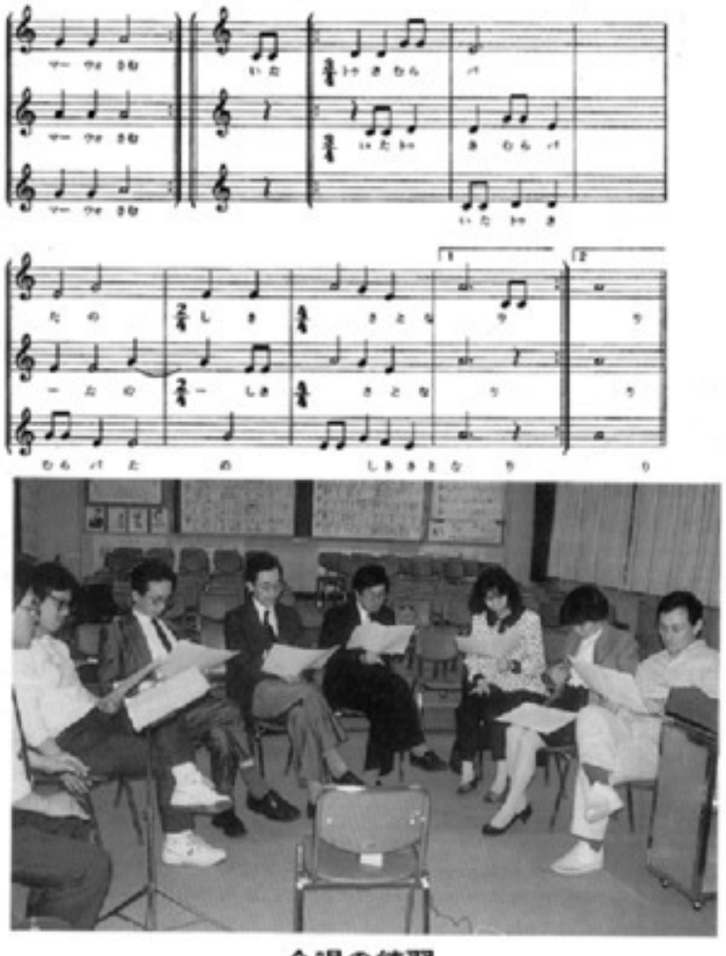
床にシールした縄文水田の足跡をたどって館内に入ると、静かな音楽が流れています。この「邪馬生音齊歌」という曲は、ムラ人である平岡憲雄と川谷豊さんが弥生時代の音をイメージして共同制作したものです。見学者を現代から弥生の世界に誘います。

第一楽章　プロローグ（海上黎明）
第二楽章　春（大地玲瓏）
第三楽章　夏（ギズモ混乱）
第四楽章　秋（豊穣－邪馬生音齊歌）
第五楽章　冬（沈黙啓示の杜）
終楽章　　メビウス幻想

銅鐸、陶けん、太鼓、琴などの弥生時代の音だけでなく、鳥の鳴き声、小川のせせらぎなど自然の音をサンプリングして、組曲風にコンピューター処理してあります。クライマックスの第四楽章では、豊作を喜び神に感謝を捧げるムラ人たちが、元神戸外国語大学長田夏樹教授にお願いした弥生語で大合唱をしています。

第四楽章「豊穣」





合唱の練習

復元水田

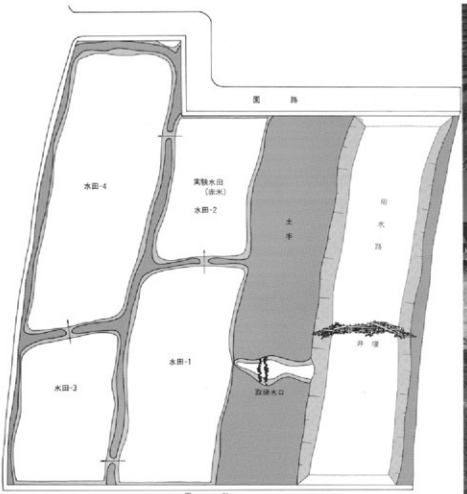
ムラ人たちは、台地の東西に広がる低地を水田に作りかえるために、まず幅約10mの用水路を台地の縁に沿って掘り、水を引きました。その途中には、たくさんの丸太杭を打ち込み、水をせき止め、土手に切りこんだ取排水口で水田への水量を調整しています。水田の畦は、矢板や木杭などで補強しています。幅約10m、長さ約30mの長方形の水田は、現在の圃場整備された水田とあまり変わりません。このように地形を巧みに利用した灌漑方法は、弥生人たちが、板付の地勢だけでなく、気象をもよく知っていた証拠です。日本で最初の米作りは、私たちの想像以上に高度な土木、農業技術で始まりました。出土する樫で作った木製農耕具は、材質こそ鉄製品には劣りますが、ていねいに仕上げられた鍬や鋤を見ていると、弥生人たちが農耕具を大事にして、農作業にがんばっていたことがよくわかります。

このような弥生時代の米作りを再現するために、Bゾーンの東端に水田と用水路を復元しました。この水田は、昭和53年にG－7a区で発掘された弥生時代前期の水田をモデルにしています。復元場所の地下約1.5mにも水田と用水路が確認されていますが、井堰や畦などが発見されていないので灌漑の仕組みがよくかるG－7a区の水田を参考にしました。用水路の水は、井戸から汲み上げ、濾過・循環装置を通り配水されます。水田と用水路の下には、防水剤と防水シートを敷き、漏水対策をしているので、蒸発分の消費で抑えられています。用水路には川辺の植物を移植し、水生生物が生息できる自然環境を作りだしました。ドジョウもヤゴもアメンボウもいて、子どもたちに一番人気のある遊び場となりました。

田植えの祭壇（博多区雀居遺跡出土の机を復元）

4枚の水田は、約600㎡あり、3枚はモチ米品種、もう1枚は、福岡県農業改良普及所の赤米を栽培しています。また、静岡大学佐藤洋一郎助教授の指導で、弥生時代の水田栽培を計画しています。農作業は、近くの農家に委託していますが、板付北小学校が「特色ある学校づくり」として、年間を通じて農作業を担当します。また、地元の方々やJA職員で組織した「稲穂会」（合庭重雄代表）は、以前から地元で行われていた農業祭祀や農作業を再現し、子供たちに米作りの話を語り継ぐ重要な役目を果たします。この他に、春、秋のムラ祭りや夏休みの板付弥生教室などの主催事業は、この復元水田を中心にして展開されます。

この水田で本当に復元したいのは、弥生時代以来の人間や地域の結びつきです。



1－耕作土下の防水剤
4－田植え綱とタビ

2－用水路下の防水シート
5－苗とり

3－田植えの準備
6－板付弥生のムラ品種
「赤米弥生」

用水路

水遊びの子供たち

環濠集落の中央台地縁を巡る用水路（外環濠）は、幅は広い所で約10m、深さ２m以上もあり、水量も豊かだったと推測されています。弥生時代と同じ規模で復元する計画でしたが、子供たちの安全を第一に考えて、20～30cmと浅くしました。しかし、子供たちが御笠川や諸岡川で釣り上げた魚を放流しているので自然の川と同じような環境になっています。

井堰を作る

平成３年、台風19号は各地に大きな被害をもたらしました。市内の公園や福岡城でもたくさんの樹木が倒れたので、その木を譲り受けて丸太杭を作り、井堰を構築しました。水をせき止めるには数百本の杭が必要です。その打ち込みは人力でかなわず、重機の力を借りましたが、弥生人の苦労と知恵がよくわかりました。

完成した井堰と取排水口

水田は弥生時代の復元ですが、ある程度の収量を確保するために実際の水田耕作土を搬入し、さらに有機肥料で土壌改良をしました。井堰はいつもは穴を開けて水が循環するようにしていますが、せき止めると次第に水位があがり，取水口から水田に流れ込むので、弥生時代の灌漑方法がよくわかります。

濾過・循環装置

井戸からポンプで汲み上げられた水は、自動的に用水路と水田に配水されます。用水路から戻った水は、濾過槽で浄化され再び使用できるようになっています。スイッチ類は、板付遺跡弥生館の管理室にあるので、遠隔操作が可能です。装置は、毎月保守点検をして、きれいな水質が保たれています。

トイレ ベンチ

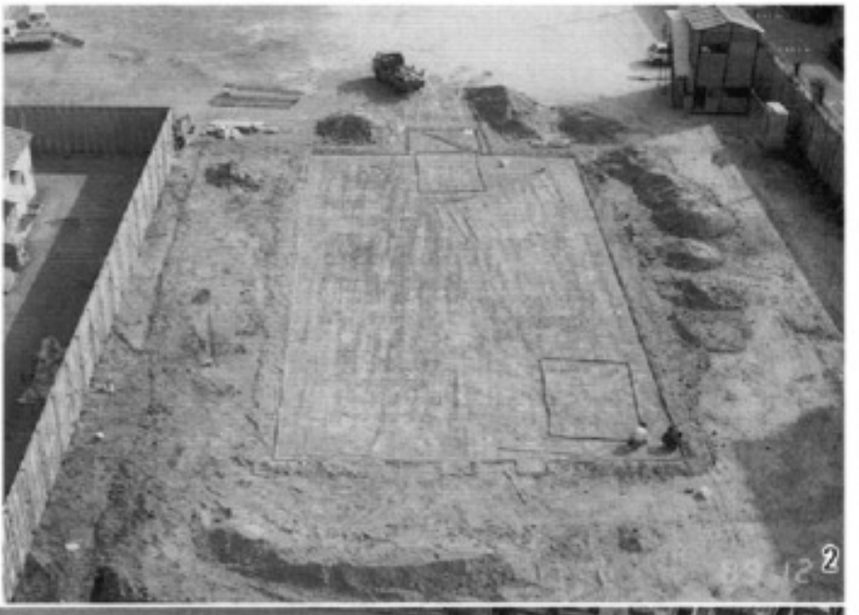
基本計画では、A、Bゾーン両方にトイレを設置する予定でしたが、環濠集落部のAゾーンは、弥生時代のムラの雰囲気を演出するために、管理施設やトイレなどの現代建築物は、Bゾーンだけに集中させることにしました。

Bゾーンは、板付遺跡弥生館の見学者だけでなく、地元のお年寄りの語らいの場として、また乳幼児たちの安全な日光浴の場所として活用されているので、トイレは車椅子や母子専用の区画を中心にして設計しました。外には蛇口と足洗い場を付設したので、農作業や各種のイベントに対応できます。衛生施設としてだけではなく、休養施設の一つと考えています。

ベンチは、園路や樹木の中に設置しました。休憩や子供たちの遊具、そして修景にもなるように、丸太材、大石などの材質を使いました。

丸太のベンチ

1


2

3

追加整備

板付遺跡弥生館のあるBゾーンは、平成4年6月26日に開館しました。さらに史跡としての雰囲気を強調し、さまざまな要望や活動に対応するために、同年に雑木材で外柵を作り、翌年に植栽、ベンチ、花壇、復元水田説明板設置などの整備工事を行いました。

4

1　開園式
2　施工前（平成2年）
3　Bゾーン全景（平成4年3月）
4　追加整備後（平成6年3月）

Aゾーンの環境整備

Aゾーンの面積は、約18.000㎡です。自治省の「地域づくり推進事業」債で、平成4年から開始しました。通津寺を中心にして52戸の家屋があったので、地元の愛着も強く、深い関心が寄せられていました。環境整備の内容や工事方法については、地元説明会を開くとともに、機会あるごとに理解を得るように努めました。

用地買収後は、長い間草地となり、タヌキも棲息するような自然が戻っていました。ここに「板付弥生のムラ」を再現するのですが、人間だけでなく昆虫や小動物にもやさしく、そしてなによりも周囲の自然や住環境と調和し、さらに快適な空間を提供することを前提にして整備内容や手法を考えました。

遺跡の復元は、歴史の一場面を切り取り、時間の流れを停止してしまいます。復元が完全であればある程、見学者に一定のイメージを固定するだけでなく強要する結果となり、見学者の自由な発想を抑制することになります。板付弥生のムラは、弥生人が日々の生活を繰り返して

板付遺跡の子ダヌキ

盛土されたAゾーン(板付団地21棟より平成5年3月)

年　度	平成4年度	平成5年	平成6年	平成7年	平成8年
主な整備内容	遺構確認調査 調査整備委員会 敷地造成工事 排水工事 植　栽 環濠復元	遺構確認調査 調査整備委員会 土塁復元 竪穴住居12軒 貯蔵穴20基 小児甕棺墓8基 照明・防災施設 植栽・外構 史跡名称板 縄文水田説明板	調査整備委員会 園路舗装 木　橋 弥生の門 竪穴住居内展示 説明板・サイン 史跡標柱 遺構確認調査・環境整備報告書	調査整備委員会 開園式 周辺整備 通学道路カラー舗装	周辺整備予定 歩道カラー舗装

みんなで作るムラ

出来上がったものなので、竪穴住居や貯蔵穴を復元配置するだけでは何か物足りません。そこで、見学者をムラ人にして、ムラ作り（環境整備）に参加してもらうやり方を採用しました。

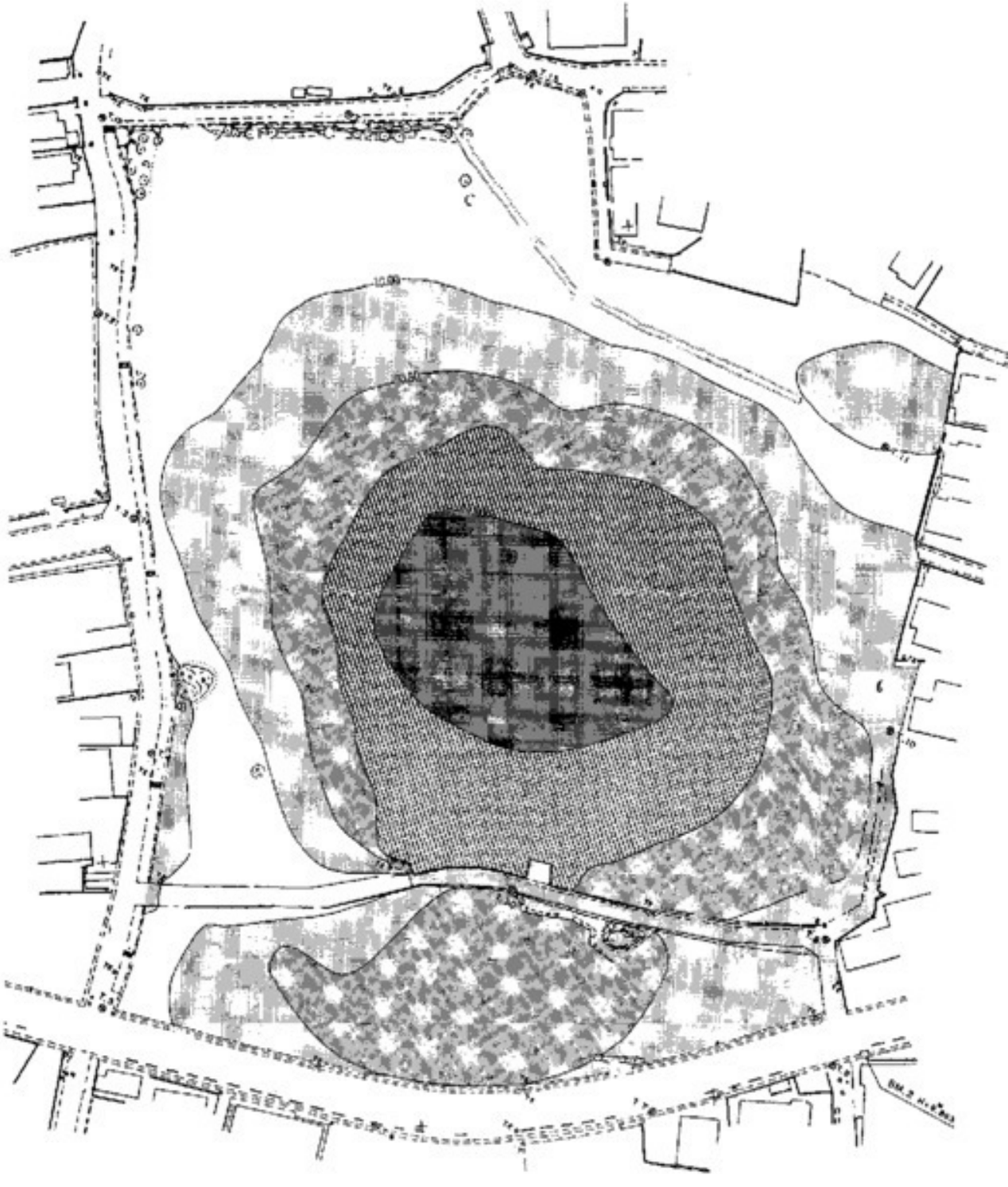
遺構復元は完全な姿だけではなく、わざと未完成品を作り、見学者の参加意欲を誘うように工夫します。「自分のムラだから、働いたり、大事にするのは当然」という意識を育てるのです。板付弥生のムラは、完成した施設を見せるのではなく、現代の生活に生かすために、「現代人自身が作るムラ」というコンセプトです。だから、板付弥生のムラでは、現代生活の一場面として弥生時代からの時間が流れ、一日一日新しい歴史が刻まれていきます。

立ち並んだ竪穴住居（平成７年３月）

敷地造成工　地下の遺跡を守る

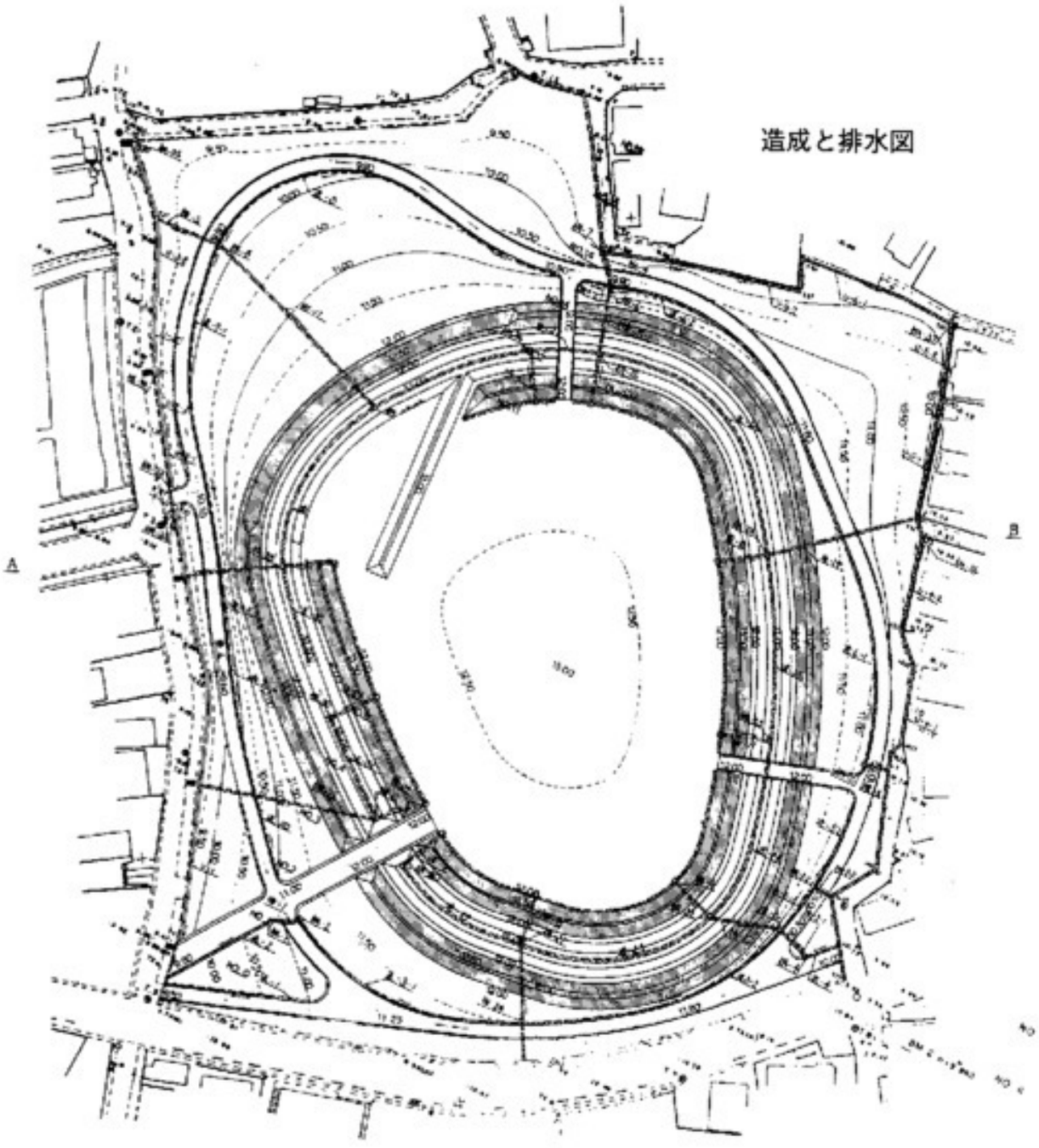
史跡整備の一番目の目的は、地下の遺跡を守り、将来に残すということです。決して遺構復元の規模や数を誇ったり、優先するものではありません。

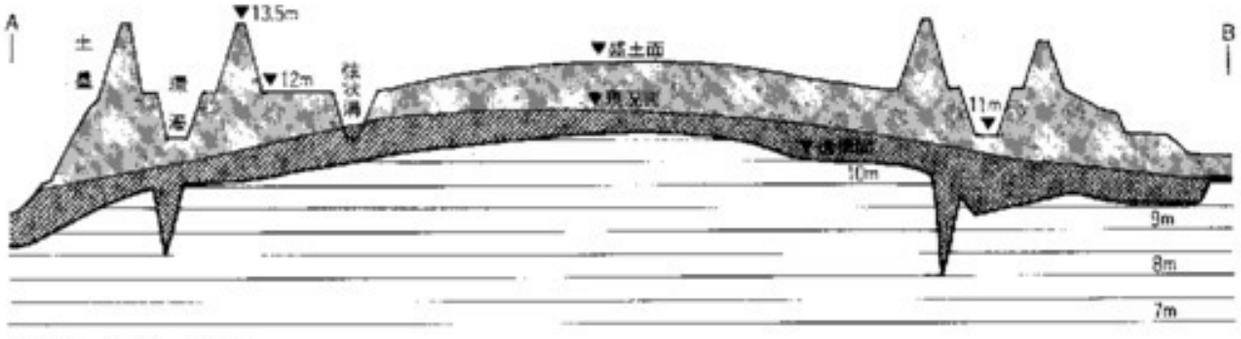
昭和63年と平成元年度に行った環濠部の全面発掘によって、遺構の保存状態が明らかになりました。板付の台地は、弥生時代以降、長い間にわたって集落が営まれていたために、想像以上に深く削られ、環濠部の西側で標高10m、環濠部東側で標高9.5m、台地中央部で標高11mのほぼ平坦な地形になっています。貯蔵穴や甕棺墓などの遺構は、この面で検出されているので、保存のために盛土をします。さらに元の位置の上にこれらの遺構を復元するので、盛土の厚さが問題になります。厚ければ、逆にその重さで遺構を壊すことになるし、全体の排水計画にも関係してきます。特に環濠の復元は、再び盛土を掘り込む必要があるので、「板付遺跡調査整備委員会」で何度もその方法について検討を重ねました。



造成工事前（遺構確認調査後に約50cmの盛土をした）

造成と排水図





遺構と盛土の関係

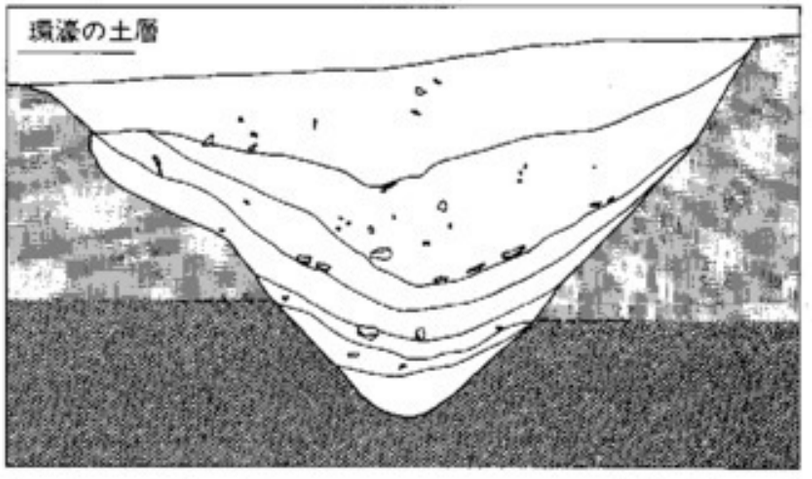
遺構復元　環濠と土塁

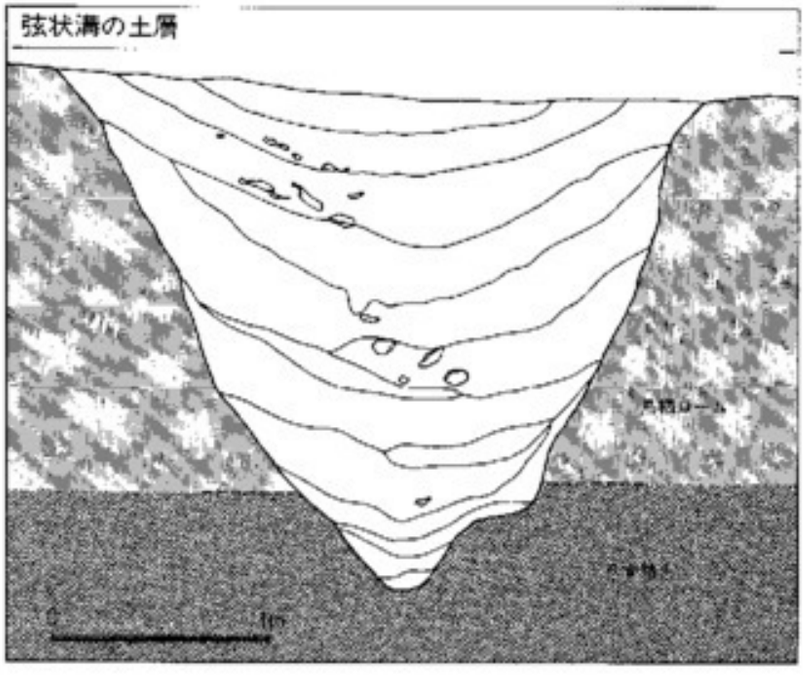
平成４年度は、敷地造成、排水工事、環濠復元の整備をしました。環濠の復元をどのような形状にするかによって、全体の盛土の量が決まってきます。

発掘によると、環濠は部分的に異なっていますが、元は幅６ｍ前後、深さ３～3.5 ｍの断面逆三角形に掘られていました。斜面の角度は約45度で、底は八女粘土層まで達しています。環濠内の北西部では、弦状溝と呼んでいる溝が、環濠から別れて直線的にのび、貯蔵穴群を取り囲んでいます。この弦状溝の角度は60度と急斜面になっています。

地下の環濠を保存して、元の形状をそのまま復元すると、遺構確認面の10mに溝の深さ3.5ｍの盛土をすることになり、史跡部だけが異常に高くなってしまいます。また、他の検出遺構から推測した弥生時代環濠集落部の標高は、12ｍ前後と考えられるので、大きくかけ離れた景観となってしまいます。そこで、「ムラ作りの途中」というコンセプトを生かして、環濠の断面を逆台形にしました。史実に史跡整備のストーリー性を加味したことになります。この形状にしたのは、弥生時代と同じように鳥栖ローム層を掘削するのではなく、真砂土という花崗岩の風化土を盛るために、急な傾斜面は不可能という工法的制約もありました。また、ムラの入り口部は出来るだけ当時の姿が見られるように、３ｍと深くしていますが、全体の深さを１～２ｍにおさえたのは、子どもの転落防止も考慮した結果です。

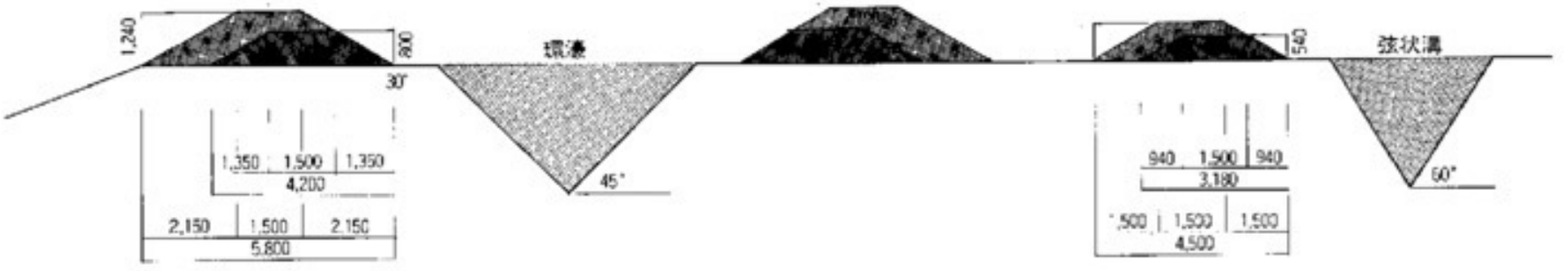
環濠の復元とともに土塁の復元も問題になりました。発掘調査で土塁そのものが確認されていないのです。土塁の存在を推測できるのは、環濠の中の埋め土が、両側の土塁が崩れ、流れ込んだような堆積状況を示していることを根拠にしています。土塁の断面形についても、図のようにいろいろな条件や視点を変えて検討し、環濠の両側に幅4.5 ｍ幅で台形の土塁を巡らすことにしました。また盛土の土質や盛り上げ工法、そして表面の処理などについても事前に土



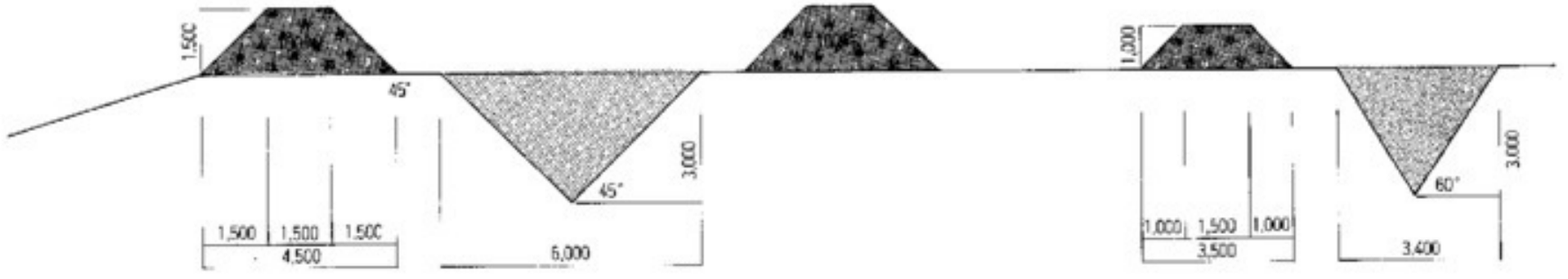


墨を築いて経過を観察しました。その結果、環濠側の表面はソイルセメント処理、外側はササ、集落側は種子の吹きつけをして崩落を防いでいます。ソイルセメントの採用は、いま弥生人たちが掘っているということを表現するために、できるだけ土の質感が必要だったからですが、風化や雨水による浸食もわずかながら進んでいます。流れた細粒土は、雑草が根付く原因になっています。

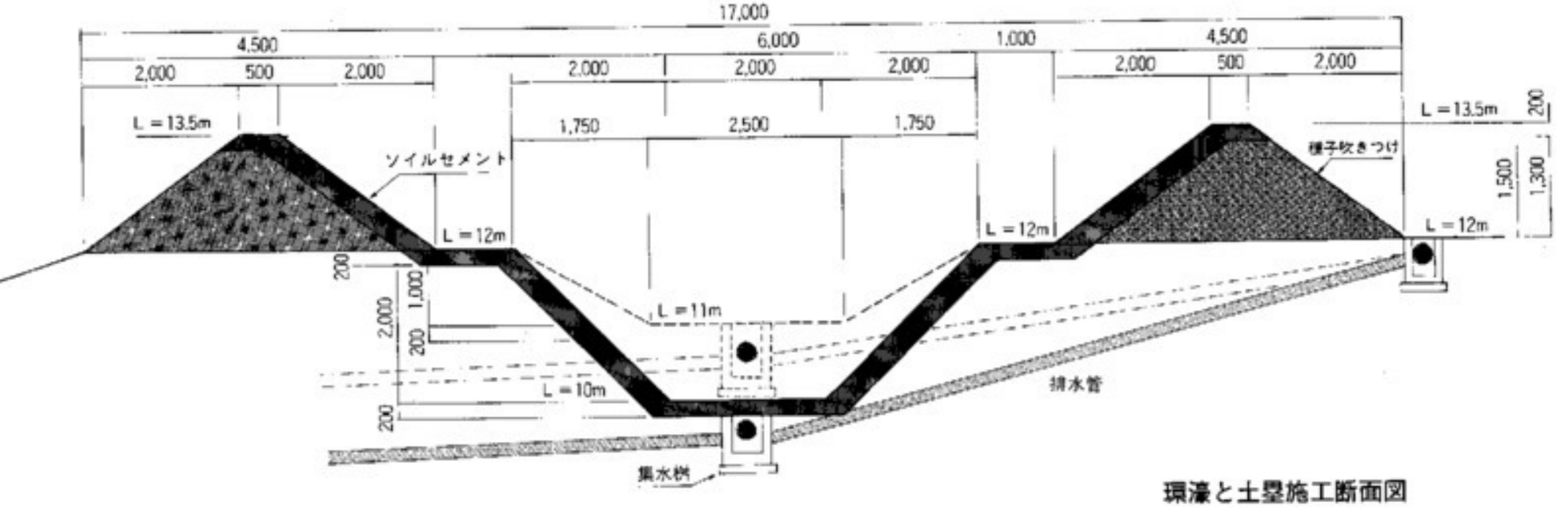
土塁の規模と傾斜角の検討



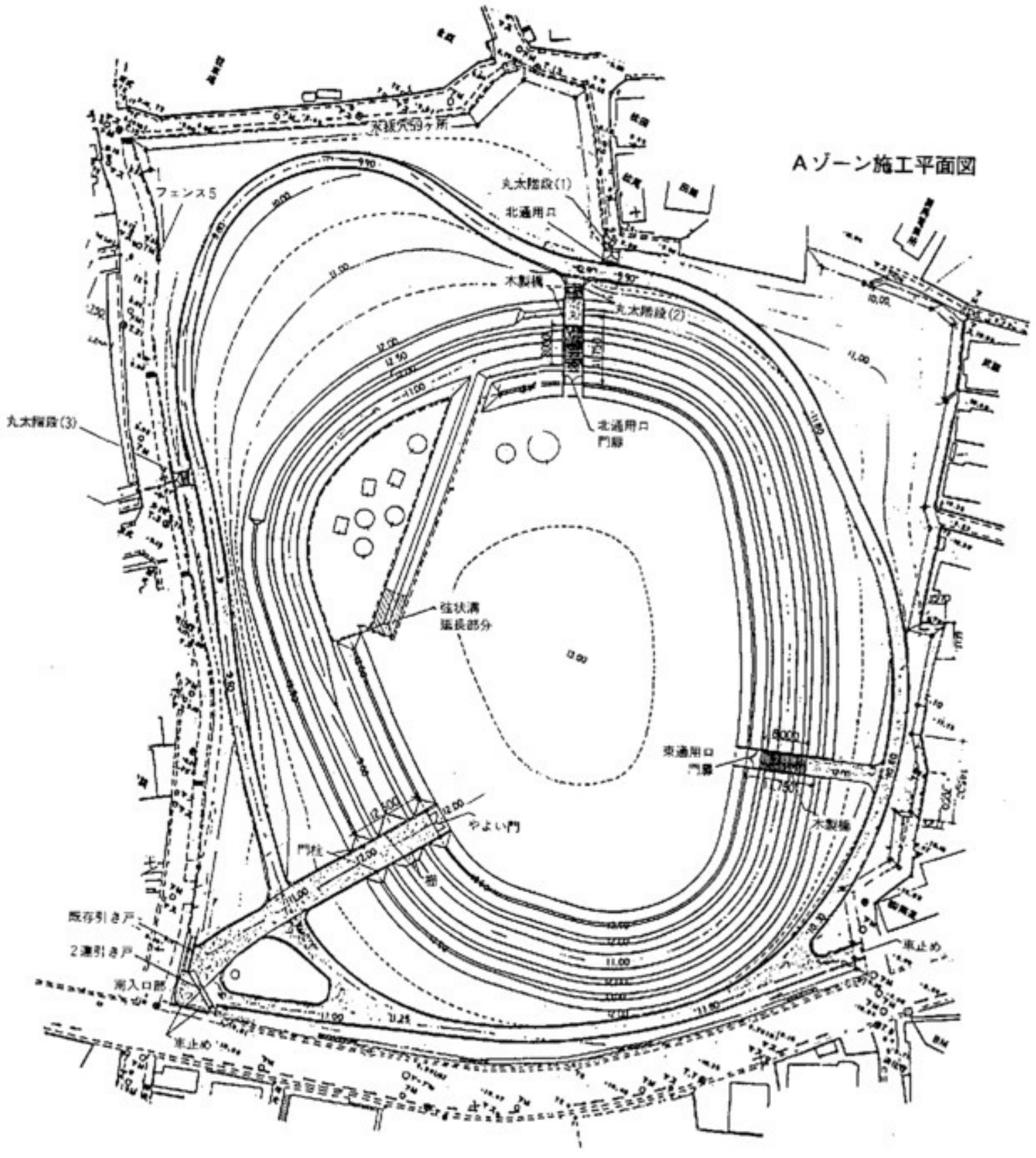
1　土塁の斜面を30°にして掘り上げた土の50%と100%を両側に盛る



2　土塁の斜面を45°にして掘り上げた土の100%を両側に盛る



環濠と土塁施工断面図


Aゾーン施工平面図
水抜穴59ヶ所
フェンス5
丸太階段(1)
北通用口
木製柵
丸太階段(2)
丸太階段(3)
北通用口
門扉
弦状溝
延長部分
東通用口
門扉
やよい門
木製柵
門柱
既存引き戸
2連引き戸
流入口部
車止め
車止め

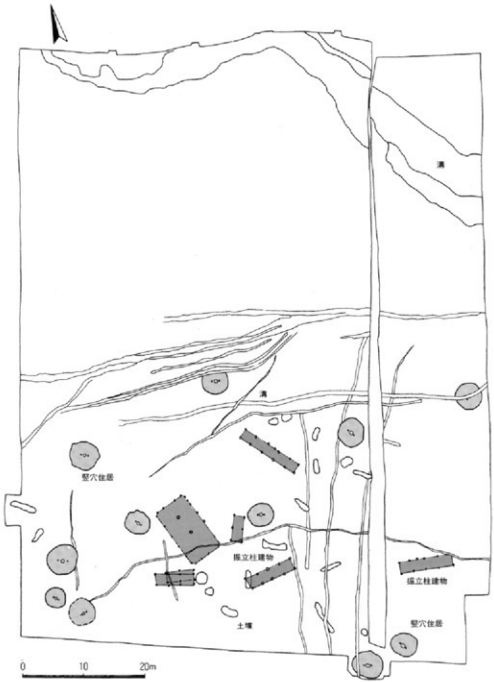
1　弦状溝の工事
2　法面の工事
3　弦状溝
4　環濠の排水管
5　土層のはぎ取り（平成元年）
6　調査整備委員会の視察（平成５年）
7　土塁の構築
8　土塁斜面の叩き
9　土塁のササ植え
10　環濠の除草作業

集落　竪穴住居　ムラ人のすまい

環濠の中心にあった通津寺の境内では、昭和44年に納骨堂建設に先立って本堂の北側で確認調査が行われました。弥生時代中期以前の方形竪穴住居跡が１軒発見されていたので、昭和63年～平成元年の全面発掘で環濠集落の全貌が明らかになると期待されました。

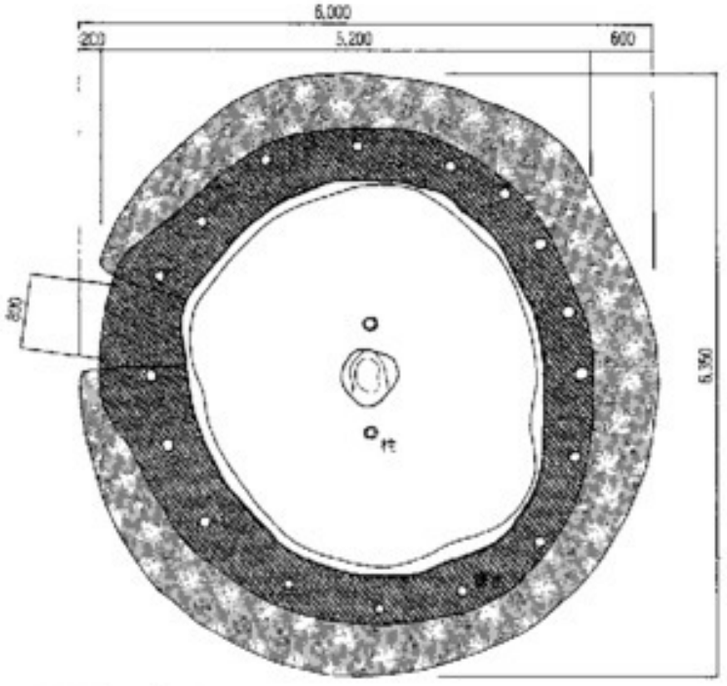
環濠の外側では、弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居が計30軒以上発見されましたが、肝心の環濠内側は、近世からの墓地や耕作などで予想以上に激しく削られ、竪穴住居は残っていませんでした。板付弥生のムラの集落を復元するには、福岡市内や近郊の発掘例を参考にせざるをえません。夜臼式土器期の二重環濠の那珂遺跡や、たくさんの木製品が出土した福岡国際空港の雀居遺跡のように、弥生時代開始期の重要な遺跡が相次いで発見されていますが、板付遺跡のように環濠集落全体が掘り出された例はほとんどありません。さいわい、平成４年、福岡市の東に接する粕屋郡粕屋町江辻遺跡で夜臼式土器期の直径４ｍ前後の円形竪穴住居が11軒発掘され、この遺跡をモデルにして板付弥生のムラの集落配置を検討しました。このような竪穴住居は、韓国松菊里遺跡で発見されていることから、「松菊里型住居」と呼ばれています。日本では弥生時代開始期前後の遺跡で発掘されることが多く、弥生文化とともに入ってきた新しい建築様式と考えられています。床面中央に土壙があり、その両側に穴があるのが特色です。中央土壙は、焼け土や灰が残っていないことが多く、炉跡と断定はできません。また両側の穴も棟を支えていた柱穴とするには、間隔が狭く、直径も小さいことから問題があります。しかし、床面には他に柱穴と考えられる穴がないことなどから、中央の二つの穴を棟持ち柱とする構造に設計し、板付弥生のムラでは12軒を復元しました。また、板付遺跡の南西900ｍにある博多区諸岡遺跡で発掘された方形竪穴住居も２軒復元しているので、それぞれの構造の違いがわかるでしょう。

工事中の板付弥生のムラ

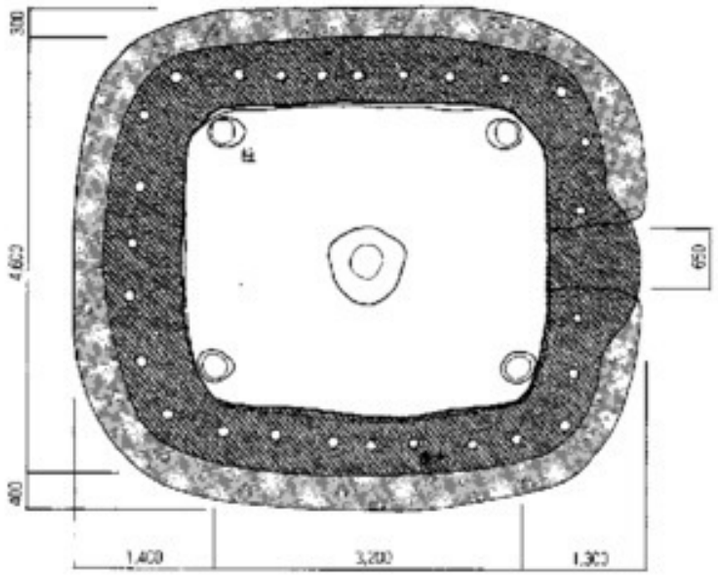


江辻遺跡の発掘作業

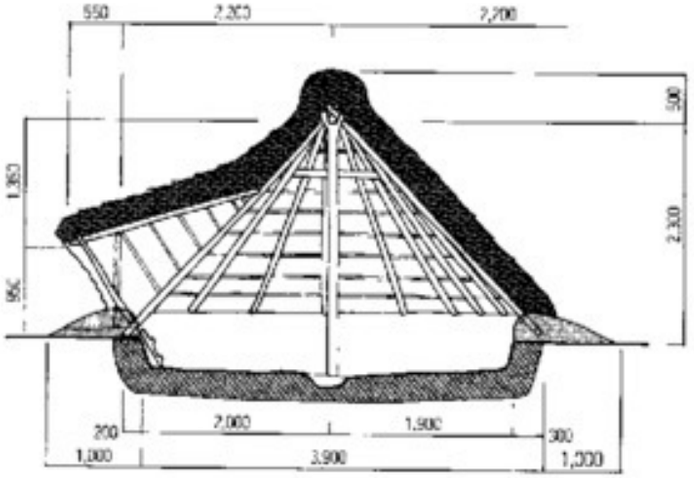
福岡県粕屋町江辻遺跡の集落
（縮尺1／600）

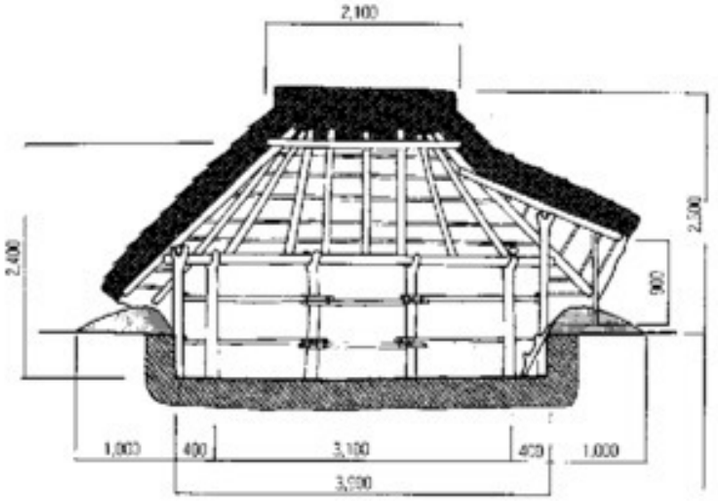


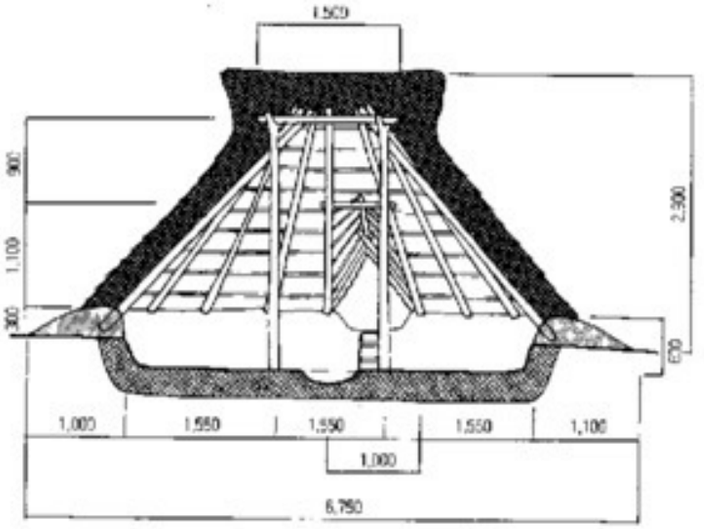
円形竪穴住居

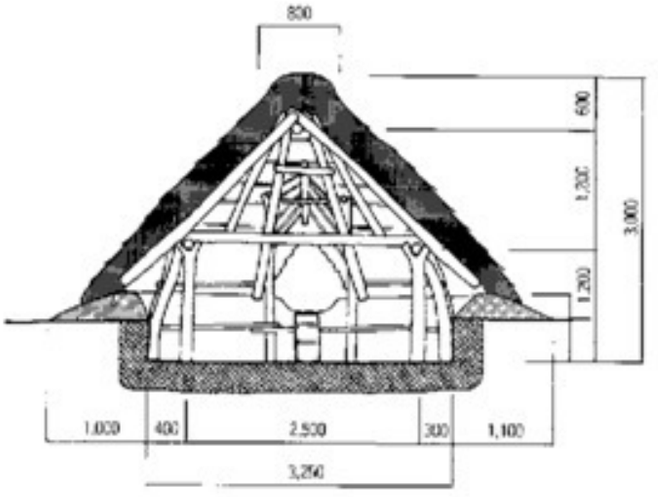


方形竪穴住居









竪穴住居の配置については、江辻遺跡の他に福岡県太宰府市前田遺跡、小郡市一の口遺跡など多くの遺跡を参考にして、中央に広場的な空間を開けるように土塁に沿って配置しました。竪穴住居の屋根材はカヤを用い、逆葺きにしています。また1軒ごとに葺き方や棟の仕上げを微妙に変えて個性を出していますが、屋根は強風の影響を受けやすく、計画的な補修が必要です。また、屋根に土を塗って保護するなど実験を重ね、この地の気候、降水量などにもっとも合った方法を確かめる計画です。内部には煙感知機とスピーカーを設置し、板付遺跡弥生館から管理や解説ができるようになっています。

竪穴住居の構造、配置、そして環濠内側の使い分けなど、わからないことがあまりにも多すぎ、事実と異なるかも知れません。実際に宿泊や農作業などの実生活を通して、住まいとして、また集落としての構造や機能を考え、修正して事実に迫るのも史跡整備の重要な役目です。

2

3

4

5

6

7

1

8

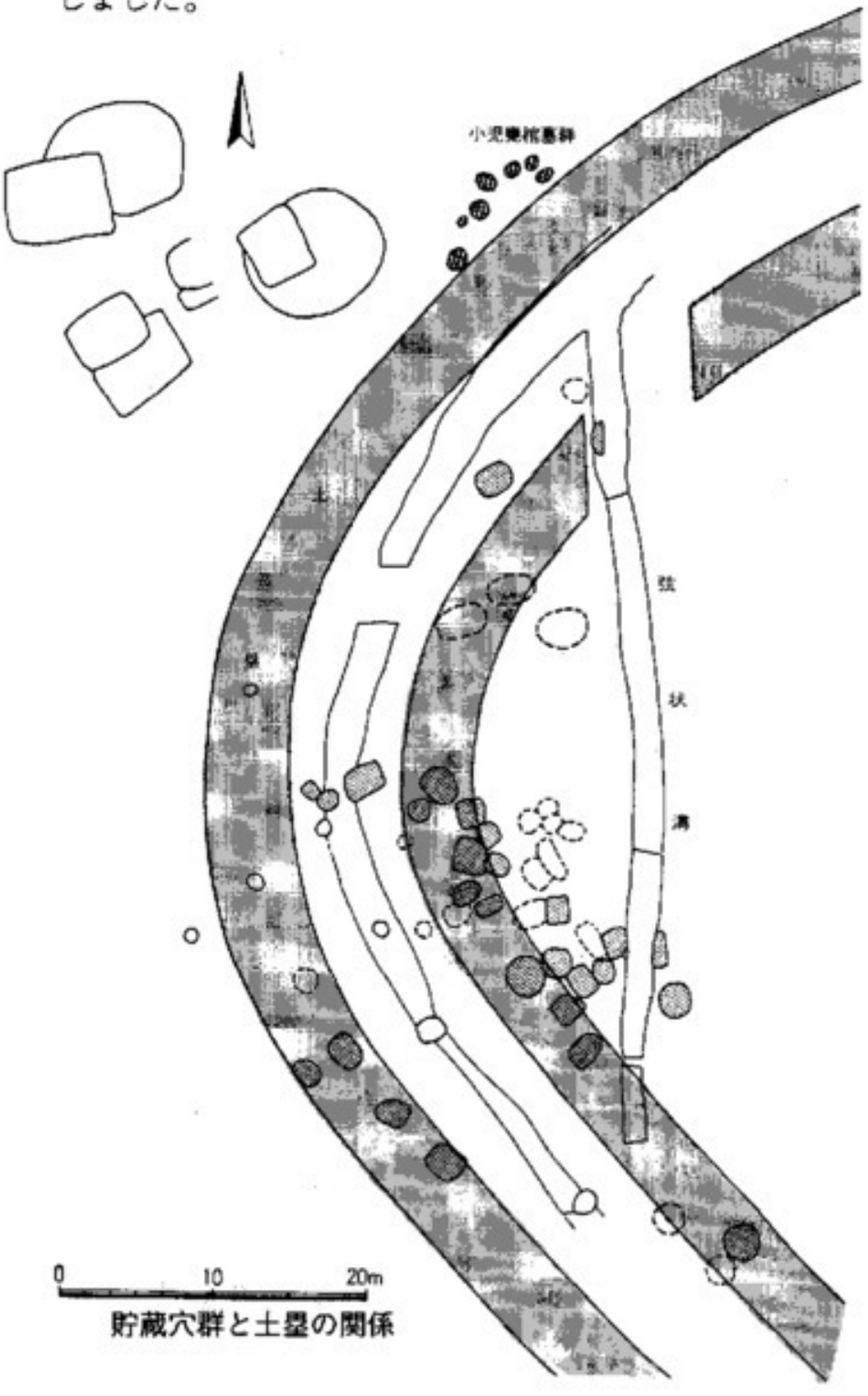
9

1　見学に来た子供たち　3　棟持ち柱を組む　5　カヤを葺く　7　方形竪穴住居　9　カヤ葺き職人のみなさん
2　床面の転圧　4　骨組み　6　完成した円形竪穴住居　8　立ち並んだ竪穴住居

貯蔵穴

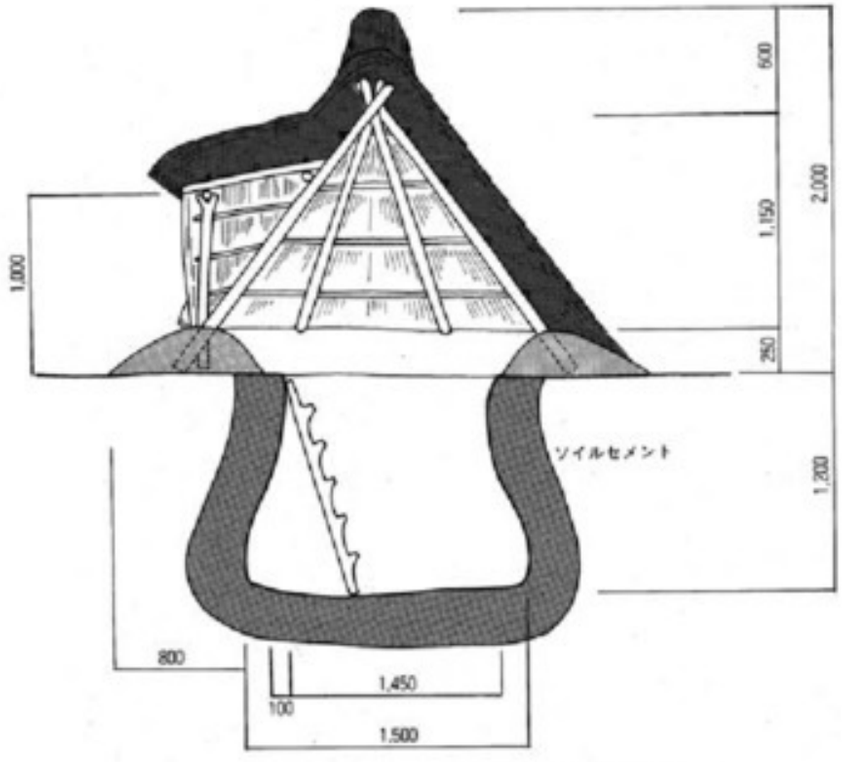
食糧や種籾などを保存した貯蔵穴は、環濠のある中央台地でこれまで80基以上発見されています。昭和26年から始まった日本考古学協会の調査では、弦状溝と環濠（当時は弧状溝と呼んでいた）の間で23基、外側で６基の計29基が発掘されました。この報告書である『日本農耕文化の生成』によると、柱穴のあるものと断面袋状のものに分類し、その機能について中国大陸で見られる灰坑との類似性を指摘する一方、穀物の貯蔵に適していたかどうか疑問も出されています。福岡県小郡市津古内畑遺跡や宗像市長尾遺跡のように貯蔵穴群だけを溝で囲んだ遺跡も発見されていますが、板付遺跡では、弦状溝付近だけに集中しているわけではありません。おそらく日常使用するものは各住居の近くにあり、来年の種籾のように集落全体で保存管理するものは、火災などの対策から集落から隔離したものと思われます。このような発掘資料から、円形貯蔵穴12基、方形貯蔵穴８基の計20基を竪穴住居の近くと貯蔵穴群に分けて復元しました。このうち、６基は竪穴も掘り込み、籾や木の実などを実際に貯蔵しています。史跡地南側の県道を挟んだＦ－６ａ地区で発掘された木蓋の痕跡を残す貯蔵穴の深さが１ｍあったことから、１ｍ前後の深さとし、ソイルセメントで壁を補強しているので、梯子で降りることもできます。

ところで貯蔵穴群のいくつかは、廃棄されたあと溝が掘られ、また切りあっているのもあるので、すべてが同時期にあったわけではありません。また土塁が環濠の両側に築かれていたとしたら、図のようにほとんどが土塁の下に隠れるという矛盾が出てきます。環濠の土層や貯蔵穴の時期差などあらためて検討しなおす必要がありますが、今回の復元では、管理棟の板付遺跡弥生館から環濠内側が望めるように、外側土塁を低くし、貯蔵穴群には柵列を巡らす方法にしました。

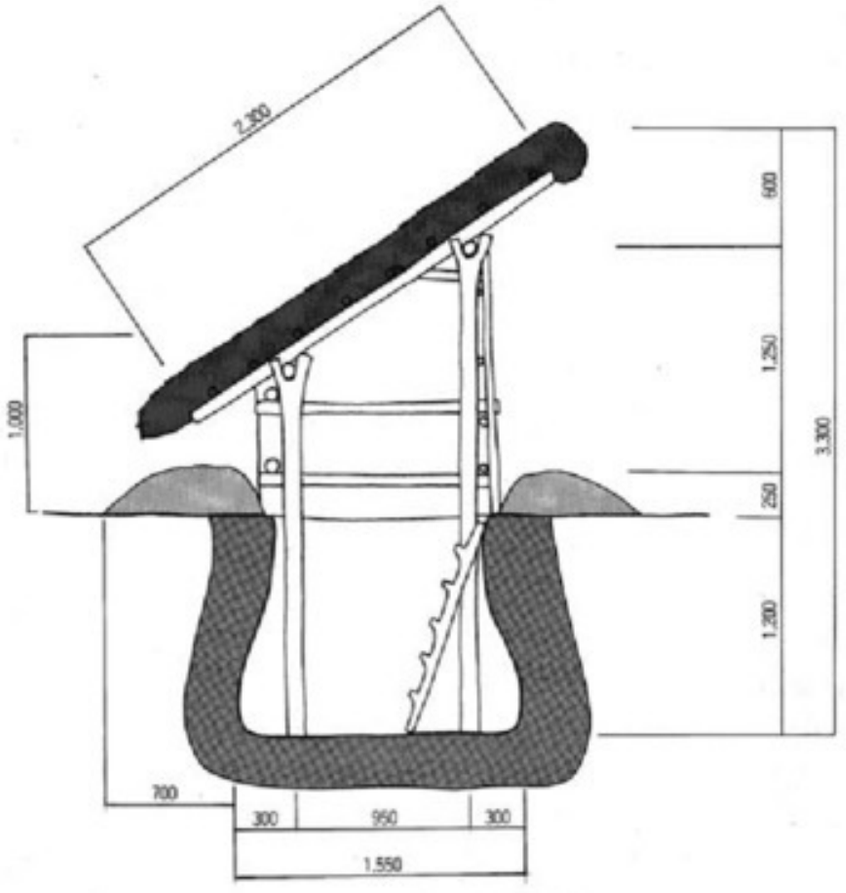


貯蔵穴群と土塁の関係

ムラ人の食糧保存法



円形貯蔵穴復元図



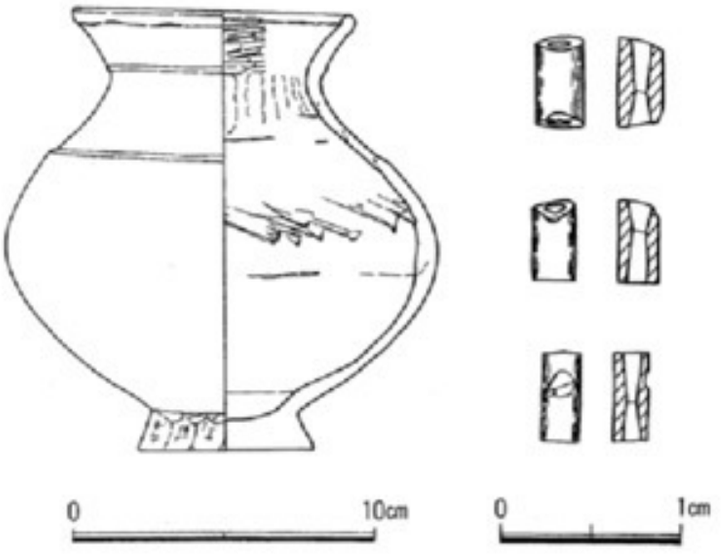
方形貯蔵穴復元図

溝に取り囲まれた貯蔵穴群（平成６年３月撮影）平成６年度に柵を巡らした

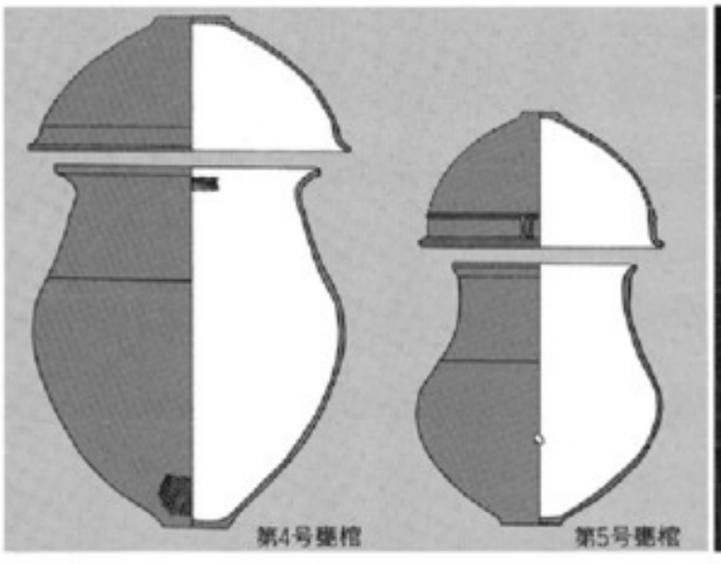
墓　地　子供たちの墓

ムラ人たちが死ぬと、大きな甕という土器に入れる甕棺墓、地面を長方形に掘ってそのまま入れる土壙墓、板で棺を作った木棺墓などに埋葬されました。史跡地内とその周辺の発掘で弥生時代の墓地が5か所で確認されています。もちろん、すべてのムラ人がこのような墓に埋葬されたのかよくわからないし、また5か所の墓地が同時に使われていたわけでもありません。

現在、板付北小学校になっている北台地では、多くの甕棺墓、土壙墓、木棺墓が見つかり、板付弥生のムラの共同墓地と考えられています。また、環濠部の全面発掘で環濠の北側に接するようにして7基の子供たちの墓が見つかりました。小さな壺に鉢をかぶせ、うち4基には、小壺や装身具の管玉が副葬されていました。おさない子供の死を悲しんで、ムラのすぐ近くに埋葬したのでしょう。今回、この子供たちの墓地を復元しました。埋葬の状態を露出展示するために、壺と鉢は土器としての質感だけでなく耐候性にすぐれた強度が必要です。このため、佐賀県有田町で開発された「火のはに」という現在の製磁技術で製作しました。



副葬されていた土器と管玉

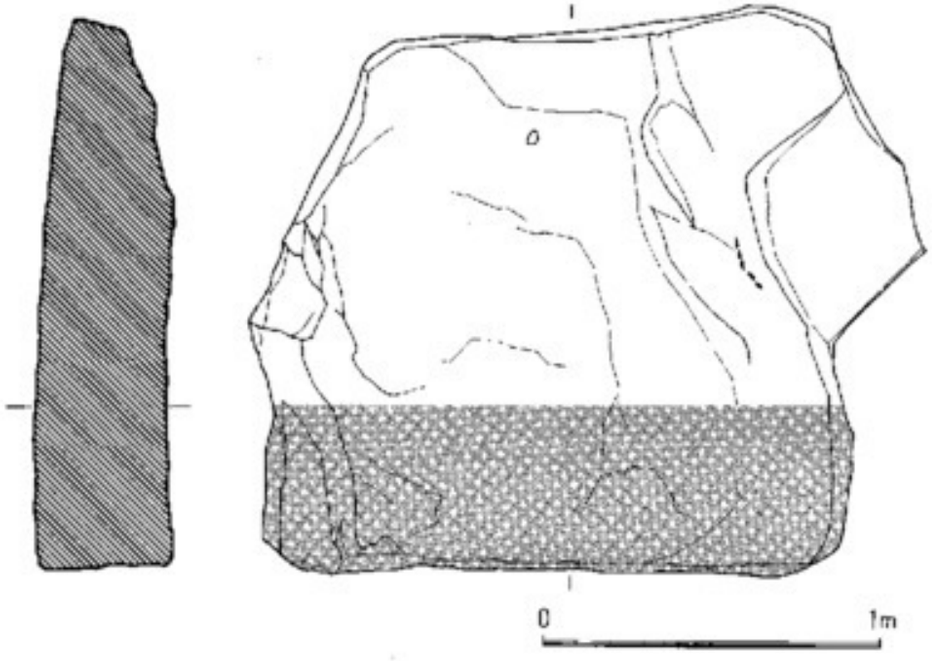


復元した壺と鉢

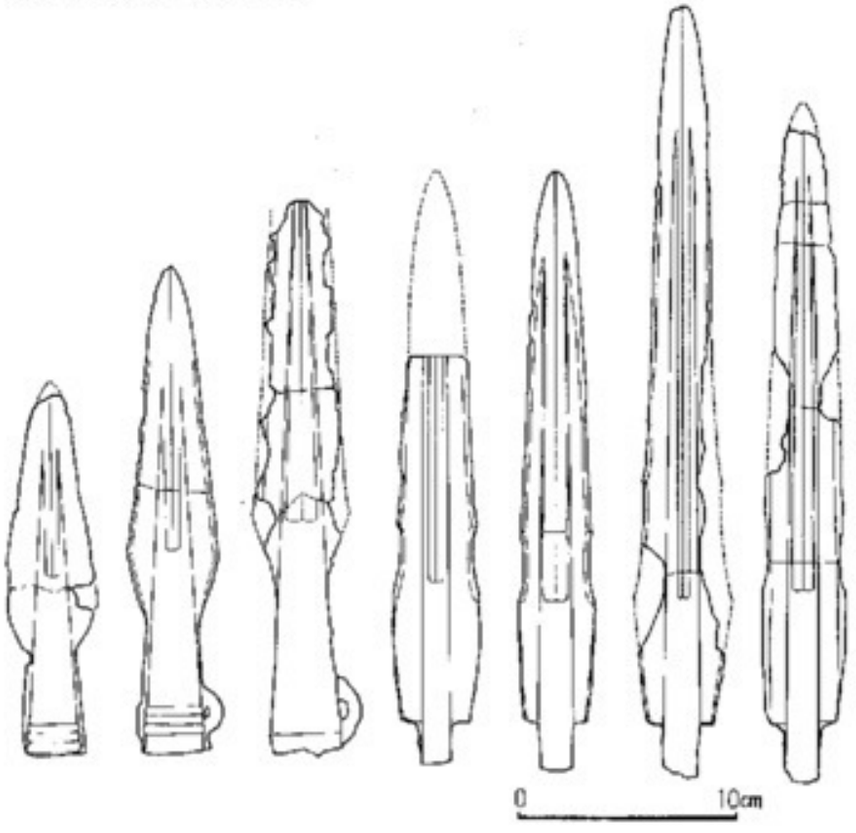
墳丘墓　ムラ長たちの墓

板付弥生のムラには、普通の共同墓地と違う墓地がありました。大正５年（1916）、村人たちが深田と溝に土を運ぶために、通津寺の南東の板付田端というところにあった小高い土盛りを切り崩していました。すると数基の甕棺から朝鮮半島で作られた銅矛３本と銅剣３本が発見されました。九州大学医学部の教授であった中山平次郎博士は、現地を調査して、翌年『考古学雑誌』に報告しました。その論文によると、一丈程の円墳状の高まりの、地表から４尺～５尺（１尺は約30.3cm）の深さで口を合わせた甕棺が６基あらわれたということです。その甕棺は口径約２尺、高さ約３尺の大きさでした。今は残っていませんが、中山博士が採集された土器片から推測すると、弥生時代前期末から中期前半ごろ（紀元前２世紀中）と考えられます。このころ板付弥生のムラの環濠はほぼ埋まり、ムラが環濠の外に拡大していた時期にあたります。

墓地全体が小高く盛り土されていたことなどから、福岡市西区吉武遺跡や佐賀県吉野ケ里遺跡でも確認されている「弥生墳丘墓」と同じだったと思われます。しかし、これらの遺跡よりも数多くの青銅器が副葬（現在、東京国立博物館に保存されているが、銅剣が４本に増えている）されており、板付弥生のムラだけでなく周辺のムラをも指導、支配するような強い権力を持ったムラ長が、すでに登場していたことを示しています。この墳丘墓の正確な位置はわかりませんが、その上にあった大石は、地元に大事に残されていたので、史跡の南東隅に移築し、説明板を設置しました。



墳丘墓の上にあった大石

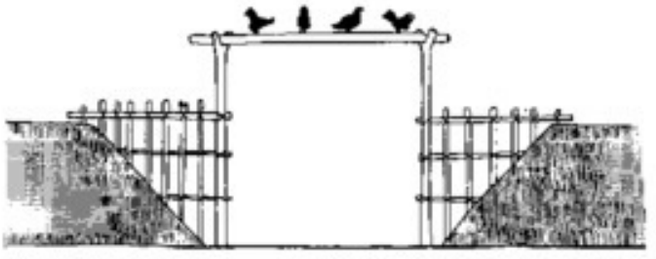


副葬されていた銅矛（左）と銅剣

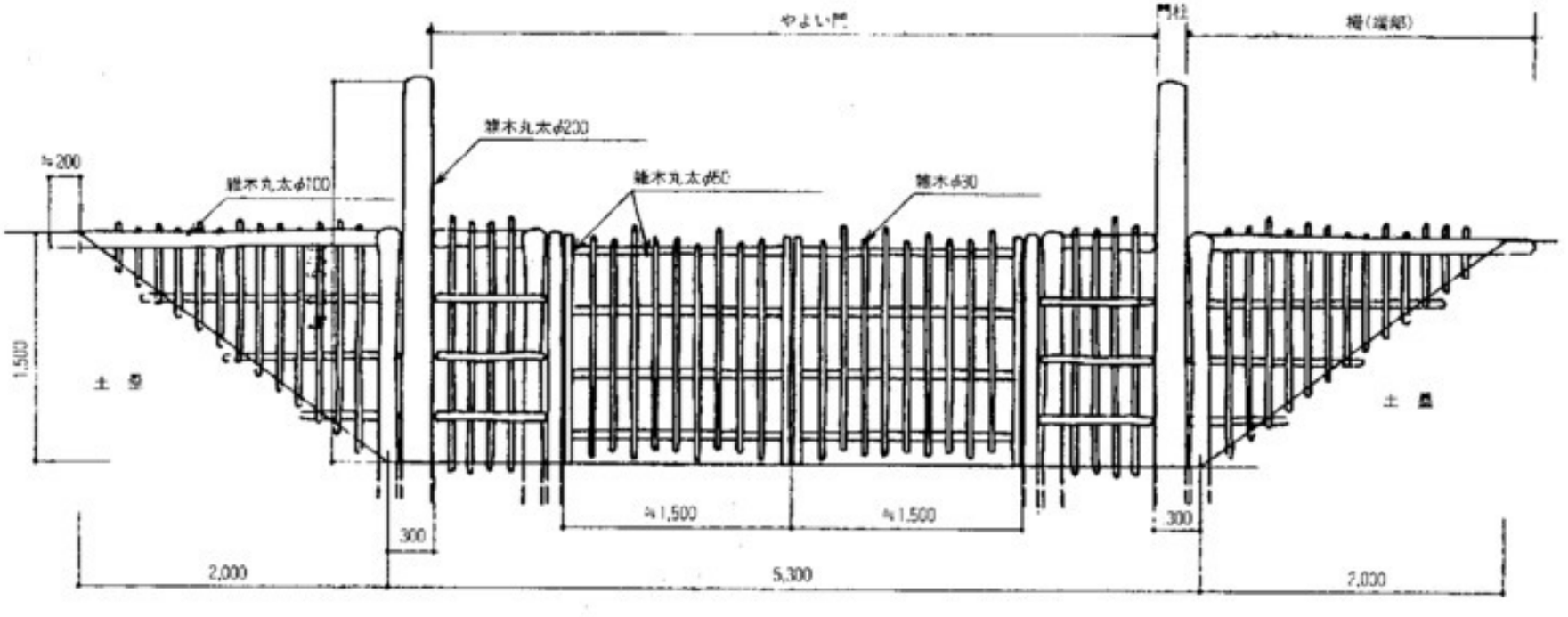
弥生の道と門　ムラの入り口

ムラを取り囲んでいる環濠を空から見ると、卵のような楕円形になっています。全面発掘するまでは、完全に一周していると考えられていましたが、南西部で幅約４ｍが途切れており、ここがムラの入り口ということがわかりました。ムラ側から見ると、その向かいには「縄文水田」が発掘されたＧ－７ａ区です。ムラ人はここから農作業に出かけたのでしょう。

環境整備では、ここを板付弥生のムラの正門として、弥生の道と門を復元しました。環濠部は、遺跡保存のために２ｍの盛土をしているので、入り口からすると４％の傾斜になっています。弥生時代と同じように地肌を露出して復元しようと２年間実験、観察しましたが、雨水や見学者の歩行で凹凸になるため、透水性の洗い出し舗装で施工しています。



板付遺跡では、発掘調査で門が確認されているわけではありませんが、全国数か所の遺跡で門柱と推測される穴が発見されていることから、門を復元しました。また、門の上には、中国大陸や朝鮮半島で民俗例として知られ、日本でも弥生時代の遺跡から発掘されることの多い鳥形を掲げることも考えましたが、福岡市内で発掘確認されるまで待つことにしました。



弥生の門施工図

植　栽　ムラ人の生活に役立つ木を

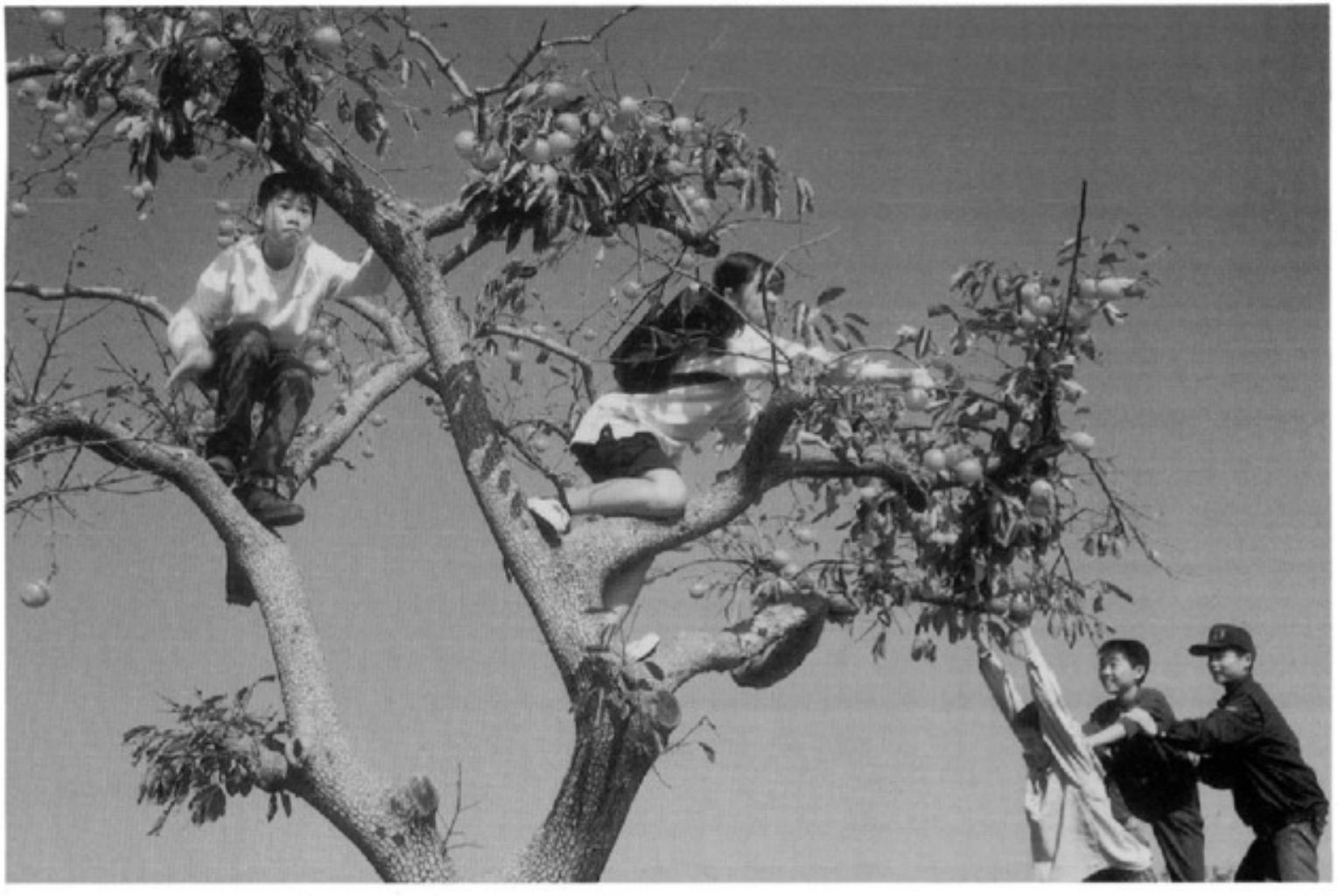
史跡整備の植栽は、周囲の風景から遮断して当時の自然景観を復元したり、また公園のような休養場所にする目的で行われます。

板付遺跡では、花粉分析や出土木製品の樹種同定などの結果をもとに種類を選定し、次のような方針で植栽しました。

1．遮断ではなく、周囲の民家からも楽しめるようにする
2．ムラ人の生活に役立っていたと思われる植物を加え、さまざまな活動に利用する。
3．環濠内側は、できるだけ人工的な植栽を避け、自然にまかせる。
4．板付弥生のムラの生活が説明できるようにすべての植物に物語性を持たせ、板付弥生のムラを理解する重要な展示資料とする
5．公有地化以前の木は、そのままにして植栽計画の中に取りこむ。

樹木や草地は、人が栽培や保護しないかぎり、自然の営みの結果として生長します。今回一度に植栽工事をしましたが、どの植物も昆虫や鳥、ムラ人のために役立つように、そして地元の方々が親しめるように大きく育つことを願っています。

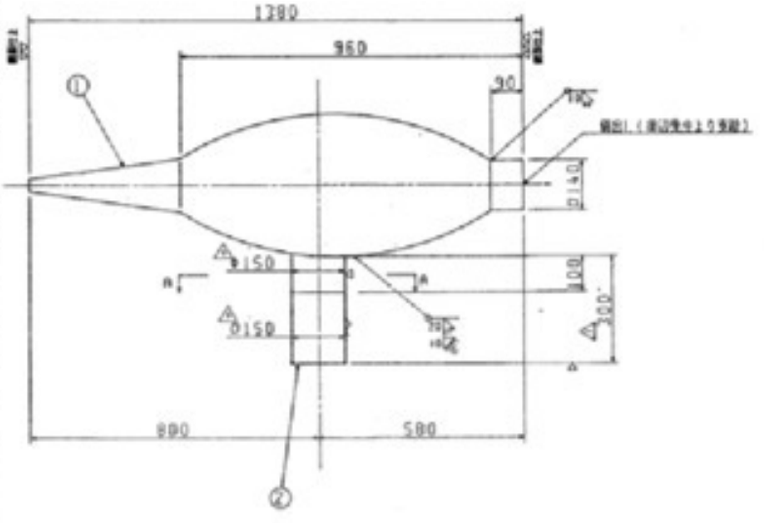
柿ちぎりの子供たち（民家の庭先にあったもの）



史跡名称板と標柱

A、Bゾーンのそれぞれの入り口には、板付遺跡の名前や、指定年月日などを彫り込んだ史跡名称板を立てています。板付遺跡の看板の役目をはたしていますが、白御影石の円柱で作ったAゾーンの名称板の上には、彫刻家田邊光彰氏に制作依頼した「籾」の作品を設置し、県道を通る車からも、すぐに板付遺跡とその内容がわかるようにしました。作品「籾」は、この板付遺跡で日本で最初の米作りが始まり、日本独自の歴史や文化が育まれたという歴史的な事実のシンボルとしてだけでなく、生命力あふれる「籾」に、地球や人間社会の未来を考えようという作者の強い主張が表現されています。

Bゾーンの名称板



Aゾーンの史跡標柱（「籾」田邊光彰氏作）

モニュメント 籾をおもう

彫刻家　田邊　光彰

私は、常々稲こそ日本を支えてきた力であり、農耕文明から生まれた秀でた思想こそ、日本のバック・ボーンであるとの考えのもとに「籾」の制作を展開してきたが、いま、ますますその想いを深くしている。

現在、我が国は水準の高い経済力をもち、巨大な人工化が急速に進んでいるが、ともするとその原点の農を見失いつつある。そしてこのことにより農耕文明から生まれた考え、美意識、また、日常でのなにげない美しい立ち居振る舞いなど、多くの優れたものが急速に失われようとしている。しかし、これら自然との共存のながい道のりから生まれた優れた思想こそ日本を支えてきたものであり、バック・ボーンなのである。

私は「籾」の制作を通して、その奥にある深いものを表現しなければならないと思っている。そしてそれはもちろん籾を表面的にそっくり模倣するようなものではない。

いま街づくりのなかで、新しいモニュメントが各地に出現してきたが、単なる新しさやちょっとしたやすらぎのためのもの、または懐古趣味のものが目につきはじめている。しかし、私は、いまこそ「籾」なのである。

日本は、今世紀になってその実力が（戦争ではなく）世界史の中に登場したが、このような小さな島国が、注目される程になったその背景にはなにがあったのか、いくつかのことが指摘されるが、なかでも二千数百年前に大陸から籾（種として）が、人の手によりもたらされ、それを丹念に丹念に作り改良したその行為が、次第に我が国の人々の特性となり、工業の「ものつくり」に移行したことは、疑う余地もなく、稲という存在がいかに重要な役割を演じてきたかが、分かると思う。しかし、また私たちは「ゆたかさ」と引換えに多くの物を失い、欠点を持ちはじめている。このような中で、深く思考しないでの新しい街づくり、人づくりであったなら、21世紀にむかう子供達（もちろん私達も）は、一体どのように進むことになるのだろうか。私はこのようなときだからこそ、その原点には何かを見据え、また見直しての「籾」なのである。

私は、「籾」の作品を通して、それも意味の深い地域につくりたいと思っている。それは大きい小さいではなく、私達の生存をかけた提案であり、象徴物になることと思う。そして、またそれは21世紀への真の贈り物なのである。

1993年３月

制作中の田邊氏

説明板　サイン

板付弥生のムラの各施設を効果的に活用し、大事にしていただくために、利用案内板、総合案内板、市内地形模型板、復元遺構説明板、モラル・誘導板などを設置しています。見学者は環濠集落部に入る前に、まずガイダンス施設の板付遺跡弥生館に案内します。ここで、板付弥生のムラを十分に楽しんでもらうために整備施設、復元根拠、そして整備趣旨などの情報を提供します。展示資料や映像で、いろんな不思議に出会い、疑問を持ったムラ人(見学者)は、市内地形図で板付弥生のムラの位置を確認した後、サインに導かれてAゾーンの環濠集落に入ります。

各サインは、イラストやレリーフを多用しているので、文字が読めない小さな子供でも、触ることによってわかるように工夫しました。環濠内の復元遺構については、実物が目の前にあり、またムラとしての雰囲気をこわすことから、総合案内板にまとめて解説しています。また、必要な箇所には、英文、ハングルで併記しました。

これらの素材は、耐久性や耐候性だけでなく素材の温かみを重視して、磁器製陶板を使用し、コンクリート本体を御影石で化粧しました。

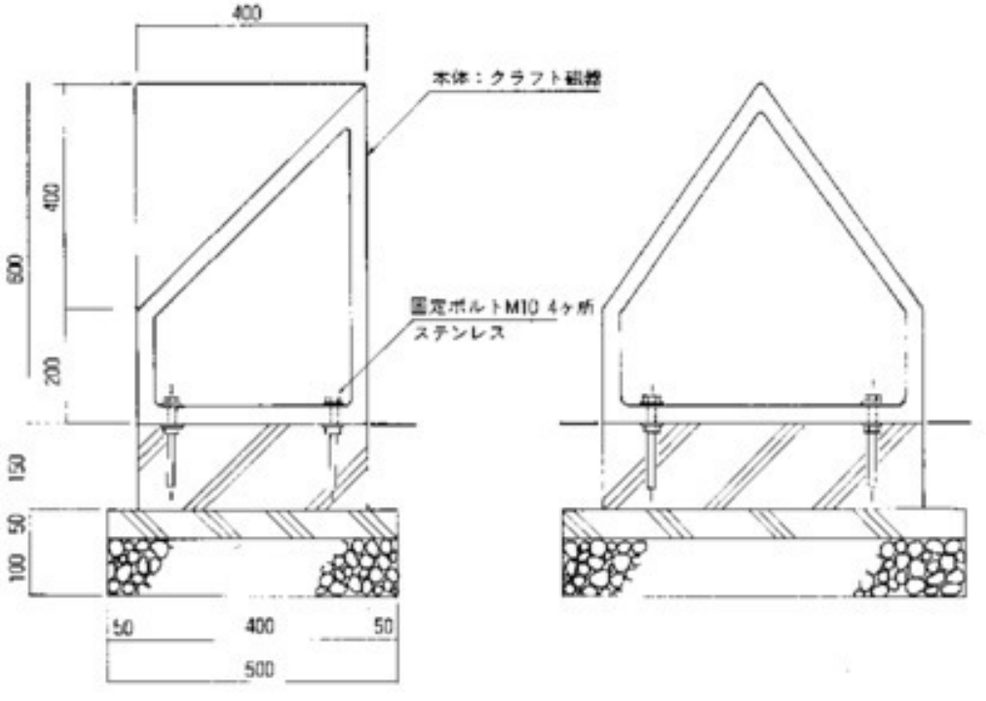
利用案内板、モラル・誘導サインは、クラフト磁器でシンプルなデザインとしました。また、子供の視線に合わせるとともに、風景を遮らないように低く作りました。

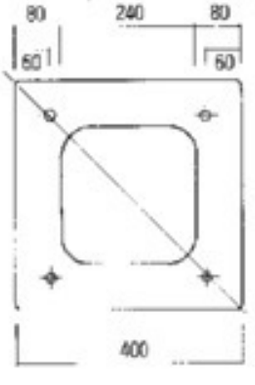
市内地形模型板

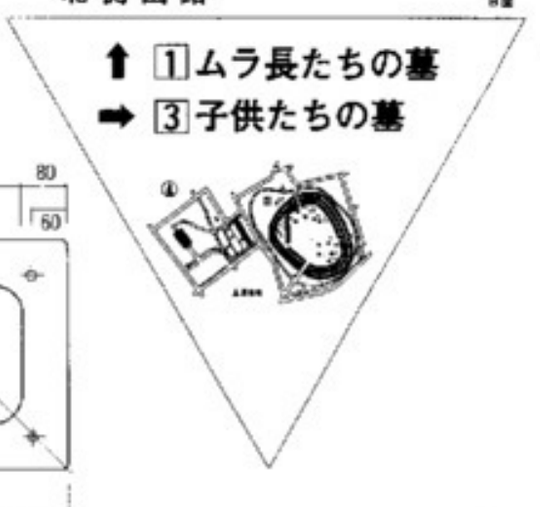
説明板、誘導サイン配置図

■ 1 総合案内板
2 市内地形模型
3 復元水田説明板
4 縄文水田説明板
5 土器・陶器説明板
誘導サイン

▼ 利用案内板
○ モラルサイン







誘導サイン柱図

園路　外柵

史跡整備を演劇に例えると、復元遺構、園路、植栽などは舞台装置にあたります。板付弥生のムラでは、見学者をムラ人にして、さまざまな劇を演じてもらう計画です。もちろん、体験学習だけを強要するわけではありません。芝に寝ころび、流れる雲をのんびり見たり、鳥の鳴き声を聞き、風を感じるだけの独演もいいでしょう。土塁の外側を一周する園路を弥生人になりきって散策するのも一活用法です。歴史の授業で訪れる子どもたちは、先生と一緒になって弥生ムラの集団劇をしたら、きっと歴史の授業が面白くなるでしょう。環境整備によって、このようなムラ人の多様な要望や目的（演技）に対応できる舞台装置を準備しました。

園路は、これらの劇の動線になり、また樹木管理や清掃時に使用します。環濠集落の景観に溶け込み、かつ耐久性を保つように透水性の砂利舗装としました。

福岡市では、『「福岡市型福祉社会」のための環境づくり指針』を定め、すべての人が安全で快適に過ごせる環境、施設作りを目指しています。史跡地内の限られた面積で、遺跡を保存しながら復元するという命題だったために、やや起伏のある園路となり、指標の趣旨が十分に果たせませんでした。板付弥生のムラでは、車椅子の人を見かけたら、自然に押して案内できるような雰囲気と、それを実行する子供たちを育てるのがもう一つの命題です。

園路と外柵（平成６年５月撮影）

安全、管理施設

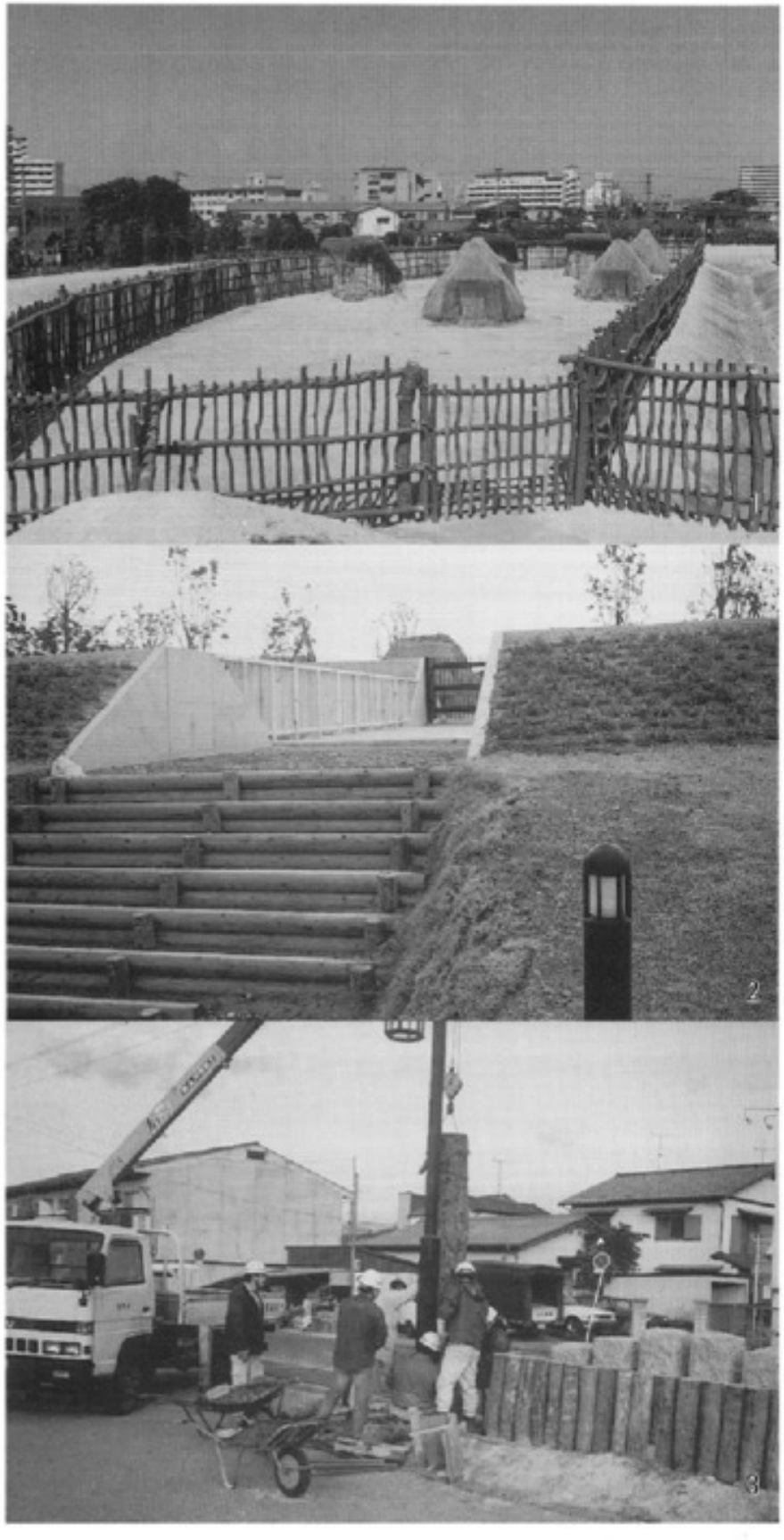
終日公開しているBゾーンに対して、竪穴住居や貯蔵穴など可燃性の復元遺構があるAゾーンは、夜間は立ち入り禁止となります。A、B両ゾーンとも安全に利用していただけるように、さまざまな安全、管理対策をこうじました。

土塁には、非常用の通用口を2か所にもうけ、環濠には橋を架けています。現代の施設であることがはっきりわかるように、土塁の切り通しは、コンクリートの壁にし、扉はアルミ製になっています。橋も角材を使用し、手すりを付けて落下防止としました。

また通用口のコンクリート壁には、散水栓とインターホーンを埋め込み、竪穴住居内部に設置したスピーカー、煙感知器と合わせて、板付遺跡弥生館で集中管理するシステムです。

史跡の外縁に巡らす外柵は、侵入防止が目的ですが、周囲と隔離するような意匠ではよけいな威圧感を与えてしまいます。弥生時代の史跡にふさわしいようにBゾーンと同じカシ、クヌギなどの丸太材を立ち並べた柵を検討しましたが、弥生時代の復元遺構と誤認される可能性があるので、普通のアルミ製にしました。正面入り口以外に、北と東西の3か所に通用口を設けていますが、その鍵を近所の方に預け、緊急時に備えています。

Bゾーンは、高さ4mの外灯が10基あり、日没時間に合わせてタイマーで点灯するので、夏は夕涼みなどに利用されています。Aゾーンは、夜間の利用はできませんが、安全対策やライトアップをかねて、園路に沿って20mおきに高さ1.5 mの照明を設置しました。団地や福岡国際空港に離発着する飛行機からは、環濠が浮かび上がって見えることでしょう。また、土塁の内側にはカシ類を密植し、冬期の北風に対する防火帯としています。



1　貯蔵穴群の柵列　　2　土塁の通用口
3　Bゾーンの丸太外柵

周辺整備とネットワーク

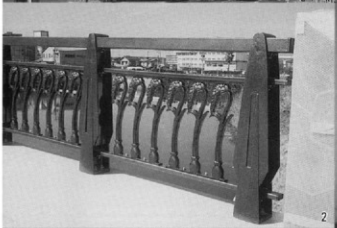
縄文水田の説明板と花壇

板付遺跡の史跡地内の環境整備は、福岡市教育委員会文化財整備課が担当しましたが、用地計画課や建築局、総務局など市役所全体で取り組み、完成しました。

再現した板付弥生のムラは、今から約2,300年も昔のムラなので、現代とは馴染めない異質な風景です。しかし、この空間は、多くの可能性を持っています。歴史教育の場としてだけでなく、現代生活の核となって地域おこしや子供たちの仲間作りにも活用できます。新たな都市文化創造の施設として定着させなければいけません。このためには、地元を始め、行政のいろんな分野からの提案を集め、実施する必要があるでしょう。

その一つが周辺整備として実現しています。土木局道路建設課は、板付遺跡の北約120 mに新設される下月隈－高木線を板付遺跡へのプロムナードとして、御笠川に架かる「板付大橋」の親柱や欄干に銅矛や稲穂をデザインし、歩道には土器や赤とんぼなどの化粧タイルをはめ込み雰囲気を盛り上げています。また博多区土木農林課でも、史跡の北側からのアクセスとなる団地のバス通りや板付北小学校横の歩道の整備を進めています。地元では、橋の名前を板付遺跡に関係深い名称にしたり、花壇を作ったり、また夏まつりや子供育成会や老人会などのゲームなどに利用するなど、日常生活に取り入れる活動が始まりました。

板付弥生のムラの完成によって、近くの史跡金隈遺跡や福岡市埋蔵文化財センターなど市内の遺跡とのネットワーク作りも可能になり、弥生人が活躍していた奴国全体を弥生人の視線と歩幅で回遊することが出来るようになりました。このように点としての歴史遺跡ではなく、福岡市の都市計画のなかに組み込まれた施設として機能します。板付弥生のムラは、弥生時代の風景ではなく、現代風景として福岡市民の誇りとなるでしょう。



1　道路案内標識
2　板付大橋
3　歩道タイル
4　自治会の夏祭り
5　踊りのみなさん
6　老人会グランドゴルフ

活用と活動　ムラ人づくり

平成元年度から始めた環境整備は、平成６年度に終了し、基本テーマであった板付弥生のムラが出現しました。しかし、復元された竪穴住居も貯蔵穴も弥生時代初めころの風景というだけで、語りかけても弥生人の声は聞こえてこないでしょう。板付弥生のムラの復元遺構は、舞台装置に過ぎません。見学者を自然のうちにムラ人としての役者に仕立て、弥生人を演じてもらうのです。見学者を劇に誘い、演出するには、弥生時代の技術を習得し、弥生人の心を持った弥生人を配置しておかねばなりません。

そこで、平成４年６月に開館した板付遺跡弥生館では、さまざまな主催事業を開催していますが、どれもムラ人養成実技講座の内容になっています。講座や教室の参加者は、板付弥生のムラのムラ人として見学者とともに自分たちのムラ作りに活躍します。

Ｂゾーン開園式　田植えを終えて(平成４年６月)
左より大塚初重明治大学教授、井口雄哉教育長、
桑原敬一市長、佐原眞国立歴史民俗博物館副館長

ムラ祭り

収穫への祈りや感謝をするムラ祭りを年2回開催しています。田植え祭りは、復元水田で板付北小学校の子供たちと市民のみなさんで田植え作業をします。収穫祭りは、弥生人のパレードや石包丁での穂摘み実験、用水路への感謝、昔の農具を使って脱穀や精米作業、布織りや藁細工の実演、板付弥生のムラ大賞の表彰式、そして弥生食の試食や餅まきなど、盛りだくさんの楽しい行事で一日中賑やかです。開催日は、「市政だより」などでお知らせしていますので、ぜひ参加してください。

1

2

3

4

5

6

7

1　ムラ長を先頭にパレード
2　弥生人の行列
3　穂摘み作業
4　板付弥生のムラ大賞表彰式
5　第2403回秋祭り記念撮影
6　もちまき
7　竹とんぼを飛ばす

板付弥生教室 自然に親しむ

板付弥生のムラの主人公は子供たちです。たくさんの子供たちが集まらないとムラとしての発展が望めません。「道草博物館」のねらいは、子供たちを主人公にした劇を上演したいからです。そのステージは、板付遺跡弥生館だけでなく、野外の自然そのものを活用します。板付弥生のムラの歴史は、米作りを通して自然の恵みを受け、ある時は猛威に耐えながら生活した積み重ねでした。この事実を理解するには、発掘資料を使った歴史学習の前に、子供たちと一緒になって自然の仕組みや不思議を探すことが重要でしょう。

板付弥生教室では、夏休み期間中に親子を対象にして「土器を作ろう」と「稲と田の虫の観察」を開催しています。「土器を作ろう」では、土に親しみ、土の性質を知ることが一番目の目的です。「稲と田の虫の観察」は、福岡県農業改良普及所の宇根豊さんが指導します。田んぼの中の小さな虫たちの観察を通して、自然界の営みや米作りの歴史が見えてきます。

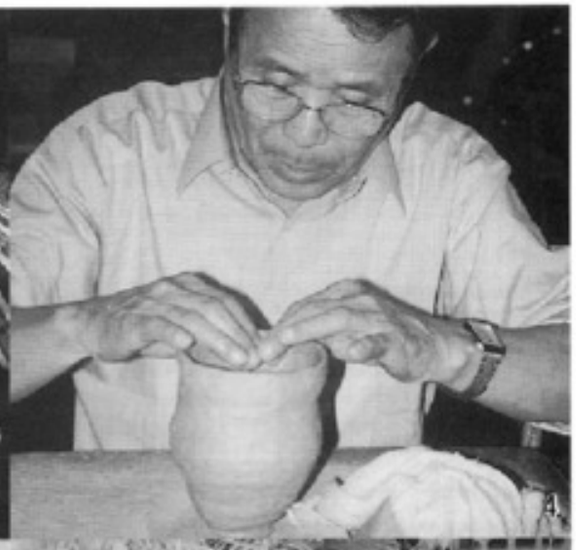
1　虫見板を使って指導する宇根豊さん
2　板付弥生教室「土器を作ろう」
3　田んぼの中のトンボ
4　クモ
5　菊月子守クモ

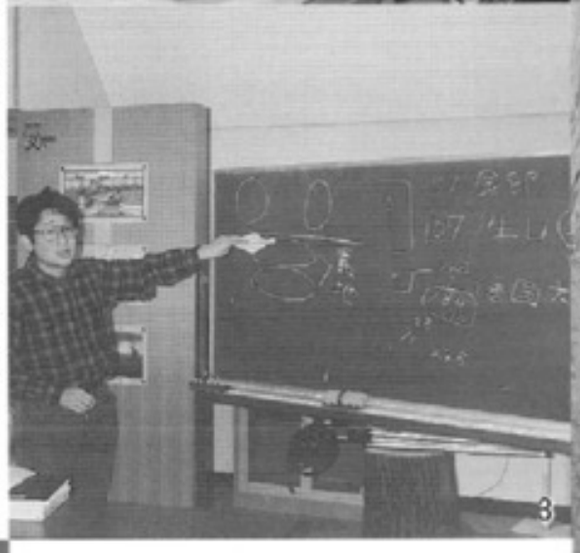
ムラ人養成実技講座 I 土器を作る

親子を対象にしている板付弥生教室では、子供と同じように大人も夢中になってしまいます。実技講座「土器を作る」は、そんな大人たちの要望によって始まりました。指導者の瓜生忠弘さんは、「板付遺跡保存会」の一員として活動され、また永く社会教育に携わられているベテランです。毎月１回開催で、午前中１時間は埋蔵文化財課の発掘担当者による講義があり、午後３時間は実技作業です。土器の完成だけが目的ではありません。土器の出現や用途、分布や変化など、土器が持っているさまざまな問題を、土器作りを通して考えるのが目的です。つまり考古学という学問から土器を見るのではなく、土器を作った弥生人の視線で土器を作り、学びとろうというわけです。

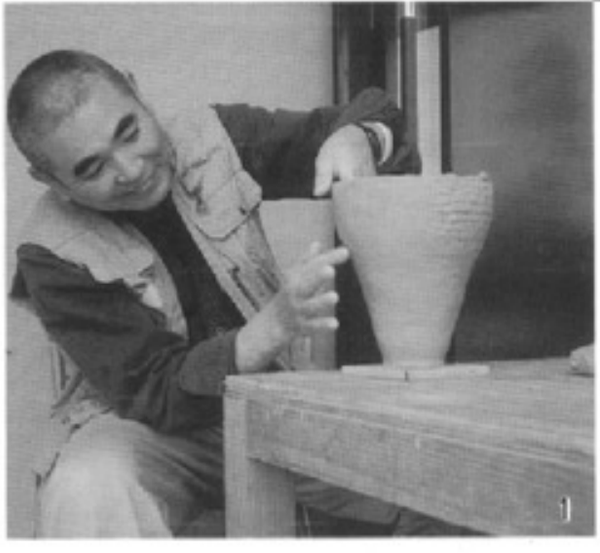
従来の学説や製作方法にとらわれない自由な発想や創造力、そして実験を尊重します。中国雲南省の土器焼き技術を日本で最初に再現習得したのも、成果の一つです。

2


4


3

5


1

1　指導の瓜生忠弘さん
2　粘土こね
3　講義する埋蔵文化財課の常松幹雄さん
4　甕を作る中原志外顕さん
5　雲南式土器焼きの準備
6　焼き上がった土器を手にして

6

ムラ人養成実技講座 II

今からおよそ2400年も昔、縄文時代と異なる土器作り、米作り、織物、金属器などの新しい技術と信仰や習俗などの文化を持った人達が海を渡ってやってきました。米作りのムラができ、縄文文化を基盤にした日本独自の社会と文化が生み出されます。弥生時代の始まりです。その人達がどこから、どのようなコースをたどって来たのか、アジア全体を視野にした研究が進められていますが、まだ定説はありません。

板付弥生のムラのムラ人は、新しい技術と文化の持ち主です。だから、米、土器、織物は当然作ることが出来ます。これらの技術こそ、弥生人がムラを維持し、生き抜くために必要不可欠なものであり、現代の繁栄をもたらした原動力でした。ところが、弥生人たちが獲得した技術は、生活環境や社会状況によって忘れ去られ、現在まで伝わっていないものがあります。発掘品の中にはすでにその用途が分からないものがたくさんあります。道具やそれを形とする技術は、生活の必要から生まれ、不必要になると姿を消してしまう運命だからです。しかし、現在の豊かな生活は、確かにこれら失われた技術の上に成り立っています。

ムラ人養成実技講座「貫頭衣を織る」は、弥生時代の衣服である貫頭衣の復元製作を通して、織物の技術史や忘れさった人間の思考を復元しようという目的で始めました。指導は国立民族学博物館共同研究員の鳥丸貞恵先生です。毎月1回開催のこの講座では、参加者の創意工夫を重視するために、従来の講座と違って材料や解説資料を一切準備しません。糸になる繊維も機織りの道具もすべて参加者が用意します。しかも弥生時代と同じような素材を利用することが義務づけされているので、各自が山野に踏み入って採集することになります。毎月の課題や宿題を必死に消化する過程で、以外に身近な所に繊維植物や織り具に再利用できる材料があることに気がつきます。教わって得た知識よりも試行錯誤で獲得した知恵こそ、現代生活に生かせることを体感します。

鳥丸貞恵先生

この講座は、平成7年度で3年目を迎えますが、各年の修了者は、次のステップの講座「弥生の生活を織る」に進みます。衣服としての布だけでなく、布の多様性や可能性を追求し、弥生人がそうであったように積極的に布を生活の中に取り入る作業を続けます。

板付弥生のムラでは、織物技術をマスターしたムラ人（受講者）たちによって、繊維植物の採集と栽培、蚕の飼育、糸作り、染色、織りなどの作業が日常的に展開され、見学者はいつでもその作業に参加できるように計画しています。

なお、参加者の作品や鳥丸貞恵先生収集資料を合わせた「アジアの織物展」を福岡市のアジアマンス参加行事の一つとして、平成6年9月、福岡市博物館で開催しました。期間中に同博物館で公開講座も開催し、多くの方々の参加がありました。

「貫頭衣を織る」　「弥生の生活を織る」

いま、板付弥生のムラがおもしろい

福岡県工業技術センター
材料開発研究所　　鳥丸貞恵

福岡市教育委員会文化財整備課の力武さんは、板付弥生のムラの農作業とお祭りの担当者。復元ムラを楽しく、おもしろくする仕掛け人である。その力武さんがあたためてきた企画で「貫頭衣を織る－弥生時代の知恵を現代に生かす－」という講座がスタートすることになった。私は、もちろん講師役を買って出た。

その“お知らせ”が新聞に掲載された日、朝から電話のベルが鳴り続け、彼のデスクはちょっとしたパニック状態になった。

昼前にいささか興奮気味の声で電話連絡がきた。

「すいません。定員先着30名はあっという間に突破して、断りきれなくて、40人になってしまいました。」そしてさらに、50人ものキャンセル待ちの人がいるという。

力武さんの嬉しい悲鳴が聞こえる。

この講座は、参加者全員が弥生ムラの住人になる。米とカラムシを植え蚕を飼い、山野で葛を採集して糸を作り、布を織る。

私は弥生時代のことは知らないから、手伝いは出来ても、教えることは出来ない。各自、考えてやってもらう。布の作れない人は、今年の冬の寒さに耐えられなくて、生きてはいられないだろう。また、体を保護する布がなくては、切りきず、虫ささされ、草まけなどに悩まされるだろう。

まさに、布を得ることは生きることなのである。人間生活をデザインすることの始まりである。

生活者の視点で、弥生時代においては革新的な板付特有の遺産にふれることにより、新たなる創造力を養うことが出来るように、講座を進めよう。

人類はどのようにして布を手に入れ、さらにそれをより美しいものへと昇華させていったか、その過程でいろいろの知恵を出し合い、染が生まれ、紋様が生まれてくるだろう、壮大な実験が始まる。

今まで収集したアジアの国々のアニミスチックな織物資料を整理して、この場に投げかけてみよう。織りに対する既成の概念を持たない40名もの人達は、どんな答えを出してくれるか、楽しみである。

その答えは、多分、私が1983年のインドの旅行以来探し求めているものにつながっていくだろう。という予感がする。

とまれ、アジアの国々を旅していると、私にはとても持ち合わせのない発想の、しかし、かってどこかで体験したようななつかしさを感じる、不思議な美しい布作りが、あちこちで行われているのを見る。このようなアジアに身を置くことは、とても心地良い。まだまだ、見たことのないものが、沢山あるにちがいない。

これからも旅は続き、それに伴って私のまわりを、これまで以上にいろいろの風が吹き抜けていくことだろう。

1993年初夏、幸せさがしの旅は、まだ終わらない。

「板付弥生ムラだより」第25号　1993年10月

1　鳥丸先生の講義
2　紡錘車で撚りをかける
3　繊維は自分で調達する
4　久留米絣の人間国宝森山虎雄さん
5　葛から繊維をとる
6　弥生土器を使って編み作業
7　板付遺跡弥生館の床で実技作業
8　飼育している天蚕
9　博多織の小川規三郎さんの話
10　「アジアの織物展」(完成した貫頭衣)

「貫頭衣を織る」活動記録

1期生（平成5年度）

4月
開講式
講義　「植物繊維を使ったアジアの織物」
　　鳥丸貞恵先生
実技　カラムシの採集と植えつけ

5月
講義　「アジアの絹」
　　鳥丸貞恵先生
実技　組み作業Ⅰ　竹皮を組む

6月
講義　「天蚕の話」
　　野田亮先生　福岡県林業試験場
実技　組み作業Ⅱ　草履を編む

7月
講義　「七夕の民俗学」
　　佐々木哲哉先生　田川市石炭資料館
実技　編み作業Ⅰ　腰ひもを編む

8月
バス視察
　福岡県林業試験場→八女市伝統工芸館
　→久留米絣人間国宝森山虎雄さん宅
講義　「繊維の取れる植物」
　　猪上信義先生　福岡県林業試験場
実技　森山虎雄さんの作業

9月
講義　「韓国の苧麻」
　　鳥丸貞恵先生
実技　製糸作業Ⅰ　カラムシ
　　機織り道具製作Ⅰ　紡錘車
　　韓国韓山苧麻朝市視察　16名参加

10月
講義　「福岡の竹細工」
　　倉富敏之先生　福岡県材料開発研究所
実技　機織り道具製作Ⅱ　糸作りカゴ

11月
講義　「地機と高機」
　　鳥丸貞恵先生
実技　織り作業Ⅰ　コースターを織る

12月　連続2回
講義　「ヨーロッパの布」「沖縄の染めと織り」
　　片岡淳先生　琉球大学
実技　織り作業Ⅱ　輪状整経

1月
講義　「博多織－私の仕事－」
　　小川規三郎先生　日本伝統工芸会
実技　染色作業Ⅰ　クサギで染める

2月
講義　「いろいろな繊維」
　　宮下征一先生　福岡県化学繊維研究所
実技　染色作業Ⅱ　ニワシバで染める

3月
講義　「人はいかにして布を手に入れたか」
　　鳥丸貞恵先生
実技　製糸作業Ⅱ
　　繭から真綿を作る
修了式

2期生（平成6年度）

4月
開講式
実技　カラムシの採集と植えつけ
　1期生の「弥生の生活を織る」もスタート

5月
実技　繊維作りⅠ　幕から繊維を取る
　　天蚕飼育Ⅰ　天蚕の卵つけ
　　染色作業Ⅰ　ヤマモモで染める
　　組み作業Ⅰ　竹皮を組む

6月
実技　組み作業Ⅱ　糸入れカゴを編む
　　倉富敏之先生　福岡県材料開発研究所
中国貴州省染織視察　1期生3人参加

7月
講義　「アジアの布」
　　鳥丸貞恵先生
実技　織り作業Ⅰ　カラムシの平織り

8月
講義　「韓国の苧麻」
　　鳥丸貞恵先生
実技　織り作業Ⅱ　草履を織る

韓国韓山苧麻朝市視察　18名参加

9月
講義　「韓国の苧麻」
　　鳥丸貞恵先生
実技　製糸作業Ⅰ　ラムシの経糸作り
機織り道具製作Ⅰ

『アジアの織物展』9月13日～10月16日
　福岡市博物館で開催　アジアマンス参加

10月
公開講座　福岡市博物館
講義　「アジアの原始繊維について」
　　鳥丸貞恵先生
実技　製糸作業Ⅱ　カラムシの糸作り

11月
講義　「地機と高機」
　　鳥丸貞恵先生
実技　織り作業Ⅲ　輪状整経

12月
講義　「中国貴州省の染織」
　　鳥丸貞恵先生
実技　織り作業Ⅳ　輪状整経

1月
講義　「中国海南島の染織」
　　鳥丸貞恵先生
実技　織り作業Ⅴ　輪状整経

板付中学校発展会の活動

平成４年９月より学校週５日制で第二土曜が休みになり、地域や家庭、そして各施設で、どのような対応をするか問題になりました。子供たちの活用を願っている板付弥生のムラにとって、またとない機会です。地元の板付中学校と相談して、「板付中学校発展会」という組織を作りました。その目的については、祇園校長の文章の通りですが、板付弥生のムラのことを学び、地域の文化財を誇りとする仲間を増やそうというわけです。毎月、弥生時代の子供と同じような遊びや労働を体験します。子供の喜ぶような楽な体験学習ではなく、収穫の喜びや感謝の心を一緒に味わうために、時には苦しい農作業にも挑戦します。

板付中学校発展会

祇園全禄板付中学校長

１．名前について

本校の校区内には、わが国の稲作文化の発祥のシンボル「板付遺跡」があります。この板付遺跡をはじめとして井相田、高畑遺跡があり、本校及び周辺地域は「弥生銀座」と呼ぶことができましょう。また、福岡市埋蔵文化財センター、板付遺跡弥生館（板付弥生のムラ）、史跡金隈遺跡もあり、多くの文化財や関連施設に恵まれています。

これらの貴重な文化財を大切にし、これからの社会に伝えていくとともに、新しい文化をつくりだしていくことは大切なことであり、次の世代を担っていく中学生の責務でもあると思います。

本校では、本校区内に平成４年６月26日（金）「板付弥生のムラ」が開園したことや、９月12日（土）から始まる学校週五日制による休みの有意義な過ごし方にかかわって、近隣にある遺跡を大切にするとともに、新しい文化の創造に参画するように願って、本校の生徒によるこのような会をつくりました。この会は、さきに述べている趣旨によって、特に遺跡を大切にするとともに地域の近未来の発展を願って、「板付弥生のムラ　中学発展（ばってん）会」と名付けました。

２．子どもたちになにを期待しているのか。

このような会をつくり、子どもたちが参画し、活動することを通して、子どもたちにどのようになってほしいと願っているのかについては概ね、次のように考えています。

（１）歴史好きの子になってほしい。自分の趣味・関心があることや自分のもち味を大切にし、一つのことに没頭できる子になってほしい。

（２）身近な地域にある遺跡・遺物などの文化財を大切にし、次の世代に伝えていく子になってほしい。

1

2

3

4

1　米作りを習う　　3　弥生時代の埋葬再現
2　昔の農具を使う　4　干し柿つくり

（3）全国的に有名な板付遺跡に誇りをもつとともに、文化財を幅広く大切にする子になってほしい。
（4）「板付弥生のムラ」を訪れる多くの人と接することによって、あいさつ、ことばづかいなど社会での人間関係の在り方を身につけた子になってほしい。
（5）自分の活動を多くの友達に語るとともに、この会の活動への参加を多くの友だちに呼びかけられるような子になってほしい。

3．発足までの経緯と組織について

前述のような会をつくりたいということを、8月の夏休みに入って、1・2年生に呼びかけをしました。呼びかけは主として、平成4年5月に「博多どんたく」で板付遺跡についてのキャンペーンに出演した本校の生徒グループを中心に行いました。約30人が集まりました。

8月7日（金）に約20名が市教育委員会文化財整備課の力武主査の講習を受けました。その後、9月1日（火）に学校で、この会の趣旨などについて説明をしました。

活動は通常は、土・日曜、祭日、また夏休み、冬休みなどが考えられます。特に本年度の9月からは、学校週五日制が始まり、第2土曜が休みになります。休みの過ごし方は、一人一人の生徒自分で考え主体的に判断して、行動できる力を身につけることを目指してるからです。

したがって、いろいろな過ごし方があってしかるべきだと思っています。いろいろな過ごし方の一つとして、この会の活動があるのです。

これらの日に、家族の人に相談しながら、「板付弥生のムラ」に出向いてほしいと思っています。できるだけ、友だちと誘いあって参加してほしいと思っています。地域社会の人々の参加も生徒にとって、大いに望ましいことだと思っています。

「板付弥生ムラだより」第13号　1992年9月

板付中学校発展会活動記録

1992年
8月　結団式　ムラ人登録
9月　弥生人の道具チェック　縄を編む
10月　保存食作り　干し柿と芋掘り
12月　弥生時代からの農具で脱穀作業

1993年
2月　臼と竪杵で精米作業
3月　弥生式土器で炊飯実験
4月　土器焼きと粥、鹿の焼肉試食
5月　愛鳥週間の巣箱作り
6月　魚釣り　弥生時代の漁法を探る
7月　体験発掘作業　板付弥生のムラを掘る
9月　土器作り　ムラ祭りの準備
10月　赤米の収穫
11月　弥生の楽器を作る
12月　正月準備　モチ米の脱穀精米作業

1994年
3月　弥生の色を染める
4月　プロミスリングを編む
5月　老人会とグランドゴルフ対抗戦
7月　弥生の葬式再現
8月　田の虫の観察
9月　地域文化フォーラム土器作り教室参加
10月　原始繊維で魚を釣る
11月　干し柿作り

1995年
1月　野草を食べる　七草粥

引率、指導の飯高常生先生と子供たちの熱心な姿に、一般の見学者や他の子供たちが興味深く覗き込み、引き込まれていきます。また、お年寄りから昔の話や米作りを習うなど、地域とふれあう活動も試みています。このような中学生たちの活動が評価されて、平成7年1月に福岡市中学校生徒善行者表彰を受けました。

板付北小学校の活動

史跡のある学校

1

2

3

福岡市の小学校では、地域の特性を授業や学校行事にいかした「特色ある学校作り」が進められています。史跡に隣接している板付北小学校では、“史跡のある学校”として、板付弥生のムラの探検、復元水田の農作業、模擬発掘、遺跡まつりなどの体験学習を実施しています。農作業は、５月の小石拾いと苗床作りから始まり、籾まき、田植え、田の草取り、虫の観察、稲刈りを済ませ、翌１月の餅つきで完結します。遺跡まつりは、学校に父兄や地域の方々を呼んで子供たちの創作劇やクイズで楽しみます。

この子供たちは、板付弥生のムラのムラ人として、ムラ作りに主体的に取り組み、史跡整備した板付遺跡を次代に引き継ぐ重要な役目を果してくれることでしょう。

4

5

6

7

8

9

1　籾まき
2　田植え
3　ビデオ撮影の渋田先生
4　模擬発掘
5　模擬発掘
6　稲刈り
7　稲刈り
8　板付遺跡まつり
9　もちつき

講演会『板付考古学』　街に出る活動

板付遺跡は、中山平次郎博士が大正６年、学界に初めて紹介して以来、弥生時代研究の中心となり、まさに「板付考古学」と呼ぶにふさわしい内容と成果を上げてきました

講演会「板付考古学」は、考古学に関連する分野の研究者に最近の研究動向や問題点などを、わかりすく解説していただき、市民のみなさんの関心を深めることを目的にしています。第１回は、環濠と米作りの謎に迫り、第２回は、アジアに視野を広げて、弥生文化の特色である織物の歴史を考えました。

実技講座や板付弥生教室は、板付弥生館で開催していますが、この講演会は、できるだけ多くの方々が参加できるように、板付遺跡弥生館から離れて福岡市博物館などの広い会場を利用しています。

講演中の大塚初重先生

第１回　『環濠と米作り』

平成４年11月29日　福岡市博物館　講堂

大塚初重　明治大学教授

「登呂から板付へ」

武末純一　福岡大学助教授

「環濠－弥生ムラの始まりと終り－」

吉留秀敏　埋蔵文化財課

「最古の二重環濠　那珂遺跡」

井関和代先生

第２回　『アジアの織物』

平成６年９月18日　福岡市博物館　講座室

井関和代　大阪芸術大学助教授

「タイの山岳民族について」

完成した板付弥生のムラ

おわりに

平成元年度から始めた環境整備は、平成6年度末に完了し「板付弥生のムラ」が誕生しました。いよいよ全面オープンです。基本テーマである「弥生時代前期の板付弥生のムラの復元」に当たっては、「板付遺跡調査整備委員会」、文化庁、福岡県教育委員会をはじめ多くの方々から熱心なご指導をいただき、学術的成果に基づいた再現をすることができました。

しかし板付弥生のムラは、都市の貴重な空間を占めていることから、歴史的風景を再現しただけではすまされません。どのようにしたら現代の都市景観に溶け込み、都市施設の一つとして機能できるか、つまり公共性をどれだけ発揮できるかということも重要なテーマでした。このため地元や見学者の方々、特に子供たちに親しまれるように、「みんなでムラ作りをしよう」というコンセプトで計画設計しました。先述したように、板付遺跡を訪れるみなさんをムラ人にして、ムラ作りに参加していただくというわけです。農作業などつらい仕事も積極的に取り入れていますので、従来の体験学習とは目的も方法も異なります。

平成4年6月、先にオープンした板付遺跡弥生館では、ムラ人養成を目的とした実技講座や教室を開催してきました。参加者は、弥生時代と同じような体験を通して、物作りや手作業の尊さを再確認するばかりでなく、高度に発達した現代社会が過去に置き忘れてきた知恵や思考を蘇らせ、それを手中にすることができます。このように無意識のうちに知的生産ができる、いわば生涯学習の場として、また子供たちの仲間作りの場所として活用していただきたいと考えています。

板付遺跡は、弥生時代のムラの再現が最終目的ではありません。弥生時代以来の人と地域の結びつき、そして人間性そのものこそ再現したいと思っています。

史跡

板付遺跡

環境整備報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第439集
1995年３月

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１－８
☎（092）711－4666

印刷　栄光印刷株式会社
福岡市東区松田１丁口９－30
☎（092）611－3838